

目次

目次	1
----	---

研究論文

ジェンダーと精神分析におけるヒステリー	
大木清香	5
神話へのミメシス—シルヴィア・プラス作品におけるジェンダー役割への不安	
クリストファー・サイモンズ	25
子育て中の親がもつシングルファザーに対する認識	
平沼晶子	51

研究ノート

通商政策機関—ジェンダーの主流化 VS 多様性の主流化	
サラ・ホートン	71
絵本に描かれた同性カップルと子どもたちにみる「家族」像 ——Patricia Polacco 作品 <i>In Our Mothers' House</i> を例に——	
堀内かおる	79

フィールドレポート

「性同一性障害」という医療言説に依拠した社会運動の形成過程	
田多井俊喜	93
“International Women’s Day” 100 周年記念によせて —“International solidarity is needed for international women’s day”	
南コニー	107

ジェンダー研究センター (CGS) 活動報告・予定

2010 年度 CGS 活動報告	117
国際ワークショップ報告「アジアでジェンダーを語る：—アジアにおけるジェンダー・ セクシュアリティ教育—」	123
多摩ジェンダー教育ネットワーク 第 2 回～第 6 回会合	153
2011 年度 CGS 活動予定	161

付記

執筆者紹介-----	165
CGS 所員リスト-----	167
第 7 号投稿規程-----	170
編集後記-----	179

Contents

Contents	1
-----------------------	---

Research Papers

Gender and Hysteria Discourse in Psychoanalysis	
Sayaka OKI	5
Mimesis to Myth: Gender Role Anxieties in the Writing of Sylvia Plath	
Christopher SIMONS	25
Cognitions of Child Rearing Parents about Single Fathers	
Akiko HIRANUMA	51

Research Notes

Trade Policy Mechanisms: Gender Mainstreaming vs. Diversity Mainstreaming	
Sarah HOUGHTON	71
An Image of "Family" in Homosexual Couples in Picture Books: With Special Reference to Patricia Polacco's <i>In Our Mothers' House</i>	
Kaoru HORIUCHI	79

Field Reports

A Formation Process of Social Activities Based on the Medical Discourse of "Gender Identity Disorder"	
Toshiki TATAI	93
The 100th Anniversary of "International Women's Day" — "International solidarity is needed for international women's day"	
Connie MINAMI	107

CGS Activity Reports and Schedule

AY 2010 Activity Report	117
International Workshop 2010:	
Asian Gender Dialogues - Education on Gender and Sexuality in Asia	123
The Second-Sixth Meetings of the Tama Gender Education Network	153
AY 2011 CGS Activity Schedule.....	161

Notes

Author Profiles -----	165
Regular Members of the Center for Gender Studies -----	167
Journal Regulations for Vol. 07 -----	170
Postscript from the Editor -----	179

ジェンダーと精神分析におけるヒステリー

大木清香

1 はじめに

フロイトの精神分析に関する著作が 1900 年を境に次々に刊行されたことにより、これまでは全く未知の領域であった人間の無意識が初めて近代的な方法によって学術的に解明されるようになった。フロイト自身が彼の著書『夢判断』に記述しているように、無意識への関心はすでに古代ギリシャから端を発しているが—例えばアリストテレス以前の古代の人々は夢を人間心理が作り出すものではなく、神のお告げだと考えた¹—、患者の症状を分析することによって、その無意識を体系的に明るみに出すことに成功したのはフロイトの精神分析からと言える。

『夢判断』によって無意識の近代的分析方法がほぼ確定したのであるが、意味深いことに、ちょうどその頃、その無意識の精神分析の対象となった被験者、つまり魂に何らかの障害をもった患者の多くは男性ではなく、女性であった。ウィーンの精神科医であるブロイアー (Josef Breuer, 1842-1925) とともに、フロイトは 1895 年に 5 人の女性のヒステリー患者を分析対象として『ヒステリー研究 (Studien über Hysterie)』を書きあげている。女性患者はブロイアーによって治療を受けることになる 21 歳のアンナ・O (Anna O.) であり、他の 4 人はフロイトのもとへ通うことになるエミー・フォン・N 夫人 (Frau Emmy v. N)、ミス・ルーシー・R (Miß Lucy R)、カタリーナ (Katharina)、そしてエリーザベト・フォン・R 嬢 (Frä. Elisabeth v. R) であった。この 5 人の女性たちの症状には、偏頭痛、視力の低下、激しい咳ならびに言語障害などが挙げられ、それらの障害は健常者の健康状態からは明確に区別されるべきものと考えられ、彼女たちの病名は「ヒステリー」と確定されることになる。ヒステリーは身体的な病とさらに精神的な病の原因が関与して引き起されると考えられる。彼女たちの病的症状は、定期的に問診され、長期にわたって診療されることによって改善の兆候を示したとされることもあるが、多くの場合何らかの理由によって診療は中断せざるをえなくなった。『夢判断』が書かれた同年、すなわち 1900 年にはフロイトのもとをドーラ (Dora) という 18 歳の女性が訪ねることになるのだが、彼女の長期にわたる診断をもとにして、フロイトは 1905 年に『あるヒステリー分析の断片』を出版するに至る。このような事例を挙げてゆくと、特筆すべきことに、20 世紀の近代を規定することになった学術的に重要な位置を占める精神分析が、医者という男性の視点から女性患者を分析するという方法によって確立されたことが明らかになってくる。² エランベルジェが精神医学史家としての立場から、残された報告書を基に再構築しているようにフロイトは 1886 年にウィーンにて男性ヒステリーに関する学会発表を

なるほど行っているが、「外傷性」男性ヒステリーをそこに含めることに対する批判にある。³ 症例となるべきヒステリー研究の被験者は従って、女性が多数を占めることになる。ヒステリーという概念をめぐるのは、多岐にわたる視点から論争されており、男女という性差間の問題のみにとどまらず、ヒステリー疾患自体がユダヤ民族特有のものと捉えられてきた歴史を解体する視点もある。⁴ しかしながら本論では、欧米では第二派フェミニズムの当初より議論されている性差という視点からヒステリー言説を再考し、とりわけヒステリーにおける患者と医者の上に産出される権力関係を、文学解釈への応用という視点を目指すことにより、双方が使用する言語という伝達メディアの差異に焦点を当てながら解体していくことにする。

精神分析をする主体としての男性とそれを受ける客体としての女性—ヒステリー患者—という構造は、社会における性差を考察するうえで一つの重要な基盤となるべきものである。それというのも、ヒステリー症状は精神分析においては女性の病気というだけではなく、女性そのものとさえ考えられるようになるからである。⁵ フロイトの精神分析を批判的に解釈することによって構築された 70 年代のエクリチュール・フェミニンを主導したと言われているフランスの批評家は、エレヌ・シクスー (Hélène Cixous, 1937-)、リュース・イリガライ (Lucy Irigaray, 1930-)、ジュリア・クリステヴァ (Julia Kristeva, 1941-) に代表される。ヒステリーはこれまでラカンの言語理論との関係でしばしば議論され、フェミニズム的にもこれまで取り上げられてきた。

ヒステリー言説と社会のなかで生成されるジェンダーとの関係を考察するとき、オーストリアの女性作家インゲボルク・バッハマン (1926-1973) の作品が非常に興味深い一例を示してくれている。バッハマンはドイツナチス政権が崩壊した戦後に活躍した作家である。彼女が書斎に保持していた図書の中には、ドイツのズーカンブ社 (Suhrkamp) から出版されたフロイト全集があり、とりわけフロイトのヒステリー研究『ドーラの症例』と「不安」に関する精神分析は何度も繰り返し愛読されていたという。⁶ 従って、バッハマンの作品群にフロイトの精神分析、とりわけ女性性とヒステリーというテーマが多大な影響を及ぼしたことは、彼女の作品を言及するうえで確認されるべき重要な事実である。彼女の断片のまま残された小説『フランザの場合』(1965/66) は、精神治療における分析家と女性患者という関係をジェンダーという視点から描いた作品と位置付けられる。すなわち、主人公フランザは夫であり診断家であるヨルダンと生活を共にしているのだが、愛のうえに成立するはずであった男女の関係は次第に錯綜し、ついにフランザはもはや妻ではなく彼の精神分析の対象—患者—として診断されることになるのである。本稿最終章ではヒステリー言説を理論的に展開した後で、『フランザの場合』を例にしてジェンダーの問題性を考察していくことにする。

2 女性性とヒステリー

20 世紀初期の精神分析において、女性の心理分析が男性のそれと比べはるかに難解であることは既にフロイトの女性性を指す有名な隠喩の言葉「暗黒大陸 (dark continent)」に見て取れる。男性の精神の発展は既に幼児体験から、エディプス・コンプレックスにいたるまで、性生活全般にわたり男根 (Phallus) を中心にとらえるために明瞭に構造化されうるが、女性は男性のモデルを応用することによっては分析されえない。フロイトはあくまで男性・女性の性別にかかわらず、性発達の初期段階としての前エディプス期にあらわれるリビドーを常に「男性的」だと解釈しているが、それは女性の多様性を考える上では否定されるべきテーゼである。

このことについてはリュース・イリガライが彼女の主著の一つといえる書物『ひとつではない女の性』において言及している。⁷ 彼女の言説は生物的に見て女性が男性とは異なり「あちこちに性器を持つ」⁸ 存在であると認識することから始まる。それというのも、その根本は女性というアイデンティティが一つであると確定することが不可能からだと言える。つまり、男性が男根によって象徴化されるのに比べ、女性の身体を何かによって象徴化することはできず、それは常に不確定な存在であると捉えられるからである。女性のセクシュアリティは男性のような単一なるものではなくて、多様な機能を持ち備えたものであり、したがってそれを性と精神の単独の基準、つまり男性性に合わせて理解することはできない。女性性が複数性の上に成り立っているということは、言語ならびに「テキスト」を考察するうえでも重要な問題となる。つまり、テキストに記述される言葉は単一の文法によっては語りきれない多様性のなかに生きていられるからである。⁹ イリガライは、女性の複数性を強調しながら次のように叙述している。

女の性器はひとつではない。少なくともふたつはあるが、ひとつずつに識別できない。それに、女にはもっと多くの性器がある。女のセクシュアリティは、少なくとも常に二重であるが、さらに複数である。今や文化が複数であろうと望んでいるように？ 今やテキストが複数形で書かれているように？ テキストがどんな検閲を起点としているかもよく知らずに？¹⁰

女のセクシュアリティは従って不定形なのだから、彼女の使用する言語も男性的視点からとらえて一元化することはできない。つまり既成の文法にあてはめて女性的言語である複数性を解釈することはできない。フロイトの精神分析の対象となったヒステリーについて考察することは、男性の言葉とは異なる女性の言葉、テキストといかに向き合うかということに他

ならない。このことは従って、マリアンネ・シュラーの言葉によって表現されているように「女性そのものであると定義されるヒステリー」¹¹を理解するうえでの基盤になると言える。つまりヒステリー患者といわれる女性たちの話す言語は既成の文法の枠から逸脱し、複数形のなかで生成されているのである。ヒステリー患者の言葉、換言すれば女性の言葉は、無意識の中で生成されるために流動的であり、たえず変化そして生成する可能性を持ちえていると言える。無意識の中にある言葉の断片に、いかにして表現形式としての型もしくは意識化としての文法を与えることができるのだろうか。ここで精神科医ブロイアーによって診断されたヒステリー患者の一人を象徴するアンナ・Oを例にとり、彼女の言語活動の問題性を具体的に取り上げていくことにする。

アンナ・Oがブロイアーのもとを初めて訪れたのは1880年、彼女が21歳のころであった。その頃、彼女は既にヒステリー症状とみられる兆候、すなわち白昼夢や視力の低下があったけれども、その症状が決定的になったのは彼女が体験する精神的トラウマによる。それは、アンナがブロイアーのもとを訪ねた同年7月に彼女の父親が膿瘍をわずらい、彼女の献身的な看護にもかかわらず、翌年1881年4月に死去したという事実である。アンナは非常に父親を愛していたため、彼の死は彼女に肉体的にも精神的にも拭いがたい決定的な影響を与えることになる。このトラウマによって、彼女の記憶の連鎖は切断され、断片的にしか過去を思い出せなくなるのである。ヒステリーは肉体的そして精神的、両方の症状となってあらわれる。それ以来、アンナは激しい咳に悩まされ、さらに白昼夢が悪化することによって「黒い蛇の幻覚 (Halluzinationen von schwarzen Schlangen)」¹²を見るようになる。

ブロイアーは彼女のこのような症状を「睡眠術療法 (Hypnose)」と「会話療法 (Sprechbehandlung)」によって1年半にわたって治療しようと試みたのだが、その際アンナに見られるもっとも顕著な症状に悩まされることになる。つまり、アンナにおこった言語障害がそれであり、母語を彼女は以前までのように流暢に話すことができなくなり、その代わりに英語でのみコミュニケーションをとるようになった。母語における識字障害も見られるようになり、ドイツ語の代わりにフランス語とイタリア語を読むようになる。ブロイアーが既に治療のはじめ、1880年に伝えているように、アンナは非常に優秀で頭の切れる理知的な女性であり、同時に「豊かな詩的かつ想像的な才能」¹³に恵まれており、常に「鋭敏で批判的な理性」¹⁴によって活動していた。アンナの軌跡を読むと、彼女は病状が回復したのちフェミニストとして活躍するが、その時期に折に触れ、幾つもの文学的作品を書いていたことが分かる。¹⁵1888年には『子どものための小さな物語』を、1890年には『古道具屋で』を出版しているし、ノイ・イーゼンブルクホームを設立してから、女性や子どもたちを励ますために物語を創作しては朗読会を行っていた。¹⁶そのような女性であるから、複数の言語を操ることが可能であったのだが、

ヒステリーの兆候として見られたのは、母語に障害が生まれるという事実であった。つまり、この症状は母語を規定しているあらゆる文法・シンタックスが欠如することを意味している。文章における語の正しい並び方が乱れるために、ある単一の文法という法則にのっとっては会話が成立しなくなる。ブロイアーはアンナのそのような状況を次のように記述している。

まず、アンナの言葉が失われていることに気がついた。話せない単語の数は次第に増していった。次に彼女が話すと、すべての文法、どのシンタックス、すべての動詞の人称変化も失われていった。ついには弱変化する過去完了によって作られる不定形を間違っ使用しはじめたし、また冠詞は抜け落ちていった。そして時間がたつにつれて言葉は完全に失われ、どうにか彼女は単語を4または5ヶ国語のなかから拾い出したけれども、文章はもうほとんど理解できないものだった。書くことを試みても、同様の特殊語でしかなかった。(それは症状の始まりのころであって、後に拘縮があるともう書くこと自体ができなくなった。)¹⁷

しかしそれは反面、男性の視点からではなく女性自身の視点から見れば、男性的な象徴化、つまり文法という法則によって生まれる文の単一化からの解放を意味するものでもある。単一化からの解放は、同時に複数性・多様性を可能にする。女性のセクシュアリティにも既に見られるように、女性は本来「あちこちに性器を持つ」¹⁸ 存在なのであるから、言語のレベルにおいてもシンタックスからの解放は女性性と自然に結びついてくる。

レナーテ・シュレージアは彼女の論文において、ヒステリー女性一般にみられる言語活動について、その文法から解放された言語の快活性をとりわけ強調している。ヒステリー患者は一般に、「身体・身振りによる言語 (Körpersprache)」¹⁹ と「比喩的な言語 (Bildersprache)」²⁰ を使用しており、それは「生き生きとしたヴィジュアルな比喩的表現形態 (lebhaftes, visuelle Bilder)」²¹ を形成していると言える。これらの表現方法は、無意識から生成される表現形式といえる。無意識の中に抑圧されている「身振りによる言語」や「比喩的表現」を分析し、それらバラバラな物を結びつける、つまりそれはトラウマによって引き起こされた切断された記憶の連鎖を再度修復するのを助け、ヒステリー患者の「過去を思い出すという能力」を再び活性化させる役割を担っている。アンナの場合においても、過去の記憶の修復は純粋に言葉を介した会話療法—それをアンナは自慢の英語で「お話し治療 (talking cure)」²² と表現した—によって行われる。アンナの場合は父親を病で亡くしたという過去の事実だけが鮮明に意識されているのだが、そのほかの過ぎ去った記憶は無意識の中に抑圧されてしまっているために、精神科医ブロイアーに任された課題は、この意識の連鎖の欠如を彼女の保持している

「比喩的表現形態」を解釈しながら、修復していくということであった。この作業は女性の心理、あるいは女性性そのものに対して、ある一定のシンタックスを与え、解釈を可能にするものといえる。患者の精神治療が成功するかどうかは、分析家が理論的な精神分析の方法を如何に正しく実行するかにかかっていることはもちろんであるけれども、そのほかにとりわけ分析家の非常に繊細な感受性がどれほど患者の心理に寄り添うことができるかにもよる。従って、レナーテ・シュレージアはこのようなヒステリー患者の治療に際して、無意識的表現の意識化が誤って行われた場合におこりうる「死」の危険性について言及している。²³ それはつまり、分析家によって実行される意識化によって、患者の無意識から発せられる表現形態がもし「からからに干からびさせられる (austrocknen)」²⁴ ようなことが起こる場合、それはやっと回復へと向かいつつある精神が死へと追い込まれるのと同様である、と。

分析家とヒステリー患者の関係は従って、無意識の意識化をめぐる生と死の境界線をも規定しかねない重要な意味を担っている。この関係を考察していくとき、言語、すなわちシンタックスを保持している分析家とそうではないヒステリー患者との間に、潜在的に権力関係が成立しているということが、ここで特筆されねばならない。断片的にしかシンタックスを操ることのできない患者にとって、分析家の言語が絶大な影響力を与えうる存在であることは自明のことであるから、そこに生成される権力関係つまり強者としての分析家と弱者としてのヒステリー患者とが如何に調和を保った状態で発展していくかが、療養期間に行われる病状の治療の行方を左右すると言える。フェミニズム研究においては、以下に引用するフロイトの行いたいわけの『ドーラの症例』は、この分析家とヒステリー患者という必然的権力関係によって起こった失錯と考えられている。²⁵ 次章では、『ドーラの症例』を取り上げながら、分析家によって行われる無意識の意識化の過程に見られる問題性を解明していくことにする。

3 解釈のゆらぎとアイデンティティの喪失

フロイトは「カタルシス治療」を引き継いだのだが、フロイトの方法はブロイアーのそれとは多少異なっていた。それというのも、フロイトはもはや睡眠術療法を使用せずに純粋な会話によってのみヒステリー症状を治療することを試みたのである。会話によってのみヒステリー症状を治療するという試みは、言語と直接的にかかわりあい、患者の無意識からの発言を如何に解釈するかという問いと直面している。それは換言すれば、女性性とその不定形な言語といかに取り組み、それを象徴によって秩序づけられた、つまりシンタックスによって統制された言語領域の範囲で解釈するか、という問題との対決を意味している。フロイトはブロイアーとの共著『ヒステリー研究』で4人の女性患者を観察しているが、彼独自のヒステリー研究として最も著名なものは診察当時18歳の少女であったドーラについての分析である。

いわゆるドーラの症例が描写されている『あるヒステリー分析の断片』は1901年に書かれ、1905年になってはじめて刊行された。この出版年から見ても理解できるように、ドーラの症例はフロイトの『夢判断』が1900年に発表された直後に位置している。従って、彼の精神分析の方法ならびに構造化の根底に、女性のヒステリー症例の解釈が多大な影響を及ぼしたことは自明のことである。『あるヒステリー分析の断片』が1901年には『夢とヒステリー』という題名で書かれていたことを踏まえても、いかに夢判断とヒステリー解釈が密接な関係に位置しているかが分かる。²⁶ 実際、この本にははじめの第一章にドーラの病状と家庭環境が詳細に記述され、続く2章にわたってドーラの語った夢がフロイトによって分析されている。第一番目の火事の夢²⁷ はドーラが定期的に繰り返し見る夢であったため、特にフロイトの関心を引き起こした。第二の夢はドーラが見知らぬ街で迷子になり、なかなか目的地にたどりつかないという内容である。²⁸ この二つの夢の分析を通じて、フロイトは女性性を象徴しているヒステリー症状の治療に接近しようと試みる。夢は無意識から発せられる願望であるということはフロイトの重要なテーゼであるのだから、無意識から生成されるヒステリーの表現形態、いわゆる身振りによる表現などの解釈にとっても患者の夢は欠かせない資料となる。患者の無意識における願望が次第に明るみに出されることによって、病気の原因も徐々に解明へ向かうことになる。このことから理解できるように、純粋な会話による精神療法である「お話し治療」にとって夢の分析は重要な位置を占めていると言える。『夢判断』の被験者となっているのは男性が多数を占めていることは事実だが、夢判断という方法ならびに夢の原因の構造化は女性のヒステリー患者たちの分析によって獲得されたものに他ならない。つまり、ヒステリー解釈—広義の意味で女性性への関心とその分析—は近代的な精神分析の始まりと考えられる。²⁹ 『あるヒステリー分析の断片』はドイツにおいては精神分析の領域に限らず、文学界からも非常に芸術性の高いものとして評価を受けている。³⁰ この『ドーラの症例』に関してはフェミニズム的見地から検証されているので、その研究を参考にしつつ以下ヒステリー言説にみられる問題を解体していくことにしたい。

ドーラがウィーンフロイトのもとを訪れたころには、彼女は神経症並びに偏頭痛、激しい咳をして記憶の欠陥などといった症状に悩まされていた。ドーラの父親も病気がちで、すでに娘が6歳のころ（1888年）から結核に感染していた。ドーラは様々な医療機関へ足を運んだが症状は一向に良くならなかったため、父親の推薦で彼女はやっとなフロイトのもとを訪れることになる。それまで彼女はどんな医薬品を試してみても、体が受けつけなかった。フロイトは「お話し治療」を駆使して、ドーラと家庭環境と家族関係がいかに彼女のヒステリー症状に影響しているかを詳細に解明しようと試みている。錯綜した人間関係は主に、ドーラの父親、母親、それに加え彼女の家族と親密であったK氏とその夫人、そして彼女の家庭教師を巡って

展開する。また、既に言及したようにフロイトは夢判断を通して、ドーラの無意識における愛情の願望を様々な解釈している。

ヒステリーは患者の意識、無意識の両方が回復されない限り治るものではなく、フロイトの解釈に従えば、ドーラのヒステリー症状はたいていの場合、「性功能 (Sexualfunktion)」³¹ を引き起こすものが極端に抑圧されることによって体の各所にでてくるのだという。たとえば、喉の炎症はリビドーが発散されずに抑制されることによって、その影響が性感帯である喉にでてくるから引き起こされるのだという。³² ドーラの場合は咳に悩まされていたが、その症状をフロイトは錯綜した男女関係によって生まれるリビドーによるものと考えた。既にシュラーがフェミニズム的視点から指摘しているように、フロイトのヒステリー解釈に混乱が生まれるのはリビドーが生成される根源ともいえる男女の心理を、男性優位の視点から分析しているからといえる。³³ フロイトにおいて男性、女性のリビドーの構造化は常に男性主体で捉えられていることは、イリガライも『ひとつではない女の性』のなかで述べている。「リビドーは、男性に現れても女性に現れても、欲望対象が女性であれ男性であれ、常に男性的だとフロイトは主張する」³⁴、と。リビドーの組織化は根本的に男性優位の位置からとらえられるのだから、ドーラのヒステリー解釈に至っても、男性的視点から病状の原因が読み解かれていくのは自明のことである。しかしながら、複雑な男女関係を解体する際に、シンタクスに則つてのみでは蔽いきれない女性特有の「表現」があることを忘れてはならない。その「表現」は『あるヒステリー分析の断片』の中では常にフロイト自身の「解釈」の目を通して語られてゆく。この精神分析が非常に文学性の高いものとして評価されている所以も、確固とした「語り手 (auktorialer Erzähler)」の存在³⁵にあるといえる。しかしながら、もし「語り手」が解釈を自らの優位的立場から行うとき、先にも言及したように、無意識からの声は圧制されかねない。分析家とヒステリー患者の関係は非常に敏感なものであるということは、フロイトが繰り返し使用している言葉「秘密の厳守 (Diskretion)」³⁶ にも読み取れることである。

ここで先に結論を述べてしまうと、ドーラは父親の推薦でフロイトのもとを訪れ治療が開始されたのだったが、結局彼女の症状は一向に改善せずに予定されていた治療は完結することなく、彼女はフロイトのもとを去る。フロイトの様々な病状の解釈によってドーラの症状は概ね改善の傾向を見せていた。しかしながら結局、解釈のゆらぎはドーラのアイデンティティを混乱へと導いてしまう。なぜドーラは自らフロイトのもとを去ったのか。彼女はそのことについて明言を避けているので、それにたいする答えは推測するしかないのだが、彼女がフロイトの治療にドーラの精神生活のすべてを知り尽くした強者としての分析家の姿、つまりそこに生成される権力を感じ取ったからと言うことができよう。診察が中断されてから 15 カ月ほどしてやっとフロイトはドーラからその後の報告を受けている。すなわち、彼女はフロイトのもとを

去ってから、次第に症状が改善し、再び健康を取り戻したとのことであった。以上が『ドーラの症例』の結論なのだが、ジェンダー研究の側からこの症例を考察するのならば、まさにヒステリー分析のこの片寄った、つまり男性優位の、女性劣位の二項対立としての観点が女性性の解釈の欠点と見なされているという良い。それではフロイトは実際どのようにドーラのヒステリー症状を解釈していったのだろうか。以下、『ドーラの症例』を解釈しながら、この問いを解体してゆくことにする。

4『ドーラの症例』における男女の心理描写

ドーラが示すヒステリー症状を説明するために、フロイトは彼女の両親とK氏・K夫人、ならびに家庭教師をめぐる展開される人間関係を読み解いている。K一家との交際はすでにドーラの父が病気になる前から始まっていたのだが、それが親密さを増したのはK夫人が父の世話をはじめたころからだった。³⁸ その頃にはすでにドーラの母親は父の看護をしていなかったようである。父とK夫人の交際は次第に親密になり、しまいには金を送るようになる。フロイトは、父がその事実を隠すために母やドーラに対しても気前よくふるまうようになったと解釈している。フロイトによって説明されるドーラの錯綜した愛情は、あるときは父への、またあるときはK氏にたいする愛となって描写され、その時々成就することのない関係のために、彼女の身体の各所に象徴的にヒステリー症状が現れるとされる。実際はどうであったか立証することは困難だが、フロイトはドーラの症状をリビドーの抑圧からくるものと判断したため、彼女の人間関係も常に性関係を基準にして考えられている。性的テーマを扱うことは、ヒステリー分析を始めるうえで回避できない事柄であることは、同書のなかで言及されている。³⁹ 例えば、ドーラの激しい咳ならびに失声症は、きまってK氏が不在の時に起こるとされる。K氏が不在ならば、彼と一緒に話すことはできない。それを象徴するかのようにドーラは話すという行為を忘れたのである、と。

不在の人とは一緒に話すことができない。それゆえに、その人と文通しようとすることは、声が出ないのに代わって文字で意思疎通しようとすることに大変近いものがある。ドーラの失声症については従って次のような象徴的解釈が成り立つ。つまり愛人がいなかったとき、彼女は話すことをやめた。愛人と話すことができなくなったのだから、話すという行為は価値を失う。そのために不在の者と文通するための唯一の手段として書くという行為が意味をもったのである。⁴⁰

K氏の不在時に限って声を失い、その代わりに文字を欠く能力が向上したというのであれ

ば、その症状の原因をつくりだしているのはドーラのなかに潜むK氏への愛情であると考えられる。つまり、ドーラがたとえK氏への愛情を口頭で否定したとしても、この男性がいなければ起こりえない症状であると考えることができる。このヒステリーの症状はドーラの内面で抑圧された前エディプス期の父への愛が、K氏に投影された結果に起こったものであると解釈され、症状の原因はK氏の行動にではなくドーラ自身にあるとされる。

さて、ここでもう一つ例を挙げておくことにする。先にも述べたことだが、『あるヒステリー分析の断片』には二つの夢が分析されているのだが、第一番目の火事の夢に注目してみたい。

家が火事になっている、そうドーラは語った、父が私のベッドの前に立っていてそして私のことを起こした。私は急いで服を着る。母は宝石箱を持ち出そうとしているが、父は母に向かって言う。おまえの宝石箱のせいで俺と子どもたちが焼け死ぬのはごめんだ、と。急いで階段を下り、外に出たとき、私は目が覚めた。⁴¹

『夢判断』のなかにも夢が「無意識からの願望 (ein Wunsch aus dem Unbewußten)」⁴²であることは主要テーゼとして記述されているけれども、この第一の夢の分析においてもフロイトのテーゼは変わることはない。ここで注目したいのは、いかに少女の愛情が異なる形で父と母に向けられているかということである。つまり、父と母という性差間においてドーラの感情の表れ方が大きく異なる一少なくともフロイトはそう解釈している—という点である。ドーラがK氏に対して抱く愛情については先に述べたが、父に対してはそれ以上といえるほどの愛情が期待されており、それを示す一例として第一の夢が分析されることになる。「家が火事になっている」という文脈はドーラの危機的状況を示しており、父はその火事を彼女に知らせる存在、つまり彼女を危険から守る存在として現れる。火事の中母は「宝石箱」を持ち出そうとしているが、宝石箱をフロイトは女性の性器の比喩であると考えていることから、ドーラの同性である母親にたいする嫉妬がそこに表現されるのだという。つまり、母への嫉妬は同時に父への幼児的な愛情と深く結び付いているのである。イリガライが記述しているように、フロイトは前エディプス期としての幼児段階にある女の子を小さな男の子と考えたため、エディプス・コンプレックスも男の子と同じように起こるとみなされる。つまり、イリガライの言葉を借りれば「女の子が母を愛するのは小さな男性としてである。娘—女性と母—女性に特有な関係はフロイトによってほとんど検討されない。[...] 彼は女の子の母に対する欲望を男性的、男根的欲望とみなす。だからこそ、女の子が価値ある性器に比べ自分が去勢されていると、また母を含めすべての女性もそうだと発見するとき、母との絆の必然的な断念が、さらに母への憎

悪が生まれるのである。」⁴³ 従って女の子は、父親への愛情を示すかわりに母親へは、自分の去勢の原因をそこに感じ取るために嫉妬という感情を抱くと考えられる。この男性を中心とした心理モデルに対して、『ドーラの症例』においてもフロイトはドーラが母への嫉妬を、そして同時に父への欲望を抱いていることを強調している。夢はそれが象徴的に表れたものである、と。火事からドーラを救い出そうとする父への愛。それに対し、自らの宝宝箱を持ち出すために躊躇している母への不快は、結局生死を分ける場面へと発展する。すなわち父は母に対して、「俺と子どもたちが焼け死ぬのはごめんだ」と叫ぶに至るのである。このファルス中心主義的な解釈に対するモデルを、批判的視点から書き換えた戯曲としてエレヌ・シクスーの『ドーラの肖像』(1986)が挙げられるが、その中でシクスーは主人公ドーラの同性愛的傾向をK夫人に投影させることにより「母—娘」の関係の見直し、さらには個別の関係からより抽象化された「母としての聖母」への関係へと発展させている。K夫人に対するドーラの思慕は神聖さを帯び、男女の間に生まれる支配関係からは解放された愛情を想起させる。

イリグライの言葉、「娘—女性と母—女性に特有な関係はフロイトによってほとんど検討されない」ことは、女性特有の性関係にたいする心理モデルが形作られずに、男性モデルにそって女性の心理が描写されることを意味しているといえるだろう。ドーラ自身はフロイトのこの症例における分析では、あるときはK氏に恋心を抱く女性として、またあるときは父を愛する女性として描写されるが、結局彼女自身の主体性は「語り手」によってほとんど描写されることはない。ドーラの無意識からの声は男性的モデルによって語られるが、女性自身の「表現」としては意識化されずに闇の中にとどまり続ける。ドーラという女性のアイデンティティは確立しないまま、『ドーラの症例』は精神分析の一つの断片として残ることになる。シュラーはこの状況を、ころころと展開する男女関係のはざまの中で消滅している女性像という意味を込めて、「彼女自身は何者でもない (sie [ist] quasi „nichts“)」と表現している。⁴⁴

5 社会構造とヒステリー言説—ジェンダーへの問い

本稿最後の章になるが、ここでフロイトのヒステリー分析との関係から、オーストリアの女性作家インゲボルク・バッハマン (1926-1973) の長編小説『フランザの場合』⁴⁵ について一考察加えておきたい。バッハマンはナチスドイツが崩壊した戦後に活躍したオーストリアの作家であり、当時1947年から活動が続けていた文壇47年グループの一員であって、ドイツ・オーストリアを含め様々な賞を受賞した。彼女の作品は主に、抒情詩、ラジオドラマ、小説、エッセイ等に分けられるが、そのほかにも作曲家ハンス・ヴェルナー・ヘンツェへ贈った歌劇の台本などもある。ここでは彼女の後期作品、「さまざまな死に方」というテーマにおいて書かれた三部作のうちの一つである小説『フランザの場合』を取り上げたい。主に1980年代から

バッハマンの作品は様々な観点から受容されてきたが、とりわけフェミニズム研究において注目され、文学史においてはジェンダーの問題に取り組んだ作家として位置付けられるようになる。バッハマンの文学テーゼに、「戦争は爆撃によってはじめて開始されるのではなく、すでに人間関係において始まっている」⁴⁶ というものがある。そこでは人間関係において生成される権力の存在が暗示されており、精神的死⁴⁷を引き起こしかねない問題として彼女の作品の中に描かれることになる。『フランザの場合』においても、一貫してこのモチーフが貫かれており、そこでは誤って行われた場合の精神分析への危機が語られることになる。ここで簡潔にあらすじを記述しておくことにしたい。ウィーンに住む主人公の女性フランザが、夫であり精神科医でもあるヨルダン博士によって彼の精神分析の症例にされる。フランザは徐々に精神を病み、一人では生活できないほどになるため、救いを求めて弟のマルチンに対して手紙を送る。フランザはウィーンを脱出し、生まれ故郷へ帰り、そこでマルチンに出会う。しばらくの休息の後、二人は徹底的な科学的合理性に貫かれた西洋文化を問い直すためにエジプトへ旅に出かけるのである。

『フランザの場合』は、完結されずに断片のまま残った。書かれ始めたのは1965年から1966年にかけてであり、バッハマンはこの作品の一部を1966年に初めて北ドイツをまわる朗読会において発表している。この断片がヒステリー言説と関係しているのではないかという仮説は、先行研究において指摘されている。⁴⁸ しかし、それは『フランザの場合』の中に描写された分析家としての男性と患者としての女性の言語の使用の在り方に注目し、この権力関係を読み解いているものではない。従って、本稿では既に前章においてヒステリーにおける言語に視点を当てて読解してきたように、作品解釈において、この観点を独自の論点として以下作品解釈に入っていくことにする。

ここで本稿の作品解釈の立場を明示しておかねばならない。すなわち、バッハマンの描く人間関係はなるほどヒステリー言説をめぐって展開されているけれども、バッハマンはここで分析家と患者の関係にとりわけ批判的な光を当て、誇張しながら描写することによって、現実では直視されずに見過されているが、社会の中で起こりうる可能性のある危機としての権力関係に敏感に気がつき、独自の作品として問題提起しているということである。バッハマンが描く主人公フランザは分析家ヨルダンの妻である。彼女の視点から語られる小説第二章においては、フランザ自身はいつから自分がヨルダンの症例の対象となり始めたのか、まったく意識できずにいる。ここでは従ってフランザは妻としてヨルダンに己を「ゆだねていた (anvertrauen)」⁴⁹ 存在として描かれている。彼女の方からすると純粋な愛に従ったためにヨルダンと結婚生活を送ることができたのだが、分析家としてのヨルダンから見ればフランザは精神分析の対象という役割を担った客体として診断される。二人の関係の綻れは、相手に対する期待の相

違にあったということができる。つまり、フランザがヨルダンに身をゆだねたのは、精神分析によって治療されるべき何らかの魂の病を患っていたからではなく、夫という立場にいるヨルダンに対する信頼に従ったからである。

私は病気だったのではない、私は患者として彼のところへ来たのではない。そのことは正当化されるはずであるのに。私が彼のもとへ来たのは、自らを彼にゆだねたからである。結婚はゆだねること以外の何であるといえるのか。相手の手の中に、自らがどんなに小さな存在であろうとも自分をゆだねるということ以外に。⁵⁰

しかしながら、ある日ふとヨルダンが不在のときに、フランザは彼の部屋の窓をあけるのだが、そのとき彼の机の上に置いてあった紙が机から落ちる。通常はローズィという女性が彼の部屋の清掃を担当しており、その時間帯にはフランザ自身は家を空けているために、滅多に彼の書斎に立ち入ることはないのであったが、この日は偶然にも彼女がその役を代わりに行ってしまう。紙を拾い上げた彼女は、それが「速記術 (Stenographie)」⁵¹によって書かれた自らの症例であることに気づかされるのである。はじめ彼女はその紙切れが何であるのか理解できずに、寝室に座り、それを熟読する。しかしながら、次第にそこに書かれた内容に目を走らせるうちに、ヨルダンに対する疑念とともに自分が夫の分析の対象となっていることを知ってしまう。

既にブロイアーがアンナ・Oを治療した際に言及していることであるが、ヒステリー患者の特徴として患者は意識化されたシンタクスに基づいて症状を説明することができない。言葉がうまく口から出てこないために、ときには母語を回避し、英語やフランス語、イタリア語といった外国語で、外の世界と意思疎通をはかるしかない。二週間あまり言葉を失い、無言でいることもあったし、錯語にみちたジャルゴンでしか会話できないことも症状として現れた。時に、言葉を話せないために、筆談によってしか伝達が図れないため、ブロイアーとの療法は何度も中断せざるを得なくなった。また、ドーラの場合においても、K氏が不在のときには失声症が起り、相手と会話することができなくなり、筆談するのがやっとという状態に陥る。しかし、フランザの場合は母語を失ったわけではない。彼女は言葉を保持している。それというのも、彼女は「辞書のある文化」⁵²の中に生き、「すべての状況を表現できる言い回し」⁵³を使いこなしているからである。「辞書を使いこなす」という比喩が示唆しているのは、女性として男性的意識化されたシンタクスのなかに自らの表現形態を見出す能力があるということである。加えて、フランザは言語を使用する必要のない、どこか無名の「ジャングル」⁵⁴で生活しているのではなく、言語という伝達メディアをもつ「文明」⁵⁵のただなかに生きているのだ

と認識している。それは、言葉を駆使することによって、自らの存在を表現できる能力があるということの意味している。一方が言語を保持し、他方が保持していないのであれば、そこに権力が産出されるのは避けられない。しかしながら、一方が言葉により意思を伝達できるにもかかわらず、他方がそれに耳を傾けないのであれば、それは意図的に他者を排除する行為に繋がってしまう。ここでバツハマンが、登場人物の患者の立場にある女性に、敢えて「言葉」を与えることによって男女関係を描写することで、両者の間に生まれる権力が分析家に依拠した意図的なものであることが強調されている。

フランザの場合は女の愛という「一つ」ではない表現形態、つまり言葉を駆使しながら相手に対する信頼を多面的に表現する方法が、ヨルダンという分析家にとっては症例として解体される対象でしかなくなる。女性と分析家の間の権力関係としての深淵は小説を読み進めるごとに、さらに消し難く広がってゆく。分析家にたいする「恐れ (Furcht)」と「不安 (Angst)」⁵⁶という語が繰り返し使われ、その状況はついには死への恐怖へと繋がってゆく。

一見、個別的な一例としての男女関係と読まれがちなヨルダンとフランザの物語であるが、その背後には、この関係は強者と弱者という権力関係を生成する父権的社会構造の根源を作り上げているというバツハマンのメッセージが読み取れる。フランザは女であり、妻であり、患者であると同時に、「身分が低い人種 (von niedriger Rasse)」⁵⁷でもあると明言されている。バツハマンに従えば、女性という性は社会の中で弱いものとして存在し続けており、暗黙のうちに構造化されてしまうジェンダーの狭間で常に犠牲者として苦悩する立場におかれるのである。『フランザの場合』だけに限らず、彼女の後期散文作品には、意義深いことに、彼女故に書くことができた独特の、社会から抑圧されて死へと向かう「さまざまな死に方」が叙述されているが、ジェンダー研究の立場から解釈すると、それがより鮮明に理解されてくる。本稿では精神分析とヒステリー言説との関係から、この一端としての未完小説を取り上げてみた。

Footnotes

- ¹ Freud, Sigmund. (2009). *Die Traumdeutung*. 2. Aufl. Frankfurt am Main. (Original work published in 1900.) 本稿では次の邦訳を参照する。『夢判断』（高橋義孝、菊盛英夫訳）日本教文社, p. 5.
- ² Schuller, Marianne. (1990). *Im Unterschied. Lesen, Korrespondieren, Adressieren*. Frankfurt am Main, S. 22.
- ³ エランベルジェ. (1999). 『エランベルジェ著作集 1 無意識のパイオニアと患者たち』（中井久夫, Trans.）, 三陽社, pp. 149-174.
- ⁴ S. ギルマン. (1996). 『ユダヤ人の心 フロイト、ドーラ、およびヒステリーという概念』（管啓次郎, Trans.）『イマーゴ』 青土社, pp. 260-299. S. Gilman. (1991). The Jewish psyche: Freud, Dora and the idea of the hysteric, in *The Jew's Body*.
- ⁵ ebd., S. 24.
- ⁶ Pichl, Robert. (1993). Ingeborg Bachmanns Privatbibliothek. Ihr Quellenwert für die Forschung. In Götsche, Dirk & Ohl, Hubert (Hrsg.). *Ingeborg Bachmann – Neue Beiträge zu ihrem Werk*. Internationales Symposium Münster 1991. Würzburg, S. 383.
- ⁷ Irigaray, Luce. (1977). *Ce sexe qui n'en est pas un*. les éditions de Minuit.
リュース・イリガライ 『ひとつではない女の性』（棚沢直子, 小野ゆり子, 中島公子, Trans.）
東京：勁草書房, p. 40.
- ⁸ ebd., S. 31.
- ⁹ イリガライと同時代にジェンダー思想を展開したジュリア・クリステヴァは『詩的言語の革命』のなかでシンタクスによって統率されている男性的サンボリックと芸術的複数性の中に生成される女性的セミオティックについて記述している。言語はクリステヴァに従えば、サンボリックあるいはセミオティックだけでは成り立たず、両者が共鳴することによって初めて使用可能になるという。
- ¹⁰ Irigaray, 1977, S. 30.
- ¹¹ Schuller, 1990, S. 24.
- ¹² アンナの髪や衣服の帯などが黒い蛇の幻覚になってあらわれては度々彼女を悩まし、不安に陥れた。『ヒステリー症例』のアンナの場合にはところどころにわたって、この恐ろしい幻覚という症状について言及されている。
- ¹³ Breuer, Josef & Freud, Sigmund. (1991). *Studien über Hysterie*. 6. Aufl. Frankfurt am Main, S.42. Original work published in 1895.
- ¹⁴ ebd.

- ¹⁵ 田村雲供 . (2004). 『フロイトのアンナ O 嬢とナチズム - フェミニスト・パツペンハイムの軌跡』 京都：ミネルヴァ書房 .
- ¹⁶ ebd.
- ¹⁷ Breuer & Freud, 1895, S. 45f.
- ¹⁸ Irigaray, 1977, S. 31.
- ¹⁹ Schlesier, Renate. (1990). *Mythos und Weiblichkeit bei Sigmund Freud. Zum Problem von Entmythologisierung und Remythologisierung in der psychoanalytischen Theorie*. Frankfurt am Main. S.43.
- ²⁰ ebd., S.52.
- ²¹ ebd., S. 53.
- ²² Breuer , 1895, S. 50.
- ²³ Schlesier, 1990, S. 54.
- ²⁴ ebd.
- ²⁵ Lindhoff, Lena. (2002). *Einführung in die feministische Literaturtheorie*. 2. Aufl. Stuttgart. S. 139.
- ²⁶ Freud, Sigmund. Bruchstück einer Hysterie-Analyse (1905). In Freud, Sigmund. (1971). *Hysterie und Angst*. Studienausgabe, 10. Aufl. Frankfurt am Main . S. 90.
- ²⁷ ebd., S. 136.
- ²⁸ ebd., S. 162.
- ²⁹ Schuller, 1990, S. 22.
- ³⁰ Schuller, 1990, S. 72.
- ³¹ Freud, 1905, S. 178. 尚、106 頁には次のように記述されている。「性的興奮が高まる、もしくはそれに対してただ嫌気がひきおこされるどんな人も、身体的症状があるにしろないにしろ、問題なくヒステリー患者とみなされる。」
- ³² ebd., S. 152.
- ³³ Schuller, 1990, S. 76.
- ³⁴ Irigaray, 1977, S. 40f. イリガライが指摘するようにフロイトが組織化するリビドーの問題は『性欲論三篇』の中で展開されている。つまり、女の子にとって、性発達の段階ではクリトリスのみが機能していると考えられるために、女の子は「小さな男性であり、彼女のあらゆる欲動や性的快感、特に自慰による快感は、実は＜男性的＞である」とみなされている。
- ³⁵ Schuller, 1990, S. 72.
- ³⁶ Freud, 1905, S. 88, 93. フロイトは『ドーラの症例』を書き始めるにあたって、ドーラが去った後、彼女の今後の生活にとって支障が起らないように数年間出版を待っていたと告白し

ている。患者への細心の配慮がここに読み取れる。

³⁷ Schuller, 1990, S. 72.

³⁸ Freud, 1905, S. 109.

³⁹ ebd., S. 123.

⁴⁰ ebd., S. 115f.

⁴¹ ebd., S. 136.

⁴² ebd., S. 156.

⁴³ Irigaray, 1977, S. 42.

⁴⁴ Schuller, 1990, S. 75.

⁴⁵ Bachmann, Ingeborg. (1993). Der Fall Franza (1965-66). In *Ingeborg Bachmann*. Piper. Bd. 3. S. 339-482.

⁴⁶ Bachmann, Ingeborg. (1991). *Wir müssen wahre Sätze finden. Gespräche und Interviews*. München, 4. Aufl, S. 89f.

⁴⁷ 精神的死が存在することについては、バツハマンより先に幾人かの作家によって既に指摘されてきた。これについては Eberhard, Joachim. (2002). „*Es gibt für mich keine Zitate. Intertextualität im dichterischen Werk Ingeborg Bachmanns*“. Tübingen. S. 374-380 を参照。例としては劇作家ブレヒト (1898-1956) の「さまざまな殺し方」という章のなかに、以下の文句がある。「さまざまな殺し方が存在する。ナイフを腹に刺しこむこともあれば、食事をとらない方法もある、自殺へ追い込むこともできるし、戦争へ駆り立てること等々。そのうちのほんのわずかの事柄だけしか我々の国では禁止されていないのである。」

⁴⁸ Schuller, Marianne. (1984). Wider den Bedeutungswahn. Zum Verfahren der Dekomposition in „Der Fall Franza“. In Arnold, Heinz Ludwig (Hrsg.). *Ingeborg Bachmann. Text + Kritik*. München. S. 151.

⁴⁹ Bachmann, 1965-66/1993, S. 407.

⁵⁰ ebd.

⁵¹ ebd. S. 405.

⁵² ebd.

⁵³ ebd.

⁵⁴ ebd.

⁵⁵ ebd.

⁵⁶ バツハマンの作品における「不安と性差」のテーマに関しては、Kanz, Christine. (1999). *Angst und Geschlechterdifferenz. Ingeborg Bachmanns Todesarten-Projekt in Kontexten der*

Gegenwartsliteratur. Stuttgart und Weimar. を参照。

⁵⁷ ebd., S. 413.

Gender and Hysteria Discourse in Psychoanalysis

Sayaka OKI

This paper aims to discuss the works of Josef Breuer and Sigmund Freud dealing with hysteria in which the predominant analytical methods of psychoanalysis of the twentieth century are established. It is important to focus on the fact that this therapeutic relationship is between a male analyst and a female patient in discussing hysteria because the gender aspect will be investigated here from a feminist perspective.

A joint work of Breuer and Freud, *Studies on Hysteria* (1895), and Freud's *Fragment of an Analysis of a Case of Hysteria* (1905) which is also known as *Dora* will be examined in this context. Gender studies regard hysteria, specifically in Freudian psychoanalysis, as being typically a female condition. There was a 21 year old woman named Anna O. who underwent psychological treatment with Breuer. From this "talking cure", language became an important medium for analyzing the unconscious. As another example, Dora was 18 years old when she went to Freud's clinic. A psychological model of hysteria is developed by Freud primarily from his masculine perspective, though many patients are female. Thus Freud interprets Dora's symptoms mainly from a male point of view and wrote about it in his *Fragment of an Analysis of a Case of Hysteria*. The development of an identity for the patient Dora becomes problematic in the end. It ought to be asked why the sexual distinction drives the analyst's power over the female patient.

This paper investigates a possible reason for such differentiation in the function of 'libido' and the difference forms of "expression" in language between man and woman; analyst and patient. As a theoretical basis, Luce Irigaray's *This Sex Which Is Not One* (1977) will be used. Lastly, the problem of gender and hysteria discourse is discussed using the case of an Austrian author, Ingeborg Bachmann, who wrote a fragmented novel called *The Book of Franz* (1965/66). The novel shows an example of how the relationship between man and woman, analyst and patient, can be tied to power.

Keywords:

gender, hysteria, identity, Sigmund Freud, Luce Irigaray

Mimesis to Myth: Gender Role Anxieties in the Writing of Sylvia Plath

Christopher SIMONS

Introduction

Sylvia Plath was born a just a little too early to benefit from the support of the feminist wave of the 1960s. Plath died on 11 February 1963 in London; on 25 February, Betty Friedan's *The Feminine Mystique* first appeared in print in the United States. Friedan, like Plath, was an alum of Smith College. Friedan's informal questionnaire to her classmates, which formed the basis of her book, targeted Plath's demographic of white, middle-class suburban women. The message of Friedan's book was crafted specifically for women like Plath. During the course of her short life, Plath struggled against, and worked through, many of the inequalities and assumptions about gender in America detailed in Friedan's book. In particular, Plath directly experienced the anti-intellectual bias of popular women's magazines, as described in Friedan's second chapter, during her internship at *Mademoiselle* magazine in New York.¹ Never having read Friedan, Plath negotiated successful gender roles in her own life in part by achieving what Friedan suggests as the "New Life Plan" for women in the book's final chapter: that is, completing her education for its own sake rather than to pass the time until marriage; and establishing a career plan prior to, and separate from, a plan for marriage and childraising.²

Nevertheless, even Plath, like many intelligent women who completed their education before marriage, struggled with gender role anxieties during the 1950s. Plath's journal entries from the late 1950s show the mind of an intellectually liberated woman struggling with, and often confined by, behavioural patterns imposed by "tradition"—but "tradition" that was really a recent postwar reaction against advances in equality of employment opportunities for women, caused by the war itself.³ Plath's writing plays out her internal conflict between being a "model young woman" in East Coast American society, and her instinctive antipathy to "traditional" 1950s female gender roles such as secretary, wife, and mother. In her journals, Plath frankly expresses her anxieties about gender roles. She writes about how she resents the gender roles of American society; yet she also writes about her desires to become a wife and mother in addition to becoming a successful writer.⁴ In her novel *The Bell Jar*, first published in 1963 (the year of her death), Plath's protagonist Esther Greenwood struggles with conflicts related to gender roles and female independence from a patriarchal *status quo*. Finally, Plath's poetry reveals her internal conflicts about gender roles on a symbolic level, through images

that are strongly connected to the more fundamental cultural forces of myth.

This paper argues that Plath's journals provided a record of her immediate or "unfiltered" perception of binary divisions in gender roles.⁵ Plath mediates these binaries mimetically in *The Bell Jar*: that is, she creates a realistic narrative of her own life, thoughts, and feelings, which moves towards a positive resolution.⁶ The optimistic conclusion to *The Bell Jar* demonstrates a personal victory: Plath uses narrative mimesis to achieve psychological wholeness for her protagonist, and perhaps for herself. The book's climax serves as a representation of Plath's hopes for her own therapy with her psychiatrist, Dr. Ruth Beuscher.

In contrast, in her poetry, Plath turns more diagetically to structured mythic oppositions as a method of confronting, and potentially working through, her gender role anxieties. Close-readings of two poems will demonstrate that although Plath structures these anxieties as mythic binaries (such as father-mother, male-female, destroyer-creator, predator-prey, culture-nature, etc.), the poems do not contain images that satisfactorily mediate these binaries. Ultimately, Plath cannot deploy poetic creativity to sublimate her gender role anxieties. The paper posits that in contrast to Plath's determination to resolve the conflicting gender roles expressed in her journals and *The Bell Jar*, the mythic binary oppositions in Plath's poetry reveal that her gender role anxieties remain irreconcilable and persist throughout her life.

The methodology of this paper will draw on the binary oppositions of mythemes described by Claude Lévi-Strauss. Plath's strong oppositions of feelings in her journals (such as worshipful vs. matricidal/patricidal images of her parents), and the strong binary oppositions of images in her poetry, resemble the binary oppositions that lie at the heart of Claude Lévi-Strauss' structural analysis of myth. Lévi-Strauss therefore offers a fruitful theoretical framework for looking at Plath's conception of gender roles.

Plath and Feminist Writers

If Friedan had published *The Feminine Mystique* one or two years earlier and Plath had read it, the final years of Plath's life might not have been much different. Plath had already worked through much of Friedan's common-sense approach to feminism. Although Plath's earliest journals describe her dreams of marriage and children, she never thought that these things might be the only fulfilling objectives in her life. Nor did Plath actively seek out or engage with earlier feminist writing. Plath did not read many contemporary feminist writers, although she was an avid reader of Virginia Woolf and empathized with her as a kindred creative (and

emotionally troubled) spirit.⁷ Plath likely did not read Beauvoir's *The Second Sex* (1949) in its first English translation.⁸ If she had, or if she heard about it from colleagues, she would have disagreed with one of its central propositions: that of the "independent woman" who "accepts masculine values" and rejects the idea of specifically "feminine" traits (Walters, 2005, pp.98-99). Plath's writing extols her femininity; she rages primarily at male control of female lives through pregnancy.

A Savage Binary: The Influences of Plath's Parents on her Perceptions of Gender Roles

Plath's father Otto died when she was eight.⁹ Plath's portraits of her father, in her journals and poetry, describe her ambiguous feelings towards him. Her writing shows her conscious understanding of her father's influence on her perceptions, both of gender roles and mythic archetypes. As an eighteen-year-old going on dates, she jokes that she is trying to find a man to replace her father: "You make some crack about going for the fatherly type. Your own father is dead" (Plath, 2000, p. 40). At Cambridge, she looks at her English lecturer, Robert Redpath, "and practically. . . beg[s] him to be [her] father" (Plath, 2000, p. 230). Plath consciously establishes and evaluates her male partners as father-figures.

At the same time, Plath fears and even hates the memory of her father, in a process of demonization that begins with her mother. According to Plath's journal, Aurelia Plath lacked affection for her husband Otto during his life.¹⁰ After Otto's death, the effects of his financial mismanagement on the family, and Aurelia's consequent fears of lifelong insecurity for herself and her children, fuelled a wariness of men in general.¹¹ Aurelia passed these insecurities on to her daughter in the form of strict advice that reinforced "traditional" gender roles and double standards of sexual relations before marriage.¹²

Plath's journals repeatedly describe her negative feelings towards her mother, especially in the December 1958 to November 1959 journal, during which time Plath was secretly seeing Dr. Beuscher for regular therapy. Plath equates her self-described hatred for her mother—which she comes to feel, under Beuscher's guidance, constitutes the primary psychological conflict of her adult mind—with the Jungian definition of the Electra Complex.¹³ Her journals record discussions with Beuscher on Oedipal interpretations of her dreams.¹⁴ She also makes a blunt Jungian reading of her hatred for her mother:

My mother killed the only man who'd love me steady through life: came in one morning

with tears of nobility in her eyes and told me he was gone for good. I hate her for that (Plath, 2000, p. 431).

In terms of gender role anxieties, Otto Plath's death impacted Sylvia both directly and indirectly. Directly, Plath experiences abandonment: the loss of a father-figure whom she attempts to replace through male lovers. In Lévi-Strauss' terms, this incestuous impulse constitutes the "overrating of blood relations" pole of the mythic binary. Indirectly, Plath feels hatred towards her mother, and blames her for her father's death—the "underrating of blood relations" pole of the mythic binary.

Aurelia Plath equated her husband's financial irresponsibility and suspicion of insurance salesmen with the abandonment by him of the traditional male gender role of the protector and provider. This made Aurelia overprotective towards her children; she wanted their lives to be more stable and successful than her own. Plath writes about her mother on Mother's Day 1958, in both Freudian and pragmatic terms:

Her conscious mind [is] always split off, at war with her unconscious: her dreams of terrible insecurity, of losing the house—her guarded praise at our getting poems published, as if this were one more nail in the coffin of our resolve to drown as poets. . . (Plath, 2000, p. 381)

Aurelia views Plath's marriage to Hughes as a great mistake, on the grounds that Hughes, like Otto, does not fill the traditional male gender role of provider:

She is worried about me and the man I married. How awful we are, to make her worry. . . What would we do: next year, twenty years from now: when the babies came (Plath, 2000, p. 433).

Yet, as is often the case in parents' relationships with their adult children, Plath cannot help but internalize some of her mother's concerns, which she expresses in her journals even as she criticizes her mother's paranoia. As a writer married to a writer, Plath worries constantly about poverty. She falls in love with and marries a man who suffers (at least, in her mother's opinion) from her father's flaw, i.e. an inability to provide financially for his wife and family:

like a mother, I dont [*sic*] want anyone to say anything against T, not that he is lazy or shiftless: I know he works, and hard, but it doesn't show to the observer, for whom writing is sitting home, drinking coffee and piddling about (Plath, 2000, p. 456).

Plath—like every other young person pursuing their dreams and enduring temporary poverty—must bear the disapprobation of risk-averse parents and a risk-averse society.¹⁵

In an excellent example of what Julia Kristeva terms “abjection,” Plath both vilifies her mother in order to establish a mature, separate psychological identity, and at the same time experiences guilt for the sacrifices her mother has made in order to give Plath her intellectual life. Plath writes that her repression of her own Electra complex resulted in her breakdown and suicide attempt. Because she would not physically kill her mother (and could not, symbolically), she turned her hatred on herself:

how do I express my hatred for my mother? In my deepest emotions I think of her as an enemy: somebody who “killed” my father, my first male ally in the world. She is a murderess of maleness. I lay in my bed. . . and thought what a luxury it would be to kill her, to strangle her skinny veined throat. . . But I was too nice for murder. [So] I tried to murder myself. . . (Plath, 2000, p. 433).

In the context of personal ambition conflicting with “traditional” gender roles, Plath’s journals depict the struggle of the intellectual woman of the mid-twentieth century who “wants it all.” In postwar society, given equalities of opportunity afforded by law and the economic privileges of the middle class, Plath can compete with any man she meets on the levels of intellect, academic performance, and career. She is determined to be a writer or intellectual of some kind. At the same time, she desires, with equal intensity, to be a wife and mother.¹⁶ This stressful dipole of career and family life forms one of the fundamental mid-to-late-twentieth-century struggles of feminism. For Plath, this opposition is the savage binary that underlies the mythic structure of much of her best poetic output.

Conflicting Gender Roles in Plath’s Journals and *The Bell Jar*

In her prose, Plath’s anxieties over gender roles resolve themselves mimetically—that is,

through “realistic” dramatic narrative. This section of the paper will trace gender role anxieties in Plath’s journals and *The Bell Jar*, and her mediation of her own psychological conflict through the mimesis of narrative realism.

In her journals and their fictionalized counterpart *The Bell Jar*, Plath expresses recurring anxiety and anger over a binary opposition within herself: wanting to fit into the gender roles propagated by postwar American society and her mother’s expectations on the one hand, and her desire to resist these roles on the other. Neither Plath nor her protagonist Esther Greenwood ascribes this conflict as the direct cause of their psychological breakdowns, although the causal connection is closer in *The Bell Jar*. Although a number of factors (including financial strain, failure to achieve professional stability through writing by late 1960, mental illness, and Hughes’ eventual infidelity) prevent Plath from sustaining a long-term gender role that gives her everything she desires from her life, at various stages she achieves success in resolving her internal conflicts over her gender roles. Nevertheless, the conflict in Plath’s mind between “traditional” postwar gender roles and those made possible through second-wave feminism recurs in her journals and *The Bell Jar*.

Plath, as an intellectual woman, often expresses amazement in her journals at the simplicity and success of her “normal” female friends: those who have married doctors or businessmen and settled into steady but (in Plath’s view) empty lives as wives and mothers:

How externals seem to fill worlds of people like Shirley. . . . Her baby, its walks and talks, her making of rugs and her skating and swimming (Plath, 2000, p. 465).

From her earliest journals, Plath expresses how she wants more than this from life. Her desire to have both a career and a family life—and the feeling that wanting both of these things together might be greedy, or impossible—leads to her expressing feelings of jealousy towards the “traditional” 1950s male gender role. In September 1951, while at university, she writes:

My greatest trouble. . . is jealousy. I am jealous of men—a dangerous and subtle envy which can corrode. . . any relationship. . . I envy the man his physical freedom to lead a double life—his career, and his sexual and family life (Plath, 2000, p. 98).

However, in a stance contrary to Simone de Beauvoir’s, Plath makes it clear that she does not

want to assume a “male” gender role. Plath’s thoughts about her relationship with her university boyfriend, Dick Norton, reveal her dislike of the sexual attitudes of young men.¹⁷

Despite these attitudes, Plath writes that she does not want to assume a dominant role in her sexual relationships: “If I am going to be a woman, fine. But I want to experience my femininity to the utmost” (Plath, 2000, p. 155). This dual struggle to be both feminist and feminine appears throughout her journals. One of the clearest statements of prototypical second-wave feminism that appears in her journals sums up her frustrations as a heterosexual woman, with a desire for a sexually attractive male partner, and the limited options available to “strong” (i.e. intellectual, independently minded) women in 1959:

I have hated men because I felt them physically necessary: hated them because they would degrade me, by their attitude: women shouldn’t think, shouldn’t be unfaithful (but their husbands may be), must stay home, cook[,] wash. Many men need a woman to be like this. Only the weak ones don’t, so many strong women marry a weak one, to have children, and their own way at once (Plath, 2000, p. 462).

The irony of this quotation shows how a “strong” woman’s only choice is between a sexually attractive partner who will cheat on her, or a physically and mentally weak, uninteresting man who will be faithful and compliant. Either the woman must accept the traditional 1950s female role, or she must take on the traditional 1950s male role. Plath sees no means of resolving this anxiety-inducing binary opposition in her journals.

Plath continues to struggle with this conflict in *The Bell Jar*. In the novel, her university boyfriend appears as the character Buddy Willard. Buddy, who is training to be a doctor, does not appreciate literature, and cannot understand why Esther continues to write poetry:

I . . . remembered [him] saying in a sinister, knowing way that after I had children I would feel differently, I wouldn’t want to write poems any more. So I began to think maybe it was true that when you were married and had children it was like being brainwashed. . . (Plath, 1963/2005, p. 81).

Plath, like Esther, refuses to compromise. She is haunted by her mother’s advice in her journals. Her mother tells her not to want so much, and to settle for less:

Get a nice little, safe little, sweet little loving little imitation man who'll give you babies and bread and a secure roof and a green lawn and money money money every month. Compromise. A smart girl can't have everything she wants. Take second best. . . . Don't let him get mad or die or go to Paris with his sexy secretary. Be sure he's nice nice nice (Plath, 2000, p. 431).

These lines are almost prose poetry; their mocking rhythm shows Plath's satirical reaction to the restrictions placed on women in the 1950s.

In *The Bell Jar*, Esther's description of her imagined life as a housewife shows Plath's deep understanding of the expectations and disappointments experienced by many young women of her generation:

if Constantin were my husband. . . . It would mean getting up at seven and cooking him eggs and bacon and toast and coffee. . . and then when he came home after a lively, fascinating day he'd expect a big dinner, and I'd spend the evening washing up even more dirty plates till I fell into bed, utterly exhausted.

This seemed a dreary and wasted life for a girl with fifteen years of straight A's, but I knew that's what marriage was like. . . (Plath, 1963/2005, p. 80).

Plath's rejection of this gender role, coupled with her desire to one day have the "ideal" 1950s American home, creates constant anxiety in her writing.

Plath provides closure for Esther in *The Bell Jar* not by resolving all of her gender role anxieties, but by providing her with the key to their future resolution. This key is sexual freedom through contraception, and an overthrow of the sexual double standard in 1950s America.¹⁸ Sexual inequality and a lack of appropriate channels for female sexuality play a role in Esther's mental breakdown. Esther's behaviour becomes increasingly wild, before she attempts suicide and is committed to a private mental hospital for treatment. Esther recovers successfully, thanks to the care of Doctor Nolan. Nolan, a strong, likeable feminist character, does not punish Esther when she expresses feelings of hatred towards her mother. Nolan becomes a surrogate mother for Esther, and ultimately helps Esther gain her psychological and literal freedom through sexual freedom.

Esther speaks openly to Nolan about her fear of men's control over women through pregnancy and childbirth:

"What I hate is the thought of being under a man's thumb," I had told Doctor Nolan. "A man doesn't have a worry in the world, while I've got a baby hanging over my head like a big stick, to keep me in line."

"Would you act differently if you didn't have to worry about a baby?"

"Yes," I said, "but . . ." and I told Doctor Nolan about the married woman lawyer and her Defence of Chastity.

Doctor Nolan waited until I was finished. Then she burst out laughing. "Propaganda!" she said, and scribbled the name and address of this doctor on a prescription pad (Plath, 1963/2005, p. 212).

As her journals repeatedly show, Plath resents both the sexual double standard in America, and how the risk of pregnancy limits her sexual freedom. Plath works through her own response to the hypocrisy of American society through Esther's narrative in *The Bell Jar*.

Esther's psychological liberation stems directly from her sexual liberation. With Dr. Nolan's help, Esther goes to a doctor to be fitted for a diaphragm. Plath makes an explicit connection between mental recovery and sexual freedom:

I climbed up on the examination table, thinking: "I am climbing to freedom, freedom from fear, freedom from marrying the wrong person, like Buddy Willard, just because of sex. . ."

I was my own woman.

The next step was to find the proper sort of man (Plath, 1963/2005, p. 213).

These lines represent the mimetic resolution of many of Plath's gender role anxieties. Through contraception, Esther achieves sexual freedom, and therefore true intellectual equality—that is, an equality not endangered by male control through pregnancy. But the lines are also ambiguous. Here the voice of the thirty-year-old Plath, married with two children, speaks through Esther from future experience. In as much as she has gained her freedom, Esther now actively begins searching for a mate on her own terms—an act which will result in her

surrendering her mental and physical independence, in order to achieve her ambitions of being a wife and a mother.

Unmediated Mythic Binaries: Gender Role Anxiety in Plath's Poems

Plath's journals and the narrative of *The Bell Jar* express Plath's anxieties over gender roles mimetically; both texts provide realist narratives which allow Plath to work through the oppositional binaries of the various gender roles she desires for herself. In *The Bell Jar*, the "freedom" which Esther achieves is purely sexual; through contraception, the primary anxiety over the imbalance of female and male gender roles collapses. Esther begins to recover her mental health. This mimetic narrative oversimplifies the multiplicity of conflicting gender roles described in Plath's journals, yet also identifies the key stumbling block to total gender equality.

The mediation of gender anxieties in Plath's journals is not straightforward. The journals record Plath's contradictory thoughts and feelings diachronically, and with some progression towards psychological balance. In successive entries, or even in adjacent pages or paragraphs in the same entry, Plath struggles with gender role anxieties including: the pitfalls and rewards of refusing to compromise in seeking a mate; living with a man who does not conform to 1950s male gender roles; managing the gender role expectations of her mother; balancing a career and a domestic life; and anticipating pregnancy and childbirth. She reassures herself in optimistic moments, and draws strength from experiences that strengthen her self-esteem: achieving publication or a prize; receiving support from Hughes; and receiving support from Dr. Beuscher. Yet throughout the course of Plath's regular journal-keeping (July 1950 to November 1959), she achieves stable resolution to only the first of these gender anxieties: Plath does not compromise, and marries the right man. Other gender role anxieties persist throughout Plath's journals.

In contrast to her prose, Plath's poetry leverages different mechanisms for the mediation of gender role anxieties, and in doing so, draws the reader's attention to an unbridgeable hiatus between theory and practice in 1950s society. Despite her youthful success as a fiction writer, Plath saw herself primarily as a poet after her Fulbright years in Cambridge. In contrast to her journals and her novel, a number of Plath's poems express her anxieties over gender roles synchronically, fusing mythic binary oppositions—such as life-death, nature-culture, agriculture-hunt—into a single image such as a sow, a "family" of mushrooms, or a rabbit in a trap.

As Lévi-Strauss argues, myth is opposite to, rather than close to, poetry on a linguistic level.¹⁹ Nevertheless, poetic narrative (even the static narrative of modern lyric poetry) can employ mythemes in binary opposition, with or without mediation, to convey meaning.²⁰ On the level of reading Plath's poems through the lens of her gender anxieties, we can see, in Lévi-Strauss' terms, a mechanism at work that attempts to provide Plath with a "satisfactory transition" between knowledge and experience:

Although the problem [in this case, of gender role]. . . cannot be solved, the. . . myth provides a kind of logical tool which, to phrase it coarsely, replaces the original problem. . . . Although experience contradicts theory, social life verifies the cosmology by its similarity of structure. Hence cosmology is true (Lévi-Strauss, 1955, p. 434).

In the specific case of Plath's "cosmology" of gender roles, the narrative or image structure of the poem should provide equilibrium between Plath's self-conception as a female intellectual and artist, and her experiences of gender inequality, objectification, and guilt. While this equilibrium or mediation occurs in some poems, such as "Mushrooms," the close-readings below reveal that just as often, Plath's poems exist as structures of oppositional mythemes which produce no mediation, and hence no satisfactory reconciliation between theory and experience.

This section of the paper will briefly apply this methodology to two poems from the bounds of the period from which many of the above quotations from Plath's journals were taken: "Sow" (written in 1957) and "The Rabbit Catcher" (composed 21 May 1962). The similarities revealed by a structural reading of these poems show that despite being composed years apart, both poems convey Plath's enduring anxieties concerning gender roles. The paper concludes that the literary force of these and other poems containing strong images of gender conflict stems in part from the images' inability to mediate Plath's anxieties over gender roles.

"Sow"

Written in loose *terza rima*, Plath's "Sow" confronts, in brutal language, the relationship between female identity and fertility. The mythic binary in the poem is fecundity vs. barrenness, also expressed as rain vs. drought, lust vs. restraint (or sexual taboo), and in the final stanzas, an ordered world opposed to a world in chaos. The sow exists only to "breed"—the word appears

in the first line, referring to the birth of the sow herself, but cyclically implying her own fecundity. The first line's enjambment creates a pun mocking the sexual ethics of postwar suburban America: "God knows how our neighbour managed to breed" (Plath, 1981, p. 60). The half-rhyme paired with "breed" is "hid," implying both the public shame veiling sexual truth, and the "mystery" (in the classical sense of a secretive ritual) surrounding the physiological mystery of human and animal (i.e. non-autochthonic) reproduction. The sow, "impounded from public stare" is a treasured object become a prisoner, in the same way that the postwar woman, robed unwillingly in the feminine mystique, became a prisoner to her husband's life-plan, and her own fertility.

The pig in this poem represents the Western cultural mytheme of plenty, fertility, and sacrifice. Plath describes the sow's "mythic" (in the sense of mere size) proportions:

This vast
Brobdingnag bulk

Of a sow lounged belly-bedded on that black compost,
Fat-rutted eyes
Dream-filmed.

As the food-animal of an agrarian society, the sow gestures towards an attempt at Lévi-Strauss' idea of mediation (in this case, between agriculture and the hunt), in that Plath suggests the domesticated sow, as a "cultivated" rather than a hunted animal, might have grown vegetally out of the "black compost" in which she roots. But this mediation, like the sow, barely has the strength to stand against its own bulk.

In a parody of feminine intellect, the sow is an oracular pig, dreaming a "vision of ancient hoghood."²¹ When it stands, beaten ("thwacked") by the farmer's "jocular fist" (male domestic violence rendered levity, through male subjectivity), it resembles an earth titan, or the enormous myth-animal (elephant, tortoise, etc) on which the world rests:

And the green-copse-castled

Pig hove, letting legend like dried mud drop,

Slowly, grunt

On grunt, up in the flickering light to shape

A monument. . .

Here the “green-copse-castled” sow is the world-pig, a sleepy cosmological animal on which the green earth has been built, and on which human culture resides.

In contrast, the other pigs in the poem (none of them physically present in the narrative), to which Plath compares this great sow, convey the mytheme of barrenness, or, contradictorily, the charm against barrenness.²² The sow is not a “rose-and-larkspurred china suckling/ With a penny slot/ For thrifty children”; that is, she is not a piggy bank—a dual image of security and prudence on the one hand (the single-minded obsession of Plath’s mother) and, on the other, an image of fragility and the “feminine” spirit of *Good Housekeeping*. The metaphor of the piggy bank implies that barrenness, famine, and drought can be staved off through female sacrifice—though never permanently.

Similarly, the sow is not a “dolt pig ripe for heckling,/ About to be/ Glorified for prime flesh and golden crackling/ In a parsley halo.” Although pigs are, in Western culture, agrarian food-animals, this sow cannot be eaten. She is larger than food, and so opposed to the satisfaction of any hunger but her own. In her own gluttony at the end of the poem, she symbolizes famine and destruction. In these lines Plath again mocks, as if from male subjectivity, the female intellect; the food-pig is “Glorified” in its “parsley halo,” a caricature of the classical poet’s laurel wreath. For a woman writer, poetic production is mere garnish on a “proper” life of domestic servitude. Her words, like her body, are, in a masculine-ordered culture of value, production for the sake of consumption.

The third and final image of barrenness in “Sow” resonates with Esther’s struggle for freedom in *The Bell Jar*, and with feminist texts of the early twentieth century, when the limited acceptability and availability of contraception became a major stumbling block to female equality across culture and class. Plath writes that this immense, mythic sow is not:

even one of the common barnyard sows,

Mire-smirched, blowzy,

Maunching thistle and knotweed on her snout-cruise—
 Bloat tun of milk
 On the move, hedged by a litter of feat-foot ninnies

Shrilling her hulk
 To halt for a swig at the pink teats.

Again, in a double-edged image, fecundity is the root of barrenness. The “common” barnyard sow is a working-class woman, unable to control her own reproduction through contraception, and hence unable to escape both her husband’s domination, and poverty.²³ Plath’s language in this passage resonates with early twentieth-century feminist texts advocating contraception, such as Margaret Sanger’s pamphlet *Family Limitation*, and the work of Marie Stopes, including *Wise Parenthood* (1918) and *Radiant Motherhood* (1920).²⁴

In the poem’s final stanza, the sow’s role as a god of destruction becomes obvious. The pig stands, shaking off the vegetal world of its “green-copse-castled” body. Then, “stomaching no constraint,” it proceeds to drink “The seven. . . seas and every earthquaking continent.” Within the space of the poem, the sow trades her mythic function of fecundity for an all-consuming appetite that literally devours the world. Here, Plath admits that female sexual urges are as gross as male ones: animalistic, and more than equal in magnitude. Her own fecundity and appetites threaten to bring down on her life the plague of an impoverished family, the barrenness or drought of intellect, and, ultimately, primeval chaos in place of world-creating order.

In “Sow,” Plath acknowledges Beauvoir’s dialectic of male as culture and female as nature; at the same time, she both exaggerates and sweeps away even biological gender difference, by representing female desire as a source of universal destruction more than equal to the destructive power associated with the male gender roles of hunter and warrior. The mythic sow is Plath’s amplification—even glorification—of self-loathing of the “feminine” to the point at which its capacity for universal destruction becomes empowering, in that it exceeds any comparable masculine power.

Yet, in the methodology of Lévi-Strauss’ structural analysis, the poem has no true mediating image or symbol. Plath’s mythic binaries, in repeated cases throughout her mature poetic output, lack the symbols or mythemes that allow equilibrium (or Jungian compensation) across

the anxiety-inducing gap between Plath's self-conception as a female intellectual equal to her male peers, and her experiences of gender inequality. Plath may consciously employ such structures of unresolved binaries to perpetuate sensations of anguish in the reader, in a gesture opposed to what structuralists such as Jung and Lévi-Strauss would consider the broader "purpose" of myth. However, it is more likely that Plath felt unable or unwilling to introduce an image into the poem that could serve as a mediating mytheme. The poetic force of "Sow"—in contrast to single-image poems such as "Goatsucker," "Blue Moles," "The Colossus," and "Mushrooms" (all 1959), which end with mediation—comes from its unrelenting observations that the cosmology explained by the experience of human society unnerves, rather than satisfies, some of the members of that society.

"The Rabbit Catcher"

Plath's relationship to Ted Hughes, in the context of female and male gender roles, appears on a "raw" mythic level in some of her last poems—meaning that the reader can easily observe a direct correlation between Plath's individual binary struggle of female theory vs. experience, and some of the central binaries of human myth, namely: life vs. death, herbivorous vs. carnivorous, nature vs. culture, and—in the continuation of the total Oedipal myth added to by Freud and Jung—female vs. male. "The Rabbit Catcher," written just four months before Plath and Hughes divorced in September 1962, serves as an excellent example of Plath's late, acute gender anxieties expressed as unmediated mythic binaries.

Plath's journals document her opposing conceptions of Hughes at different moments: as loving husband, domestic partner, and intellectual equal on the one hand; and as hunter, dominator through masculine culture, and even brute on the other. In Plath's poems, these oppositions appear as a mythic binary: the savage or primeval male (hunter, killer) *versus* the agrarian or technological male (plant-nurturer, life-protector). In "The Rabbit Catcher," the Oedipal binary of blood relations also reappears. Hughes is both the father figure who gives love and protection, and the faceless, violent male who must kill or be killed.

Hughes was physically strong, an outdoorsman who grew up in rural Yorkshire. He loved hunting, fishing, and shooting. He observed, and wrote about, nature and animals, as did Plath; the two partners shared their scientific observations and anecdotes of botany and zoology. But in some of her last poems, the image of Hughes as a hunter suggests that Plath sees no possibility of permanent escape from "traditional" gender roles. Poems such as "Pheasant" and

"The Rabbit Catcher" demonstrate a clear breakdown of Plath's positive study of nature when opposed to Hughes' hunter-like pragmatism. In "The Rabbit Catcher," all nature becomes subject to an overwhelming, masculine-ordered culture. The poem exhibits no mediated binary between life and death (or in feminist terms, nature and culture), some image that bears the symbolic meaning of agrarian society or innovation, or the balance between sexual license and taboo. Instead, the poem conveys the impossibility of mediation. The rabbit catcher, Cain-like, subdues nature, represented by Plath's *persona* in the poem.

Plath uses the mythic symbol of the hunter to represent her relationship with Hughes as a relationship between a dominant male and a vulnerable, ultimately victimized, female. From the first line of the poem, Plath describes nature with images of male violence:

It was a place of force—
The wind gagging my mouth with my own blown hair,
Tearing off my voice. . . (Plath, 1981, p. 193)

Here the wind, with its Western mythological associations of impregnation, is not Milton's "Zephyr with Aurora playing," but a force of sexual aggression. The wind gags the speaker physically, threatening her life, but also stopping her "voice"—a word with the double connotation of authority (her right to equal authority in marriage) and poetry (her poetic and creative voice). In the same stanza, the sea blinds the speaker with "the lives of the dead" it contains. The sea, a feminine image in Western poetry, and in Western mythology a symbol of fecundity and generative power, becomes a place of death under the pressure of a masculine ordering of the world: "the lives of the dead/ Unreeling in it."²⁵

Plath describes the rabbit snares set by Hughes as "Zeros, shutting on nothing,/Set close, like birth pangs." This image sets the pain of female biological "creativity" through childbirth in opposition to the original act of male creativity: the pain of the hunted food-animal, the pain of death. Furthermore, the walk to the snares describes a section of landscape that is, in its topology and poetic function, a metaphor for the female genitalia, and the single-minded male drive towards them:

There was only one place to get to.
Simmering, perfumed,

The paths narrowed into the hollow.

The rabbit snares in the hollow are “almost effaced”; at this moment in the poem, the snares seem natural, part of the landscape—and thus feminine. Female genitalia “trap” the male, and in doing so efface themselves, and the whole woman, with the shame of their ruse—a shame projected by the male caught in the trap.²⁶

Plath then describes the rabbit catcher thinking of his traps:

How they awaited him, those little deaths!

They waited like sweethearts. They excited him.

Here the poem’s narrative reveals its main binary: the male as killer, and the female as prey. The hunter’s “sweethearts” are, contrary to expectation, not women, but his animal food. Two mythic binaries overlap, and two relations become one: “hunter kills prey,” and “man marries woman.” The hunter was, just a moment before, vaguely agrarian, fatherly:

I felt a still busyness, an intent.

I felt hands round a tea mug, dull, blunt,

Ringing the white china.

But the warm hands around the tea mug are “dull, blunt”: not the hands of a protector or innovator, an ally of the gods, but the hands of the hunter, the murderer, the taboo-breaker (through father-daughter incest), and the outcast. Even as Plath’s description of the hunter’s body aligns with the domestic pole of another mythic binary (indoor-outdoor), she shows the hunter thinking of his snares. The outdoor hunter-instinct reads as indistinguishable from the indoor or domestic sex-instinct.

In the poem’s final stanza, Plath widens the metaphor, like the snare of its signifier, by describing the female-male relationship as a wire rabbit trap:

And we, too, had a relationship—

Tight wires between us,

Pegs too deep to uproot, and a mind like a ring

Sliding shut on some quick thing,
The constriction killing me also.

Plath's imagery denies a simple equation between the poem's female *persona* and the snared rabbit. Nor does the final image describe a man's brute strength; Plath delineates an intellectual rather than a physical difference. The male *mind*, "like a ring/ Sliding shut on some quick thing," equates intellect with a kind of hunting: logical, incisive, quick. Plath's female *persona* in the poem describes herself as the *collateral* victim of its effect—in Lévi-Strauss' mythic terms, an underrating of family relations that produces instances of unintentional sibling or parent/child murder.

With her voice "gagged," and her self-conception caught in the hunter's snare, the poem's *persona* does not even have the strength to suggest an opposite, more expansive or intuitive, female intellectual process. The springing of a trap—whether on a rabbit, or an idea—overpowers both female and feminine. As is common in myth, Plath does not distinguish characters' motivations in the poem. Nor does she distinguish between feeling and intellect, or between the trapped herbivore as food source or sexual prey ("sweethearts"). The poem asserts the power and cruelty of the male hunter-killer mytheme, and the corresponding vulnerability and forced passivity of the female vegetal producer mytheme: the ancient mythic, sociological, and literary norm. Like "true" myth, it describes without explaining. Yet finally, unlike true myth, it does not provide any equilibrium between theory (cosmology) and reality (experience).

Conclusion

Sylvia Plath's prose and poetry show an informed woman recording the gender role anxieties of an entire generation of white, well-educated, middle-class young women in the United States and England in the 1950s. Plath is a proto-second-wave feminist, although she lived most of her life without the help of living or textual role models in this category, apart from Dr. Ruth Beuscher. Plath engaged with, and in some cases, worked through, psychological and interpersonal conflicts connected to gender roles, while simultaneously battling depression, poverty, and rejection as a professional writer. In taking Ted Hughes as her partner, she felt that she had not compromised, and achieved a major goal in her life-plan. Plath's journals show her pride at having "blasted through [the] conventional morality" of "traditional" postwar sexual conventions and gender roles (Plath, 2000, p. 269). For a young middle-class American woman

in the 1950s, it took courage for Plath to seek birth control, deliberately lose her virginity, and expect to be treated equally by her male partners.

Plath's journals document everything she wanted from her life: a writing career, children, and domestic happiness with a male partner who considered Plath an intellectual equal. *The Bell Jar*, as a realistic narrative, mimetic of Plath's experiences, does not end with the fulfillment of all these wishes, but with the achievement of the element essential to all of Esther's (and Plath's) larger ambitions: freedom from reproductive slavery. In contrast, the unmediated mythic binaries of many of Plath's poems demonstrate that anxieties over gender roles continued to plague her through her years of marriage and childrearing.²⁷ The dissatisfaction and depression that gives these poems their force also illuminate gender issues and inequalities in contemporary society. Contemporary women (and men) who share the ambitions of Plath's life-plan still struggle with the demands placed on them by multiple, shifting gender roles. Fifty years later, the gender anxieties articulated in Plath's journals, novel, and poetry provide literary inspiration in the debate over how individuals and societies can achieve their ambitions for equal, balanced, and reciprocating gender roles.

References

- Beauvoir, Simone de. (2009). *The second sex*. Ed. Constance Borde and Sheila Malovany-Chevalier. London: Jonathan Cape.
- Beauvoir, Simone de. (1953). *The second sex*. (Parshley, H. M., Trans.). London: Jonathan Cape.
- Bryant, Marsha. (2002). Plath, domesticity, and the art of advertising. *College Literature*, 29 (3), 17-32.
- Churchwell, Sarah. (1998). Ted Hughes and the corpus of Sylvia Plath. *Criticism*, 40 (1), 99-132.
- Friedan, Betty. (2001). *The feminine mystique*. Norton paperback ed. New York and London: W. W. Norton & Co. (Original work published in 1963)
- Hughes, Ted. (1955). Sylvia Plath. *Poetry Book Society Bulletin February*, 1.
- Lévi-Strauss, Claude. (1955). The structural study of myth. *American Folklore Society*, 68 (270), 428-44.
- Lévi-Strauss, Claude. (1981). Structuralism and myth. *The Kenyon Review*, New Series, 3 (2), 64-88.
- Lowe, Peter J. (2007). "Full fathom five": The dead father in Sylvia Plath's seascapes. *Texas Studies in Literature and Language*, 49 (1), 21-44.
- May, Elaine Tyler. (1988). *Homeward bound: American families in the Cold War era*. New York: Basic Books.
- Miller, Douglas T., & Nowak, Marion. (1977). *The fifties: The way we really were*. Garden City: Doubleday.
- Plath, Sylvia. (2005). *The bell jar*. (Faber ed.). London: Faber and Faber. Original work published in 1963.
- Plath, Sylvia. (1981). *Collected poems*. Ed. Ted Hughes. London: Faber and Faber.
- Plath, Sylvia (2000). *The journals of Sylvia Plath 1950-1962*. Ed. Karen V. Kukil (Anchor Books paperback ed.) London: Faber and Faber.
- Walters, Margaret. (2005). *Feminism: A very short introduction*. Very Short Introductions. Oxford: Oxford University Press.

Footnotes

- ¹ Friedan (1963/2001) lists the contents of an issue of McCall's magazine from July 1960, which include "A short story about how a teenager who doesn't go to college gets a man away from a bright college girl," and "A short story about a nineteen-year-old girl sent to a charm school to learn how to bat her eyelashes and lose at tennis" (pp. 81-83).
- ² "[A woman] does not have to choose between marriage and a career; that was the mistaken choice of the feminine mystique. In actual fact it is not as difficult as the feminine mystique implies, to combine marriage and motherhood and even the kind of lifelong personal purpose that once was called 'career.' It merely takes a new life plan—in terms of one's whole life as a woman" (Friedan, 1963/2001, pp. 468-69).
- ³ For descriptions of 1950s American society including hetero-normative marriage rhetoric, the breadwinner/housewife relationship, professional homemaking, and domestic drudgery, see Miller & Nowak, 1977; May, 1988.
- ⁴ For example, as Marsha Bryant (2002) writes, "Plath declares [to her mother] that she will transform her kitchen into 'an ad out of House and Garden with Ted's help,' hardly the bohemian image we expect from someone seeking to become the female equivalent of W. B. Yeats" (p. 3).
- ⁵ Plath is aware that this binary division between male independence and female dependence is in itself a product of a masculine-ordered postwar society that attempted to confine women to domestic roles through celebration of Friedan's "feminine mystique."
- ⁶ Plath's solution to Esther's gender role anxieties in *The Bell Jar* is the forceful and convincing argument that equality of access to sexual gratification without pregnancy reconciles the most fundamental imbalance in the opposition of "traditional" male and female gender roles.
- ⁷ As a Fulbright Scholar, Plath doubtless recalled Woolf's descriptions of the gender inequalities she experienced while at Cambridge, detailed in *A room of one's own*.
- ⁸ *The Second Sex* was first translated into English in 1953 by H. M. Parshley. This edition has been described as "grossly translated and truncated in its English-language version," and criticized both for its unsubtle translation of Beauvoir's philosophical concepts, and for excising long passages from the text. Nevertheless, Parshley's translation remained the standard until 2009. See Beauvoir (2009).
- ⁹ Otto Plath died "of undiagnosed diabetes, following an emergency leg amputation" (*Dictionary of National Biography*).

- ¹⁰ "He wouldn't go to a doctor, wouldn't believe in God and heiled Hitler in the privacy of his home. She suffered. Married to a man she didn't love" (Plath, 2000, p. 430).
- ¹¹ "He didn't leave hardly enough money to bury him because he lost on the stocks, just like her own father did, and wasn't it awful. Men men men" (Plath, 2000, p. 430).
- ¹² "She gave her daughter books by noble women called 'The Case for Chastity.' She told her any man who was worth his salt cared for a woman to be a virgin if she were to be his wife, no matter how many crops of wild oats he'd sown on his own" (Plath, 2000, p. 432). However, even for a well-educated young woman in early 1950s Massachusetts, Aurelia's fears for her daughter were not illusory, as testified by Plath's experience of a near sexual assault by a fraternity boy at the age of 18 (See Plath, 2000, p. 40).
- ¹³ Plath (2000) writes openly on the Electra theme in "Electra on Azalea Path" (finished Friday, 20 March 1959) (p. 475, p. 77). During a reading for BBC radio shortly before her death, she speaks about the Electra Complex as a theme of her poem "Daddy" (See Plath, 1981, p. 293).
- ¹⁴ "If I really think I killed and castrated my father may all my dreams of deformed and tortured people be my guilty visions of him or fears of punishment for me?" (Plath, 2000, p. 476). This comment reveals that Beuscher's Freudian psychoanalytic method treated the Oedipus complex as equally applicable to either gender. Beuscher did not seem to misinterpret the Freudian concept of penis envy or subscribe to the "masculinity complex," as many postwar psychiatrists in America did (See Friedan, 1963/2001, pp. 184-90).
- ¹⁵ Plath (2000) elaborates her "chain of fear-logic," which every committed and impoverished writer experiences; see pp. 436-37.
- ¹⁶ Plath's aspirations after university include: "A job, obviously. Marriage, I hope, by the time I'm twenty-five, at least. Work in psychology, sociology, or bookishness" (Plath, 2000, p.167).
- ¹⁷ "I feel he wants to prove his virile dominance. . . . In his writings, women have no personalities but are merely sex machines on which he displays his prowess in sexual technique. . ." (Plath, 2000, p. 155).
- ¹⁸ Esther is shocked to discover that her college boyfriend, Buddy Willard, is not a virgin, although he expects to marry a virgin. She quickly learns that this double standard is quietly accepted (See Plath, 1963/2005, p. 66).
- ¹⁹ "Myth. . . should be put in the whole gamut of linguistic expressions at the end opposite to that of poetry, in spite of all the claims which have been made to prove the contrary. Poetry is a kind of speech which cannot be translated except at the cost of serious distortions;

whereas the mythical value of the myth remains preserved, even through the worst translation” (Lévi-Strauss, 1955, p. 430).

- ²⁰ “[The] difference between individually created works and myths which are recognized as such by a given community is one not of nature but of degree. In this respect, structural analysis can be legitimately applied to myths stemming from a collective tradition as well as to works by a single author, since in both cases the intention is the same: to... seek to grasp... the life-story of the individual and in the particular society or environment” (Lévi-Strauss, 1981, p. 65).
- ²¹ This image conjures, in a feminist reading, one of the few outlets for intellectual expression available to ancient and medieval women, from the Delphic oracle to Margery Kempe, Antonia Bourigue, Lady Eleanor Davis, and Anna Trapnel: social authority and rational power projected in the guise of prophecy, revelation, or madness.
- ²² As Lévi-Strauss (1981) writes, his structural approach explains the “double, reciprocal exchange of functions” in the logic of myth, through which “we may... understand another property of mythical figures the world over, namely, that the same god may be endowed with contradictory attributes; for instance, he may be *good* and bad at the same time” (p. 442).
- ²³ “Blowzy,” a Shakespearean adjective, was still in use in the twentieth century to describe a fat, red-faced, or unkempt woman—a slattern.
- ²⁴ Stopes warns, in sensational language, against “the thriftless who breed so rapidly [and] tend by that very fact to bring forth children who are weakened and handicapped by physical as well as mental warping and weakness, and at the same time to demand their support from the sound and thrifty” (Quoted in Walters, 2005, p. 93).
- ²⁵ For the role of sea imagery and drowning in Plath’s work, and its associations with her father (See Lowe, 2007).
- ²⁶ The word “efface” here may also—in the context of Plath’s thinking about her creativity, writing, and writer’s block—take on its figurative meaning, describing words or phrases erased from a written composition or document. See “efface,” n., 2 (*Oxford English Dictionary*).
- ²⁷ A 1965 comment by Hughes (1998) draws a fascinating—if patriarchal-normative—parallel between Plath’s poetic productivity and her domesticity: “the truly miraculous thing [was] that in two years, while she was almost fully occupied with children and house-keeping, she underwent a poetic development that has hardly any equal on record, for suddenness and

completeness. The birth of her first child seemed to start the process. All at once she could compose at top speed, and with her full weight. Her second child brought things a giant step forward" (p.111).

神話へのミメシス—シルヴィア・プラス作品におけるジェンダー役割への不安 クリストファー・サイモンズ

本論文は、詩人シルヴィア・プラス (1932-1963) 作品におけるジェンダー役割への不安について伝記的・文学的に考察する。研究の背景として、プラスを、彼女自身知ることはなかった同時代のフェミニスト、とりわけベティ・フリーダンの著作『新しい女性の創造』(1963; *The Feminine Mystique*) の文脈に位置付ける。また、プラスのジェンダー関係についての内なる葛藤に両親が与えた影響や、この葛藤について彼女自身が日記に記した分析についてフロイトやユングの精神分析の言語を用いて論じる。

本稿の方法論は、クロード・レヴィ＝ストロースの神話構造分析を取り入れ、プラスの著作とりわけ詩作品における二項対立的なジェンダー役割を読み解く。レヴィ＝ストロースはそれらの方法を文学批評で用いることに難色を示しているものの、この特定のケースにおいては、詩人自身の心理学・人類学の知識によって無意識にその著作での原型的・神話的構造が強調されているため、この女性詩人の作品を分析するのに有益な枠組みを与える。

次に、プラスのジェンダー役割に関する散文による著述（日記や小説）と詩作品を対照するものとして取り上げる。本稿は、プラスの日記が、彼女が二項対立的なジェンダー役割概念を形成するに至った経験や、それによって生じた不安についての記録であることを示す。日記や小説『ベル・ジャー』(*The Bell Jar*) において、プラスは模倣的にこうした対立を仲介し解消しようと試みる。たとえば、主人公エスター・グリーンウッドの生涯を重要な出来事を歴史とそれらの出来事に対してのエスターの意識的・感情的反応を、時間の流れとは無関係に語る。『ベル・ジャー』の結論は、ミメシスと進歩的な自己統一という心理的勝利を明らかにする。作品のクライマックスは彼女自身の精神的変遷の表象と将来への投影を示しており、彼女のセラピスト、ルース・ブーシャー博士の影響を受けている。

対照的に、詩作品では、プラスは、ジェンダー役割への不安を仲介し解決しようとする試みにおいて、構造化された神話的対立に対しより対話的に取り組んでいる。プラスの詩2作品を精読すると、これらの詩に現れる神話的な二項（たとえば父－母、男－女、破壊者－創造者、捕食者－被食者、文化－自然等）は仲介や解決を受けつけないことが明らかになる。本論文は、解消されない神話的二項対立によって表現されたプラスのジェンダー役割への不安の文学的效果を考察し、それらの緊張関係は詩の情緒的力を高めると同時に、プラスが最終的に満足いく自身のジェンダー役割を見出すことが出来なかったことへ洞察を与える。

本研究は、プラスのジェンダー役割への不安は、イギリス・アメリカにおける初期第二次フェミニズム研究と、現代社会における女性のジェンダー役割をめぐる現在進行の論争に、価

値ある議論とレトリックを与えると結論付ける。

Keywords:

シルヴィア・プラス、ジェンダー、フェミニズム、神話、詩

子育て中の親がもつシングルファザーに対する認識

平沼晶子

1 問題と目的

近年わが国においては、核家族化や少子化、母親の就労の増加、離婚率の上昇などの社会変化にともない子育てをする親の生活背景は多様化しており、そのひとつにひとり親家族¹の増加がみられる。厚生労働省（2005）の2003年度調査によると、母子世帯（父のいない児童がその母によって養育されている世帯）は1998年の前回調査に比べて28.3%増の122万5400世帯と急増しており、父子世帯（母のいない児童がその父によって養育されている世帯）も6.4%増の17万3800世帯と増加している。そして、全世帯に占める割合は、母子世帯が2.7%、父子世帯では0.4%と報告されている。これまで、日本におけるひとり親家族についての研究の多くは母子家族を対象としており、世帯数の少なさや母子家族に比して経済的に安定しているという認識もあって、父子家族は注目されてこなかった。しかし、現存する性別役割分業社会において父親が主養育者として子育てをするには、仕事との両立の困難や母親中心の子育てネットワークへの入りにくさなど、日本人のジェンダー意識から生じる様々な問題を抱えている。その様な状況において、シングルファザー²は生活上関わる人々からの理解と協力を必要としているが（平沼, 2008）、彼らに対する社会的偏見や同情の目はいまだに少なくないと指摘される（大日向, 2005）。従って、シングルファザーが増加傾向にある今日、シングルファザーの子育てに対する社会の認識を検証することは、彼らへの日常的で地域に根ざしたサポートを考える上で必要と思われる。

そこで、本研究ではひとり親家族を外側から見ている人々の意識に焦点をあて、乳児から中学生までの子どもをもつ親のシングルファザーに対する認識を明らかにすることを目的とする。乳児から中学生までの子どもをもつ親を対象とする理由は、子育てに関して義務教育までが子どもの世話や自立を支えていくひとつの区切りであること、子育てという共通の立場にある人々が自身の子育てと比較してシングルファザーの子育てをどう認識しているかを知ることにより、シングルファザーと他の親との連携の方向性が見出されると考えたからである。平沼（2007）は、シングルファザーの語りを分析した結果、彼らが直面する問題は、仕事と家事・子育ての両立の困難やそのための努力などに関する「生活や子育て」の側面、子どもの育ちや親子関係に関する「子ども」の側面、保護者および保育園や学校の先生との連携に関する「サポート」の側面からなり、これらがどのような状態にあり、どの様に調整されるかがシングルファザーの生き方に影響を与えていることを明らかにした。そこで、シングルファザーの「生活や子育て」「子ども」「サポート」の3側面から人々の認識を捉えるために以下の点を検討

する。

1.1 シングルファザーの生活や子育てについての認識

シングルファザーへのインタビュー調査（平沼 & 秦野, 2004）からは、主に経済的安定を担ってきた父親が新たに家事や子育てもこなすという多重役割による身体的、精神的負担が大きいことが示されている。また、シングルファザーには母性に対する幻想があり、どんなに頑張ってもお母さんの代わりはできないというジェンダーバイアスによる負い目もちやすい（大日向, 2003）。一方で、シングルファザーの手記からは、様々な困難に立ち向かいながらも、子育てを通しての父親自身の成長が示されている（土堤内, 2004）。そこで、シングルファザーにみられる仕事と家事・子育ての両立の難しさとそれによるストレス、親としての責任感や成長、母親がいないという子育て環境への不安について、子育て中の親の認識を検討する。

1.2 シングルファザーの子どもについての認識

シングルファザーの子育てにおいて、幼児期には嫉、学齢期には教育や思春期の問題、それ以降も進学や就職など、成長に合わせて心配が尽きず、父親がひとりで子育てをすることへの不安がみられる（平沼 & 秦野, 2004）。一方で、思いやりや自主性など子どもの社会性の発達が促されることも示されている（池田, 1996）。そこで、父親ひとりの子育てが子どもの成長に与える影響について、子育て中の親の認識を検討する。

1.3 シングルファザーと子どもへのサポートについての認識

先述のとおりシングルファザーの子育てには周囲の理解や協力が必要とされている。そこで、子育て中の親がシングルファザー家族との関わりやサポートをどの様に考えているのかについて検討する。

そして、これらの3側面で示された結果に基づき以下の3点を明らかにしたい。第1には「シングルファザーの子育てに対する理解は示されるのか」というシングルファザーの心理や子育てへの理解についてである。第2に「父子家族という家族形態は問題とされるのか、また、シングルファザーの生活や子育てにおいて何が問題とみられているのか」についてである。父子家族が総世帯数の5%を占め、子どもの育つ環境の多様化が著しいアメリカ社会においては、両親の揃った家族が一般的という見方はされていない（Weinraub & Gringlas, 1995）。また、家族形態が子どもに与える影響を検討した研究からは、両親家族やひとり親家族といっ

た形態の違いよりも親子の信頼関係や親の養育態度など家族がどの様に機能しているかが子どもの成長には関係していることが明らかにされ (Demo & Acocck, 1996)、父子家族という形態が直接子どもに何らかの影響を及ぼすのではないという認識がもたれている。わが国とアメリカ社会とでは状況が異なることを考えれば、シングルファザーの子育てにおいて何が問題とみられているのかを家族の形態や機能という観点から捉えることが重要と思われる。第3に「シングルファザーに対する認識には回答者の属性による違いがみられるのか、そこには個人のもつジェンダー意識や生活や子育てを通しての経験がどの様に関係しているのか」についてである。本調査と同時期の2004年の世論調査によれば、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考えを男性は女性より高く支持しており、男性の方が男女の役割分担を固定的に捉える傾向が示されている (内閣府, 2004)。また、男女共同参画社会といわれる今日にあっても、共働き夫婦とそうでない夫婦とでは家事分担や子育てに対する認識に違いがみられるといわれる (柏木, 1993)。従って、シングルファザーに対する認識についても、個人のもつ性別役割分業観、あるいは、生活や子育てを通しての経験がどの様に関係しているのかを検討する必要があると思われる。

シングルファザーの状況には、離別や死別、子どもの年齢や性別、経済状態の違いなどによる個性がある。また、回答者の側にも実際にシングルファザーと接する機会の有無などにより認識は異なることが推測される。従って、これらの条件を統制した上での調査が必要と思われるが、本研究では、これまでなされてこなかったシングルファザーの子育てに関する意識調査の第一歩として、シングルファザーを「ひとり親として子育てをしている男性」と考えた時の、子育て中の親の認識の特徴を把握することを目的とした。そして、シングルファザーという「マイノリティ」を扱う場合に、回答に与える「社会的好ましさ」の影響も考慮しなければならないと思われるが、父子家族が増加する今日、人々がもつシングルファザーに対する認識の傾向を示すことには意味があると考えた。

2 方法

2.1 調査対象者

家族内に乳児から中学生までの子どもをもつ両親家族の親 407 人 (父親 166 人, 母親 241 人) である (回収率 67.6%)。対象者には、中学生以下の子どもの他にそれより高い年齢の子どもをもつ親も含まれている。調査手続きは3通りからなる。①東京都内のM私立認可保育園に質問紙の配布と回収を委託し、園児の父親 29 人と母親 82 人から回答が得られた (回収率 51.2%)。②東京都内のH公立幼稚園に質問紙の配布と回収を委託し、園児の父親 54 人と母親 72 人から回答が得られた (回収率 70.0%)。③筆者が保護者として属するPTAの関係者

や心理の職場や大学院の知人に手渡しまたは郵送で配布回収し、東京近郊在住で中学生以下の子どもをもつ父親 83 人と母親 87 人から回答が得られた（回収率 82.9%）。①②③において、夫婦ともに回答が可能な場合は 2 人分の質問紙を配布する様にしたが、回収にあたってはプライバシー保護の観点から照合することは差し控えた。調査期間は 2005 年 2 月－6 月である。尚、調査対象者には本研究の目的、意義について依頼文に明記し、個人が特定されないことを前提に発表および結果の社会的還元について同意を得た上で調査を実施した。

属性は以下のとおりである。親年齢：父親平均 41.2 歳（26-56 歳，SD6.1），20 代 3.0%，30 代 34.3%，40 代 53.0%，50 代 9.6%。母親平均 38.0 歳（26-53 歳，SD 5.0），20 代 4.1%，30 代 54.8%，40 代 39.8%，50 代 0.4%，無回答 0.8%。長子年齢の平均：9.2 歳（0-25 歳，SD 5.0）。長子の就学状況：未就学 134 人（32.9%），小学生 155 人（38.1%），中学生 70 人（17.2%），高校生以上 48 人（11.8%）。子どもの数の平均：1.9 人（1-4 人，SD 0.7）。子どもの性別構成：男のみ 112 人（27.6%），女のみ 117 人（28.8%），男女とも 177 人（43.5%），無回答 1 人（0.2%）。家族構成：核家族 87.7%，拡大家族 12.3%。父親の就労形態：フルタイム 397 人（97.5%），パートタイムその他 10 人（2.5%）。母親の就労形態：フルタイム 64 人（15.7%），パートタイムその他 128 人（31.4%），専業主婦 214 人（52.6%），無回答 1 人（0.2%）。

2.2 調査内容

以下の 6 領域から構成される質問紙を作成して調査を実施した。その際、シングルファザーとは「ひとり親として子育てをしている男性」と考える様指示した。

2.2.1 シングルファザーについての知識と考え

シングルファザーについての認識を検討するにあたり、回答者のもつ予備知識や考えは参考になると考え 6 項目を作成した。まず、「父親のみで子どもを養育する世帯が総世帯数に占める割合」を多肢選択法により 6 つの選択肢（100 世帯に 1 世帯・150 世帯に 1 世帯・200 世帯に 1 世帯・250 世帯に 1 世帯・300 世帯に 1 世帯・全くわからない）から単一回答求めた。「シングルファザーとシングルマザーの比率」についても同様に、6 つの選択肢（シングルマザーの 1/2・1/3・1/5・1/7・1/10・全くわからない）から単一回答を求めた。次に、公的支援について「シングルファザーはシングルマザーと同様の経済的支援がなされていると思うか」、生活や子育ての困難について「生活や子育てにおいてシングルファザーはシングルマザーより大変だと思うか」を、「思わない」「どちらかというと思わない」「どちらかというと思う」「思う」の 4 段階評定で回答を求めた。そして、「シングルファザーである理由としてイメージするもの」を 5 つの選択肢（離別・死別・離別と死別の両方・未婚・その他）より単一回答を求め、最後に、シングルファザーを知る経験について、「これまでシングルファ

ザーと接する機会があったかの有無」を尋ねた。

2.2.2 シングルファザーに対するイメージ

シングルファザーに対して抱くイメージは、シングルファザーに対する認識に関係すると考え、井上 & 小林（1985）によるパーソナリティ認知に用いられやすい特性形容詞対を参考に、シングルファザーのイメージに関する 20 組の項目について 4 段階評定で回答を求めた（e.g., 暗い 1. とても（1 点）－2. やや（2 点）－3. やや（3 点）－4. とても（4 点）明るい）。

2.2.3 生活や子育てについての認識

シングルファザーの「生活や子育て」への認識を検討するために、平沼 & 秦野（2004）で示された困難や負担感、土堤内（2004）で示された責任感や成長、大日向（2003）で示された母親不在の家族環境について 23 項目を作成し、「1. そう思わない（1 点）」「2. どちらかというところと思わない（2 点）」「3. どちらかというところと思う（3 点）」「4. そう思う（4 点）」の 4 段階評定で回答を求めた。

2.2.4 子どもについての認識

シングルファザーの「子ども」への認識を検討するために、小田切（2003）の「離婚家庭の子どもへの否定的イメージ」と「離婚による人間的成長」の因子項目を参考に、平沼 & 秦野（2004）で示されたシングルファザー自身が不安に感じている父親ひとりの子育てによる子どもの成長や精神面に与える影響、池田（1996）で示された子どもの社会性の発達など、子どもの育ちについて 14 項目を作成し、「1. そう思わない（1 点）」「2. どちらかというところと思わない（2 点）」「3. どちらかというところと思う（3 点）」「4. そう思う（4 点）」の 4 段階評定で回答を求めた。

2.2.5 サポートについての認識

シングルファザー家族への「サポート」への認識を検討するために、回答者がどの程度協力的な姿勢であるのかについて 14 項目を作成し、「1. そう思わない（1 点）」「2. どちらかというところと思わない（2 点）」「3. どちらかというところと思う（3 点）」「4. そう思う（4 点）」の 4 段階評定で回答を求めた。

2.2.6 自由記述

シングルファザーに対する考えや調査への感想について自由な記述を求め、シングルファザーへの認識を検討するための参考資料とした。

2.3. 調査内容の分析

統計的処理は SPSS 分析ソフト（Ver.11.5）を使用し、得られたデータについて探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行い、因子構造を明らかにした。その後、各因子で分散

分析または t 検定を行い、回答者の属性による違いを検討した。

3 結果と考察

3.1 子育て中の親のシングルファザーに対する認識

子育て中の親のシングルファザーに対する認識について、自由記述を除く調査 5 領域の結果を示し、本研究で明らかにする第 1 と第 2 の設問である「シングルファザーの子育てに対する理解は示されるのか」「父子家族という家族形態は問題とされるのか」「シングルファザーの生活や子育てにおいて何が問題とみられているのか」について考察する。尚、第 3 の設問については後述する。

3.1.1 シングルファザーについての知識と考え

まず、「父親のみで子どもを養育する世帯が総世帯数に占める割合」については、実際の「250 世帯に 1 世帯」³と回答した人は 7% で、実際より多い選択肢への回答が 35%、少ない選択肢への回答が 22% で、「全くわからない」が 36% だった。次に、「シングルファザーとシングルマザーの比率」については、実際の「シングルマザーの 1/7」⁴と回答した人は 10% で、実際より高い選択肢への回答が 47%、低い選択肢への回答が 28%、「全くわからない」が 15% だった。いずれにおいても、シングルファザーの動態に関する正確な情報を把握していないことが示された。

そして、「シングルファザーはシングルマザーと同様の経済的支援がなされていると思うか」に対しては、「思う」「どちらかと思う」が 23% で、「思わない」「どちらかと思う」が 77% であった。また、「生活や子育てにおいてシングルファザーはシングルマザーより大変だと思うか」については、「思う」「どちらかと思う」が 87% で、「思わない」「どちらかと思う」が 13% であった。実際にシングルファザーを対象とした公的支援は、一部の市町村を除きシングルマザーに比べて非常に少ない。回答者の 77% は同じひとり親であってもシングルファザーへの公的支援の少なさを認識し、87% はシングルファザーの方が生活や子育てが大変だと感じていた。

また、「シングルファザーである理由」については、現状では離別が死別を上回り離別によるシングルファザーが増加傾向にあるが、離別と死別の両方をイメージする人が 57%、死別が 24%、離別が 19% だった。最後に、「これまでシングルファザーと接する機会があったかの有無」については、「ある」が 145 人 (36%)、「ない」が 261 人 (64%)、無回答 1 人 (0.2%) だった。父親母親別でみると、「接する機会がある」と回答したのは父親では 28%、母親では 41% となっており、母親の方が接する比率が高かった。子どもの年齢別では、「接する機会がある」と回答したのは長子が未就学では 23%、小学生では 35%、中学生以上では

45% と子どもの年齢が高くなるほど接する比率が高くなっていた。

3.1.2 シングルファザーに対するイメージ

シングルファザーのイメージに関する 20 の形容詞対について 4 段階評定で得られた回答を用いて因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。因子の解釈については因子負荷量 .40 以上を基準に行い 7 項目を削除した。その後、採用した 13 項目について再度因子分析を行い、3 因子が抽出された（Table 1）。第 1 因子では、「思いやりのあるーわがままな」「真面目なー不真面目な」など人間性を反映する 5 項目で負荷量が高く、「誠実さ」因子とした。第 2 因子では、「頼もしいー頼りない」「強いー弱い」など力強さに関連する 4 項目で負荷量が高く、「たくましさ」因子とした。第 3 因子では、「明るいー暗い」「陽気なー陰気な」など活力に関連する 4 項目で負荷量が高く、「明るさ」因子とした。

次に、因子に含まれる項目の「評定値の平均値」を算出した。その結果、「誠実さ（ M 2.96, SD .65）」と「たくましさ（ M 2.73, SD .77）」は高めに、「明るさ（ M 2.34, SD .69）」は低めに位置した。そこには、シングルファザーを誠実でたくましいとイメージする一方、自由が少なく疲れているなどのやや暗いイメージも感じていることが示された。尚、以下でも同様に各因子の「評定値の平均値」を得点化して示した。

Table 1 シングルファザーに対するイメージの因子分析結果

	F1	F2	F3	共通性
第 1 因子（誠実さ）				
思いやりのあるーわがままな	.84	-.19	.16	.64
真面目なー不真面目な	.77	-.06	-.17	.46
責任感のあるー無責任な	.73	.16	-.11	.63
落ち着いたー落着きのない	.55	.08	.03	.39
勇敢なー臆病な	.46	.27	.00	.45
第 2 因子（たくましさ）				
頼もしいー頼りない	.05	.87	-.13	.68
強いー弱い	-.06	.79	-.08	.49
外交的なー内向的な	-.04	.65	.22	.62
積極的なー消極的な	.04	.60	.15	.54
第 3 因子（明るさ）				
明るいー暗い	-.05	.10	.74	.61
陽気なー陰気な	.08	.07	.69	.61
自由なー不自由な	-.16	-.13	.65	.28
元気なー疲れた	.17	.03	.55	.44
因子寄与	5.08	1.16	.59	
累積寄与率（%）	39.11	48.04	52.55	
信頼性係数（ α ）	.83	.83	.75	
因子間相関				
F1	1.00			
F2	.65	1.00		
F3	.48	.66	1.00	

3.1.3 シングルファザーの生活や子育てについての認識

シングルファザーの生活や子育てに関する 23 の質問項目について 4 段階評定で得られた回答を用いて因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行い、因子負荷量 .40 以上を基準に 7 項目を除いた。その後、採用した 16 項目について再分析を行い 4 因子が抽出された（Table 2）。第 1 因子では、「身体的に疲労している」「精神的に苦しい」などの 5 項目で負荷量が高く、子育てにおける困難や不安を反映する因子と考え、「子育てストレス」因子とした。第 2 因子では、「子どもへの責任感が強い」「子どもとの精神的つながりが強い」などの 4 項目で負荷量が高く、親役割としての責任に関する因子と解釈し、「親責任」因子とした。第 3 因子では、「子育てをすることで人間的に成長する」「子育ては人生で貴重な経験だ」などの 3 項目で負荷量が高く、子育てを通しての親自身の成長に関する因子と考え、「親の成長」因子とした。第 4 因子では、「一般に、子どもは母親の手で育てるべきだ」「子育てをしなくてはなら

Table 2 シングルファザーの生活や子育てについての因子分析結果

	F1	F2	F3	F4	共通性
第 1 因子（子育てストレス）					
身体的に疲労している	.87	-.13	.00	-.11	.65
精神的に苦しい	.78	-.08	.04	.05	.63
仕事と家事と子育てを両立していくのは大変だ	.62	.07	.04	-.11	.37
子育てのために仕事に支障をきたすことが多い	.52	.24	-.03	.07	.40
子育てへの不安が強い	.46	.11	-.01	.08	.27
第 2 因子（親責任）					
子どもへの責任感が強い	.11	.69	-.06	.08	.48
子どもとの精神的つながりが強い	-.07	.65	.02	-.03	.44
子どものために努力している	.08	.64	-.01	-.03	.44
子育てに熱心である	-.03	.59	.12	-.01	.42
第 3 因子（親の成長）					
子育てをすることで人間的に成長する	-.01	.00	.84	.15	.67
子育ては人生で貴重な経験だ	.07	-.05	.84	-.05	.69
子育てを通して多くを学んでいる	-.02	.17	.52	-.07	.40
第 4 因子（家族環境）					
一般に、子どもは母親の手で育てるべきだ	-.04	.00	.06	.62	.35
子育てをしなくてはならなくて気の毒だ	.13	.03	-.12	.60	.49
子どものためにも再婚をするのが良い	-.15	.09	.06	.54	.23
子どもが順調に育ちにくい	.08	-.19	.03	.51	.35
因子寄与	3.00	2.53	.95	.81	
累積寄与率（%）	18.73	34.53	40.46	45.54	
信頼性係数（ α ）	.78	.75	.79	.66	
因子間相関	F1	F2	F3	F4	
	1.00				
	.19	1.00			
	.05	.49	1.00		
	.42	-.17	-.24	1.00	

なくて気の毒だ」などの4項目で負荷量が高く、子育て環境としての家族構成員に関する因子と解釈し、「家族環境」因子とした。

各因子の「評定値の平均値」をみると、「親の成長 ($M 3.35, SD .60$)」が最も高く、「子育てストレス ($M 3.33, SD .51$)」、「親責任 ($M 3.16, SD .51$)」、「家族環境 ($M 2.20, SD .61$)」と続いた。

以上の結果からは、まず、シングルファザーが子育てを通して多くを学び人間的に成長していること、親としての責任を果たす過程で子どもとの精神的なつながりが深まることへの評価が示された。これらはシングルファザーについて報告されている内容に沿っており、親として子育てをしていることへの肯定的理解に通じるものであった。

次に、子育ては母親がするものであり父親のみでは難しいという考えは特に示されず、子育ては母親の役割とする性役割観にはとらわれていなかった。そして、シングルファザー自身は母親不在に負い目を感じやすく、実際にシングルファザーに対する社会的偏見も根強いと指摘されているが、子育て中の親からはその様な認識は示されなかった。内閣府の世論調査によると、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」との考えに反対する人が2007年に初めて過半数を超え（内閣府, 2007）、2009年の最新調査では反対の割合がさらに進んでいる（内閣府, 2009）。これらの結果からは、性別役割に対する人々の認識が柔軟に変化していることが窺え、そのことが父子家族という形態そのものを問題としない見方につながったと考えることができる。その一方で、回答における「社会的好ましさ」が反映された可能性を考慮する必要もあろう。しかし、シングルファザーに対する偏見への抵抗が示されたにせよ、その背景には偏見をもつべきではないという意識が存在すると考えられ、この様な建前意識をもつこと自体がシングルファザーへの理解に向けて重要な意味をもつと思われる。よって、本研究ではこの結果を子育て中の親の認識としてそのまま採用する。

最後に、シングルファザーの抱える問題を、仕事と家事・子育ての両立の困難やそれともなうストレスの高さと捉えていることが示された。これは先述した、自由が少なく疲れているというイメージや、シングルマザーに比べて公的支援が少なく生活や子育てにおける困難は大きいと感じていることにも関係しており、子育て中の親は、男性が仕事をしながら子育てをするという生活上の困難をシングルファザーの抱える問題と捉えていることが示された。

3.1.4 シングルファザーの子どもについての認識

シングルファザーの子どもに関する14の質問項目について4段階評定で得られた回答を用いて因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行い、因子負荷量.40以上を基準に14項目全てが採用され3因子が抽出された（Table 3）。第1因子では、「子どもは精神的に不安定である」「子どもは学校で問題を起こしやすい」などの7項目で負荷量が高く、親との関わりや愛着によりもたらされる精神的安定に関する因子と考え、「心の健康」因子とした。第2因子で

は、「子どもは自立心が育つ」「子どもは社会性が身につく」などの4項目で負荷量が高く、子どもの自主性や社会性に関する因子と考え、「社会的自立」因子とした。第3因子では、「子どもは父親に協力的である」などの3項目で負荷量が高く、父親への理解に関する因子と考え、「親理解」因子とした。

各因子の「評定値の平均値」をみると、「親理解 ($M\ 3.14, SD\ .54$)」が最も高く、「社会的自立 ($M\ 3.05, SD\ .59$)」、「心の健康 ($M\ 2.63, SD\ .55$)」と続いた。そこには、シングルファザーの子どもは父親との生活を通して社会的適応が促進されることへの評価が示されており、シングルファザーの子どもの成長について報告されている内容に沿うものであった。また、子育て中の親からは、シングルファザーが不安に感じている父親ひとりの子育てが子どもの情緒面に与える否定的影響は特に示されず、ここでも父子家族という形態が問題であるとは認識されなかった。

Table 3 シングルファザーの子どもについての因子分析結果

	F1	F2	F3	共通性
第1因子 (心の健康)				
子どもは、精神的に不安定である	.80	.04	-.05	.64
子どもは、学校で問題を起こしやすい	.75	-.10	.11	.58
子どもは、非行化しやすい	.72	-.02	-.02	.53
子どもは、親から十分な世話を受けられない	.66	.05	-.05	.43
子どもは、淋しいだろう	.60	-.04	.08	.36
子どもは、母親がいなくてかわいそうだ	.58	.05	-.03	.33
子どもには、母親が必要である	.51	.03	-.02	.25
第2因子 (社会的自立)				
子どもは、自立心が育つ	.04	.84	-.09	.61
子どもは、社会性が身につく	-.10	.81	.03	.73
子どもは、周囲への思いやりが育つ	-.02	.81	.04	.70
子どもは、家事能力が身につく	.15	.46	.29	.43
第3因子 (親理解)				
子どもは、父親に協力的である	-.04	-.04	.84	.67
子どもは、父親のことを理解している	-.06	.04	.77	.65
子どもは、父親の背中を見て育つ	.10	.02	.47	.23
因子寄与	3.82	2.60	.73	
累積寄与率 (%)	27.32	45.88	51.07	
信頼性係数 (α)	.84	.85	.72	
因子間相関	F1	1.00		
	F2	-.24	1.00	
	F3	-.15	.59	1.00

3.1.5 シングルファザーと子どもへのサポートについての認識

シングルファザーと子どもへのサポートに関する14の質問項目について4段階評定で得られた回答を用いて因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行い、因子負荷量.40以上を基準

に2項目を除いた。その後、採用した12項目について再分析を行い4因子が抽出された(Table 4)。第1因子では、「子どもが困っている時には助けたい」などの3項目で負荷量が高く、子どもへの協力に関する因子であり、「子ども支援」因子とした。第2因子では、「シングルファザーが必要とするサポートが具体的に分かれれば協力したい」などの3項目で負荷量が高く、父親への協力に関する因子であり、「親支援」因子とした。第3因子では、「シングルファザーがどのようなサポートを必要としているかは分かりにくい」などの4項目で負荷量が高く、必要なサポートが不明でどの様に関わったら良いかが分からないという内容の因子と考え、「とまどい」因子とした。第4因子では、「子どもに対して特別な配慮はしない」などの2項目で負荷量が高く、特別な気遣いをせず普通に接するといったノーマライゼーションに関する因子と解釈し、「特別な配慮なし」因子とした。

そして、各因子の「評定値の平均値」は「子ども支援 (M 3.40, SD .51)」が最も高く、次に「親支援 (M 2.93, SD .58)」、「とまどい (M 2.75, SD .63)」、「特別な配慮なし (M 2.50, SD .78)」と続いた。そこには、シングルファザーと特にその子どもに協力的で、シングルファザー家族

Table 4 シングルファザーと子どもへのサポートについての因子分析結果

	F1	F2	F3	F4	共通性
第1因子 (子ども支援)					
子どもが困っているときには助けたい	.98	-.07	.06	.02	.88
子どもが必要とするサポートが具体的に分かれれば助けたい	.81	.11	.06	-.05	.75
子どもにはあまり関わりたくない *	-.50	-.07	.23	.03	.38
第2因子 (親支援)					
シングルファザーが必要とするサポートが具体的に分かれれば協力したい	-.04	.93	.03	.03	.82
シングルファザーから要望があれば協力したい	.10	.74	.05	-.03	.61
シングルファザーの相談にのりたい	.00	.59	-.08	-.02	.38
第3因子 (とまどい)					
シングルファザーがどのようなサポートを必要としているかは分かりにくい	.17	-.06	.68	.03	.49
子どもがどのようなサポートを必要としているかは分かりにくい	.01	.08	.67	.12	.46
子どもにどう関わったら良いか分からない	-.17	-.01	.65	-.13	.49
シングルファザーとどう関わったら良いか分からない	-.04	-.01	.64	-.15	.44
第4因子 (特別な配慮なし)					
子どもに対して特別な配慮はしない	-.12	.08	.01	.76	.59
シングルファザーだからといって特別な配慮はしない	.07	-.10	-.01	.67	.47
因子寄与	2.86	1.06	1.75	1.09	
累積寄与率 (%)	23.87	32.71	47.30	56.41	
信頼性係数 (α)	.80	.80	.75	.66	
因子間相関	F1	1.00			
	F2	.47	1.00		
	F3	-.14	-.13	1.00	
	F4	-.06	-.09	.01	1.00

注. *は逆転項目である。

への理解が示されていた。一方、実際に彼らがどのようなサポートを必要としているかが分からないという傾向も示され、シングルファザーの子育ての実情について知る機会の少なさが窺われた。

3.2 シングルファザーに対する認識における回答者の属性による違い

以上で明らかにされたシングルファザーの子育てに対する認識において、「養育している子どもの年齢」「父親と母親」「シングルファザーと接する機会の有無」による違いがみられるのかを検討するために、尺度得点平均値の差の検定を行った。「シングルファザーに対するイメージ」については以上の属性による差がみられなかったので、「シングルファザーの生活や子育て」「シングルファザーの子ども」「シングルファザーと子どもへのサポート」の3領域の11因子で比較した結果を述べる。そこから、本研究で明らかにする第3の設問である「シングルファザーに対する認識に個人のもつジェンダー意識や生活や子育てを通しての経験がどの様に関係しているのか」について考察する。

3.2.1 養育している子どもの年齢による認識の違い

長子年齢を未就学（134人）・小学生（155人）・中学生以上（118人）の3群に分け、3領域の計11因子ごとに一要因の分散分析を行った。その結果、「シングルファザーの生活や子育て」の「親責任」「親の成長」と「シングルファザーの子ども」の「社会的自立」において有意な主効果がみられ、いずれも長子が未就学の親の認識が高かった（Table 5）。従って、長子に未就学の子どもをもつ親の方が就学以上の子どもをもつ親よりも、シングルファザーの責任感や親としての成長、および子どもの社会的自立に対して、より肯定的に認識していることが示された。実際に、乳幼児の子育てにおいては子どもの身の回りの世話を中心に親役割は比較的明確であるが、子どもの年齢が高くなるにつれて子どもにとっての親の機能や意味、親子の関係は質的に変化する（柏木, 2003）。従って、就学以上の子どもをもつ親は子どもの年齢が高くなることで子育ての難しさを実感することにより、未就学の子どもをもつ親との認識に違いがみられたと考えられる。この様に、子育て中の親は自身の子育ての時期と回答に際して

Table 5 養育している子どもの年齢により認識の違いが認められた因子の分散分析結果

因子		①未就学 (n=134)	②小学生 (n=155)	③中学生以上 (n=118)	F 値	多重比較 (Tukey)
		平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)		
生活・子育て	2. 親の責任	3.26 (.51)	3.11 (.48)	3.13 (.63)	3.69*	①>②*
	3. 親の成長	3.48 (.54)	3.29 (.61)	3.27 (.64)	5.38**	①>②③*
子ども	2. 社会的自立	3.16 (.56)	3.03 (.64)	2.96 (.55)	3.84*	①>③*

注. * $p<.05$, ** $p<.01$

想定するシングルファザーの子育ての時期を重ねており、個人のもつ子育て経験に基づいた認識が示された可能性がある。

3.2.2 父親と母親による認識の違い

父親（166人）と母親（241人）による認識の違いをみるために3領域の計11因子ごとにt検定を行い、いくつかの因子で有意差が認められた（Table 6）。まず、「シングルファザーの生活や子育て」では、「子育てストレス」「親責任」「家族環境」において父親は母親より高く、「親の成長」では母親が父親より高かった。次に、「シングルファザーの子ども」では、「心の健康」において父親は母親より高く、「社会的自立」「親理解」では母親が父親より高かった。また、「シングルファザーと子どもへのサポート」については、「子ども支援」「親支援」において母親の認識が父親より高かった。そこには、父親は母親よりシングルファザーの大変さを認識し、生活や子育てへの責任感を評価する一方で、母親不在の家族環境や子どもの精神面に与える否定的な影響を懸念するなど、シングルファザーの子育ての難しさを感じていることが示された。一方、母親は父親より、シングルファザーが子育てを通して人間的に成長するとともに子どもの社会性や親への理解も促進されることを評価し、シングルファザーと子どもへのサポートについても協力的な姿勢であった。

厚生労働省（2003）は、父親も家事や育児を仕事と同等かそれ以上に優先させたいと希望しているが現実には仕事を優先せざるを得ない状況にあり、子育てに十分な時間をかけられないことを問題点としてあげる者が多いと指摘している。そのことから、父親は、現存する性別役割分業社会においてシングルファザーが仕事と家事・子育てを両立させることの困難を、母親よりも強く認識せざるを得ない状況にあると解釈できる。

Table 6 父親と母親による認識の違いに関するt検定結果

	因子	父親 (n=166) 平均値 (SD)	母親 (n=241) 平均値 (SD)	t 値
生活・子育て	1. 子育てストレス	3.40 (.50)	> 3.26 (.52)	2.46*
	2. 親責任	3.24 (.51)	> 3.11 (.51)	2.40*
	3. 親の成長	3.23 (.54)	< 3.43 (.58)	3.30**
	4. 家族環境	2.38 (.61)	> 2.08 (.58)	4.95***
子ども	1. 心の健康	2.73 (.26)	> 2.55 (.53)	3.26**
	2. 社会的自立	2.97 (.60)	< 3.11 (.58)	2.39*
	3. 親理解	2.99 (.55)	< 3.24 (.50)	4.76***
サポート	1. 子ども支援	3.27 (.54)	< 3.50 (.47)	4.46***
	2. 親支援	2.83 (.63)	< 2.97 (.53)	2.80**
	3. とまどい	2.78 (.67)	2.73 (.60)	.73
	4. 特別な配慮なし	2.58 (.80)	2.46 (.77)	1.50

注. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

一方、母親はシングルファザーと同様に子育てに関与している立場において、彼らに共感的な理解を示し親子の成長を評価していた。そこには、母親は父親より、子育てを通しての視野の広がりや親の成長など、子育ての意義を感じている（厚生労働省, 2003）という傾向が、シングルファザーの子育てに対しても示されたと思われる。

次に、母親の就労の有無により認識に違いがみられるのかを検討するために、就労（フルタイムおよびパートタイムその他）と非就労（専業主婦）で認識を比較した（ t 検定）。その結果、父親（妻就労 68 人、妻非就労 98 人）においては、「シングルファザーと子どもへのサポート」の「親支援（妻就労 M 2.96, SD .57、妻非就労 M 2.73, SD .66）」（ $t(155) = 2.37, p < .05$ ）で、妻就労の父親が有意に高かった。従って、妻が就労している父親の方が専業主婦の妻をもつ父親よりシングルファザーへのサポートに対する関心が高く、妻の就労にともない仕事と家事・子育ての両立の大変さを知ること、サポートの必要性を感じていたと考えられる。一方、母親（就労 124 人、非就労 116 人）においては、自身の就労の有無によるシングルファザーへの認識の違いはみられなかった。従って、先述した父親と母親の認識の違いは大方において共働きの有無に関わらず示される特徴と考えられた。

3.2.3 シングルファザーと接する機会の有無による認識の違い

これまでシングルファザーと接する機会が「ある」145 人と「ない」261 人による認識の違いをみるために、3 領域の計 11 因子ごとに t 検定を行った。その結果、「シングルファザーと子どもへのサポート」において有意差がみられ、「子ども支援（「ある」 M 3.49, SD .47、「ない」 M 3.35, SD .53）」では「ある」は「ない」より高く（ $t(397) = 2.70, p < .01$ ）、「とまどい（「ある」 M 2.64, SD .65、「ない」 M 2.82, SD .61）」では「ない」は「ある」より高かった（ $t(394) = 2.74, p < .01$ ）。そこには、シングルファザーと接する機会のある人はない人よりも子どもへのサポートに対する関心が高く、機会のない人はある人に比べて何が必要とされていてどの様に関わったらよいのかが分からないと感じていることが示された。従って、子育て中の親はシングルファザーと接する経験をもつことで実情を知りサポート意識を高めると考えられた。

4 総合考察

本研究において、子育て中の親からはシングルファザーの子育てに対する理解とサポートへの関心が示された。この様に、シングルファザーを特別視せず、彼らの抱える困難とそれに対する努力を理解すること自体がシングルファザーへのサポートとなり、地域で助け合うなどの日常的な直接のサポートにつながると考えられる。但し、本研究の対象者は東京近郊在住であり、首都圏という地域的特徴が示された可能性も考慮する必要があるだろう。例えば、首都圏では地方に比べて核家族が多く、幼児をもつ母親の就労率が低い（Benesse 教育研究開発セン

ター, 2008) ことから、首都圏の親ほど仕事をしながら子育てをすることの大変さを感じていると推測される。その様な子育てを取り巻く状況がシングルファザーへの認識にも反映された可能性があり、子育て環境の地域差を考慮した検討が今後の研究課題と思われる。

その一方で、シングルファザーと接する機会の少なさから彼らが必要としているサポートが分かりにくいことが指摘された。従って、シングルファザーの生活や子育てに関する情報やサポートニーズを具体的に提示することが、サポートの実践に向けて必要であると考えられた。また、シングルファザー自身が父親ひとりの子育てに社会的な負い目を感じているという観点からは、本研究で示された子育て中の親の認識をシングルファザーにフィードバックすることも重要と思われる。なぜなら、子育て中の親は父親ひとりの子育てが子どもの成長発達に否定的な影響を及ぼすという見方はしておらず、また、シングルファザー家族に対しても協力したいという姿勢にあると知ることにより、シングルファザーは勇気付けられ、子育てへの不安も軽減されると予測されるからである。さらに、人々が協力的であると知ることは、シングルファザーが自らの実情を伝え周囲の協力を求めるなど、シングルファザー側からの働きかけを促すことにもつながると考えられる。

Greif (1990) は、シングルファザーが多く困難に立ち向かっていることを社会の人々は認識すべきであり、また、シングルファザーも完璧になろうとせずに周囲の理解や協力を求めることにより生活のバランスを保つことが重要であると指摘している。この様に、シングルファザーと身近な人々との双方向の関係をもつことが、シングルファザーへの地域における日常的なサポートにとって重要であり、本研究では子育て中の親との連携に向けた具体的な課題が示されたと考えられる。

References

- Benesse 教育研究開発センター. (2008). 第 3 回子育て生活基本調査報告書 幼児版.
- Demo, D. H., & Acock, A. C. (1996). Family structure, family process, and adolescent well-being. *Journal of Research on Adolescence*, 6, 457-488.
- 土堤内昭雄. (2004). 父親が子育てに出会う時:「育児」と「育自」の楽しみ再発見. 筒井書房.
- Greif, G. L. (1990). *The daddy track and the single father*. Massachusetts: Lexington Books.
- 平沼晶子. (2007). シングルファザーの育児と周囲の受けとめ. 『日本教育心理学会第 49 回総会発表論文集』, 547.
- 平沼晶子. (2008). シングルファザーは子育てを通してどう生きるか. 『日本発達心理学会第 19 回大会発表論文集』, 585.
- 平沼晶子・秦野悦子. (2004). シングル・ファザーの心理社会的適応. 『日本発達心理学会第 15 回大会発表論文集』, 97.
- 池田英雄. (1996). 『父子家庭のお父さん奮戦記: 母親不在の子育てに挑戦』. 新風舎.
- 井上正明・小林利宣. (1985). 日本における SD 法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観. 『教育心理学研究』, 33, 253-260.
- 柏木恵子. (1993). 『父親の発達心理学: 父親の現在とその周辺』. 川島書店.
- 柏木恵子. (2003). 『家族心理学: 社会変動・発達・ジェンダーの視点』. 東京大学出版会.
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局. (2003). 子育て支援策等に関する調査研究報告書.
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局. (2005). 平成 15 年度 全国母子世帯等調査結果報告.
- 内閣府大臣官房政府広報室. (2004). 男女共同参画社会に関する世論調査.
- 内閣府大臣官房政府広報室. (2007). 男女共同参画社会に関する世論調査.
- 内閣府大臣官房政府広報室. (2009). 男女共同参画社会に関する世論調査.
- 小田切紀子. (2003). 離婚に対する否定的意識の形成過程: 大学生を対象として. 『発達心理学研究』, 14, 245-256.
- 大日向雅美. (2003). 一人親家庭の子育て: 今必要とされる単親家庭へのサポート. 『灯台』, 519, 19-21.
- 大日向雅美. (2005). 父子家庭にのしかかる社会的プレッシャー、そして、“母性神話”. 『NHK すくすく子育て』, 29, 57.
- 東京女性財団. (1993). ひとり親家族に関する研究: 東京都女性問題調査研究報告.
- Weinraub, M., & Gringlas, M. B. (1995). Single parenthood. In M. H. Bornstein (Ed.). *Handbook of parenting*. Vol. 3. *Status and social conditions of parenting* (pp. 65-87). New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.

Author Note

謝辞

本論文をまとめるにあたり、白百合女子大学の秦野悦子教授に貴重なご助言ならびにご指導を頂きました。深く感謝いたします。また、調査にご協力頂きました皆様に心より御礼申し上げます。尚、本研究の一部は 2005 年度財団法人小平記念日立教育振興財団家庭教育研究奨励金の補助を受けて行われました。

Footnotes

- ¹ 本研究では、東京女性財団（1993）を参考に、生活実態としての「家族」の力動やシステムに着目するという観点に立ち、「ひとり親家庭」「母子家庭」「父子家庭」ではなく、「ひとり親家族」「母子家族」「父子家族」という言葉を使用した。
- ² シングルファザーは和製語であり、シングル（single）とファザー（father）の合成語である。筆者は、「シングルファザー」を固有の意味をもつ一語としてこの表記を用いることとした。
- ³ 厚生労働省（2005）による 2003 年度調査報告によると、母子世帯（父のいない満 20 歳未満で未婚の子どもがその母によって養育されている世帯）が全世帯に占める割合は 2.7%（約 37 世帯に 1 世帯）、父子世帯（母のいない満 20 歳未満で未婚の子どもがその父によって養育されている世帯）は 0.4%（約 250 世帯に 1 世帯）となっており、母子世帯：父子世帯＝約 7：1 と推計されている。
- ⁴ 同上。

Cognitions of Child Rearing Parents about Single Fathers

Akiko HIRANUMA

Cognitions of child rearing parents about single fathers were investigated. A questionnaire was administered to parent participants of dual parent families with infants to junior high school age children (n=407). The responses were factor analyzed and characteristics of participants' cognition were examined. The results indicated the following. (1) Single fathers were highly evaluated as having responsibility for life and childcare, and for developing as a parent. (2) Social orientation of the children was promoted through living with their fathers. (3) Participants had a positive attitude towards single father families, did not value the family environment with gender-based roles and had no negative impressions about families with only the father. Participants understood the problems of single fathers, such as simultaneously having to work, do housework and child care. Those surveyed showed positive understanding, support and interest in single fathers. Survey results prove the possibility of creating local, day-to-day support networks for single fathers and partnerships between single fathers and their neighbors. It is important to offer information about the social needs of single fathers and promote a positive approach towards them. It is expected that such information would promote the cooperation between single fathers and people around them.

Keywords:

single father, family with one parent, child rearing, gender-based roles, support

Trade Policy Mechanisms: Gender Mainstreaming vs. Diversity Mainstreaming

Sarah HOUGHTON

Trade policy changes are often coupled with shifts across economic sectors, creating both economic opportunities and challenges. Those groups traditionally marginalized by a particular society are often less capable of rapid adjustment to new economic environments and therefore receive less of the material gains resulting from the trade policy change. This dilemma, which often results in the marginalization of women, was largely noticed by women's rights advocates who began campaigns for the integration of policy mechanisms into trade agreements, under the umbrella of gender mainstreaming, to ensure more equitable participation of women in the opportunities developed through trade policy. Other groups traditionally marginalized within a particular society on the basis of culture, race, ethnicity, ability, religion and sexual orientation have not, however, enjoyed the same policy protection, of being *mainstreamed* into trade policy. This research note explores the development of the policy tools of gender mainstreaming and diversity mainstreaming and will explore if potential exists to integrate the two policy mechanisms to influence trade policy impacts.

The concept of gender mainstreaming (GM) has become widespread in recent years as a rights issue but gained particular traction as the economic benefits of the full economic participation of both genders has become increasingly apparent (Sinah et al., 2007). Microfinance and entrepreneurial programs aimed at women have demonstrated an economic incentive to mainstream gender into economic policy. Gender mainstreaming, women's economic rights, and the explicit inclusion of gender in trade agreements are not new concepts. They emerged with second-wave ideologies of the feminist movement, which were frustrated by the perceived shortcomings of Women in Development (WID) projects in the 1970s and 1980s. The lack of success of such projects was thought to result from the marginalization of a gender perspective from such projects; therefore, gender mainstreaming was promoted as a policy mechanism to bring issues of both genders into the center of policy making. GM was first widely endorsed by the Beijing Platform for Action in 1995 (United Nations, 2006) and further developed by the United Nations Economic and Social Council (ECOSOC)'s conclusions in 1997/2 (United Nations, 2007).

Many definitions for gender mainstreaming exist, however, the most widely accepted definition is the ECOSOC definition: "the process of assessing the implications for women and

men of any planned action, including legislation, policies or programmes, in all areas and at all levels. It is a strategy for making women's as well as men's concerns and experiences an integral dimension of the design, implementation, monitoring and evaluation of policies and programmes in all political, economic, and societal spheres so that women and men benefit equally and inequality is not perpetuated. The ultimate goal is to achieve gender equality" (1997).

The United Nations Conference on Trade and Development (UNCTAD) further defines GM in trade policy, as "assessing which impacts trade policies could have on men and women and making them responsive to gender considerations" (2009). Key components to GM in trade policy promoted by the UNCTAD include: 1) *ex ante* assessment of the impacts of trade agreements; 2) the negotiation of the trade agreements; and 3) cooperation and capacity-building after the entering into force of the trade agreements" (2009). These policies have been adopted both as domestic policies and integrated into international trade agreements. An example of an international trade agreement that incorporated a gender perspective is the Cotonou Partnership Agreement in 2000. This trade and development agreement between the European Union and the African, Caribbean and Pacific (ACP) group of nations highlights several gender provisions. For example, Article 1 notes, "Systematic account shall be taken of the situation of women and gender issues in all areas? political, economic and social," and article 31 observes gender as "thematic and cross-cutting" (Gibb, 2008). Such clauses demonstrate strong state commitments to gender mainstreaming in trade policy.

Significant criticisms of GM have emerged since its widespread acceptance in the mid-1990s. One of the main criticisms is by those who feel that the adoption of the term gender has again marginalized women. This split between those who advocate for gender and those who advocate for women has been institutionalized in such a way that many organizations, such as the United Nations Development Programme (UNDP) work from a *two-pronged mandate* of both programs and policies addressing *gender mainstreaming* and *women's empowerment*. Hannan (2008) argues the failings are more bureaucratic than systemic or theoretical. Stating, "while there are now many good policies and strategies (GM) in place, there remains a huge gap between policy and practice which must be addressed through development of concrete action plans, with clear time frames and adequate resource allocations" (2008).

The other widespread criticism, however, provides the foundations for arguments to promote diversity mainstreaming and actually incorporates the first criticism. The theory behind this

policy tool has significant contributions from thinkers who identify with the Black Feminist movement in the United States including: Alice Walker, Angela Davis and bell hooks. They argue that sexism, racism and classism cannot be separated. The term *Womanism*, from Alice Walker's book, came to describe the experiences of *women of color*, particularly in the US, and how the elements of sex, race and class are inherently intertwined. The thrust of this criticism is that all identities of women must be considered and engaged within political, economic, and social struggles.

Gayatri Chakravorty Spivak developed the term "strategic essentialism" to describe a process engaged in by many feminist groups, to temporarily ignore differences for a common cause. However, many of the feminist groups which first united on the policy tool of mainstreaming in 1995 are now beginning to see their differences grow. Furthermore, some feminist groups are beginning to find greater strength through alignment with empowerment movements across geographic, occupational, ethnic, religious or racial lines.

Diversity mainstreaming has not been integrated into domestic and international policy to as broad an extent as gender mainstreaming and few efforts have been made to mainstream diversity into trade policy. There is growing criticism of GM, based on a diversity framework which encompasses the notion of a combined relationship between gender and other various identities. Increasingly scholars and activists alike are arguing that other social factors such as class, race, religion, ethnicity, ability, sexual orientation, age and geographic location play essential roles in the construction of gender. Furthermore, multiple identities cannot easily be separated and it is even argued that it is disempowering to do so. From an economic perspective marginalization as a result of a trade policy change has much to do with high rates of participation in particular sectors of the economy, resulting from barriers to full participation in other economic sectors. Barriers to participation in all economic sectors, however do not necessarily result from gender biases, they also frequently result from such factors as geographic location, race, class, religion, age and physical ability.

Hand-in-hand with such criticisms are those, which call for greater participation (Cornwall, 2005) and the need for gender mainstreaming initiatives to adapt to the local context (Daly, 2005; Williams, 2003). Oxfam (2005) has begun to argue for more participatory approaches to GM which incorporate a more holistic identity stating, "transformation starts from a gender analysis of inequalities between women and men, which understands gender relations as intersecting with relations of race and class, to create context-specific locations of inequality"

(Oxfam, 2005). Hankivsky (2005) further argues that “contemporary feminist developments in understanding gender and the interface between gender, race, class, nationality, ethnicity, sexuality and power are not adequately reflected in the concept of GM or in the strategies and tools that have been developed to engender public policy.” (2005) Despite the growing critique of GM and arguments to incorporate diversity, or change the GM paradigm to one of diversity mainstreaming, mechanisms to mainstream diversity into trade policy have yet to be widely researched.

In conclusion, the policy tools for mainstreaming gender exist and are currently being implemented; however, they may become more effective if they are adapted to incorporate a multi-faceted identity of both men and women. Participatory methodologies may be an avenue through which groups may design and implement their own policies to best ensure their full economic participation within a constantly changing economic climate. However, further research should be conducted to identify opportunities for modification of GM policy tools to foster more equitable economic participation of all despite continual trade policy changes.

References

- Bacchi, C., & Eveline, J. (2010). *Mainstreaming politics: Gendering practices and mainstreaming theories*, South Australia: University of Adelaide Press.
- Collins, P.H. (1991). *Black feminist thought: Knowledge, consciousness and the politics of empowerment*. New York: Routledge.
- Cornwall, A. (2001). *Making a difference? Gender and participatory development*, IDS Discussion Paper, 378, Brighton: Institute of Development Studies
- Crenshaw, K. (1991). Mapping the margins: Intersectionality, identity politics, and violence, *Stanford Law Review*, 43, 1241-1299.
- Daly, M. (2005). Gender mainstreaming in theory and practice, social politics: International studies in gender, *State and Society*, 12 (3), 433-450.
- Database of instruments for gender mainstreaming. Retrieved August 2010, from <http://db.amazone.be/digma/en>
- Davis, A. (1981). *Women, race and class*. New York: Random House.
- Frey, R. (2008). *Institutionalising gender mainstreaming: Tools in Berlin and Germany*. Gender Studies and Policy Review. Korean Women's Development Institute. Seoul, Korea, 1, 146-54.
- Gibb, H. (2008, May). *Gender and regional trade agreements*, Paper produced for the 13th Meeting of the APEC Women Leaders Network. Ottawa, Canada: The North-South Institute.
- Hankivsky, O. (2005). Gender vs. diversity mainstreaming: A preliminary examination of the role and transformative potential of feminist theory, *Canadian Journal of Political Science*, 38 (4), 977-1001.
- Hannan, C. (2008). *United Nations gender mainstreaming strategy: Achievements and challenges*, GSPR, 36-45.
- hooks, B. (1984). *Feminist theory: From margin to center*. Cambridge, MA: South End Press.
- International Labour Organization. (2007). *Manual for gender audit facilitators: The ILO participatory gender audit methodology*. Geneva: ILO, Bureau for Gender Equality.
- Mainstreaming gender in development: A critical review*. (2005) . Oxfam: Oxford.
- Mehra, R., & Rao Gupta, G. (2006). *Gender mainstreaming: Making it happen*. International Center for Research on Women (ICRW), 30th Anniversary. The Cotonou Agreement, from <http://www.acpsec.org/en/conventions/cotonou/accord1.htm>

- Sinha N., Raju D., & Morrison, A. R. (2007). *Gender equality, poverty and economic growth*. World Bank Policy Research Working Paper, 4349.
- Squires, J. (2005). Is mainstreaming transformative? Theorising mainstreaming in the context of diversity and deliberation, *Social Politics: International Studies in Gender, State and Society*, 12 (3), 366-388.
- The United Nations Conference on Trade and Development (UNCTAD) (2008). *Moving towards gender sensitization of trade policy*. UNCTAD/DITC/TNCD/2008/2.
- UNCTAD. (2009). *Mainstreaming gender in trade policy*. UNCTAD/TD/B/C.I/EM.2/2/Rev.1
- United Nations. (1997, September). Report of the Economic and Social Council for 1997, A/52/3.
- Verloo, M. (2005). Displacement and empowerment: Reflections on the concept and practice of the Council of Europe approach to gender mainstreaming and gender equity, *Social Politics: International Studies in Gender, State and Society*, 12 (3), 344-365.
- Williams, M. (2003). *Gender mainstreaming in the multilateral trading system: A handbook for policy makers and other stakeholders*. Commonwealth Secretariat.

通商政策機関—ジェンダーの主流化 VS 多様性の主流化

サラ・ホートン

本研究はジェンダーの主流化（メインストリーミング）と多様性の主流化の間の論争について考察する。この議論は、主導権を率先することを通じた通商政策転換による公平な利益を促進する試みに関連付けられる。ジェンダーの主流化と多様性の主流化をそれぞれ通商政策に統合する可能性は、特に、参加型の方法論を用いることで明らかになる。本研究ノートは将来の研究と通商政策ツール開発への基礎となることを目指す。

Keywords:

ジェンダーの主流化、多様性の主流化、通商政策

絵本に描かれた同性カップルと子どもたちにみる「家族」像

——Patricia Polacco 作品 *In Our Mothers' House* を例に——

堀内かおる

1 問題の所在と本研究の目的

絵本とは、「おとなが子どものために明確な目的を持って創り上げた『文化財』」である（佐々木, 1993）。絵本との出会いによって子どもは、新しい〈知〉の世界の入口に立つことになり、言葉に触れ、描かれたものに感情移入をしながら、心を豊かに耕していく。幼少期の絵本との出会いが、子どもの発達にとって重要な意味を持つことは、言うまでもない。

また、絵本とは「絵と文からなる総合芸術」（井上, 1986）と見なされ、絵と文が互いに補完し合い、相乗効果をもたらして一つの作品に結実している。

子どもは受動的に絵本を享受する読者ではない。子どもには「絵そのものを読む力がある」と、谷本（2002）は指摘する。子どもにとって、絵本に描かれている世界は「自分の生活と地続き」であり、「自分に引き付けた極めて主体的な『読み方』をする」と谷本は述べている。絵本を手がかりとして、子どもには自分自身を見つめる契機がもたらされると考えられる。

近年、社会的マイノリティの中でも性的指向によってマイノリティに位置づけられてきた同性カップルがつくる「家族」を取り上げた絵本が、海外では出版されてきた。しかし、谷口と徳田（1997）の研究によると、日本の絵本においては、同性愛を取り上げた絵本はもとより、社会的マイノリティが登場する絵本は量・質ともに低調であることが指摘されている。谷口と徳田は、社会的マイノリティに対する「適切な理解・態度」は、「時間と場所を単に共有するだけでは形成されない」と述べ、幼児期からの理解教育の必要性を説いている。社会的マイノリティに対する「適切な理解」とはどのようなものなのかについては、慎重な議論を要すると考えるが、絵本という媒体を通じて、子どもにとって想定される「当たり前」の範疇に当てはまらない人々の存在を知り、自分にとって「想定外」の在り方・生き方について気づくことは、子どもの自己認識・社会認識の発達上で大きな意味をもたらすであろう。社会的マイノリティへの気づきと共生の文化を考える「教材」としても、絵本という媒体の可能性が示唆される。

筆者が調査した限りにおいても、唯一、実話をもとにした翻訳絵本であり同性の2羽のペンギンによる抱卵・育児を主題とした絵本である『タンタンタンゴはパパぶたり』¹が、「同性愛カップルの子育て」と解釈することも可能と考えられる絵本であった。本書のほかには、同性愛を直接テーマとした絵本は、見当たらない。

刈谷（2009）は、社会的マイノリティの暗喩である絵本として、R. M. カンターによる『O

の物語』²を紹介している。この絵本は、「大人向け絵本」のジャンルに分類され³、マジョリティである「X」の集団の中に唯一、「O」が存在しているという設定で、「O」がどのような具体的な特徴を持つ存在なのかということは明らかにされていない。XとOという記号で表現された抽象度の高い絵本であり、子どもの読み物としては、難易度が高いと言わざるを得ない。

ところで有田（2007）は、レズビアンである母親の子育てにかかわって、ヘテロセクシュアルな母親との相違を分析した欧米の先行研究をレビューし、レズビアン・マザーの子どもたちは、自分の母親がレズビアンであるという「スティグマ」をどのように受けとめるのかという点を考察している。たとえば事例として紹介されている、ゲイの父親とそのパートナーに育てられ、自分自身はヘテロセクシュアルな娘は、「ゲイである」ということは性的指向のみの問題ではなく、「アイデンティティであり人生でありそして文化である」と認識したという。有田はこの事例を「Queer 性を主体化する子ども」と表現した。つまり、このような子どもたちにとって、「自ら内面化している文化が Queer」だということになる。

「多様な家族」がつくる「多様な文化」と対峙し、これからの社会を生きる子どもたちが生き方を選択していくために、今日のさまざまな人間関係のありようを提示していく必要性があると考ええる。これは、ジェンダーとセクシュアリティにかかわる極めて現代的な教育の課題であろう。

そこで本研究では、近年アメリカで出版された同テーマの絵本であるパトリシア・ポラッコ作・画 *In Our Mothers' House* を取り上げ、そこにどのような「家族」像が描かれているのか考察することにした。

2 Patricia Polacco, "*In Our Mothers' House*" について

2.1 作者：パトリシア・ポラッコについて⁴

ポラッコはアメリカ合衆国ミシガン州ランシングにて 1944 年に生まれた女性で、現在はミシガン州ユニオンシティ在住の絵本作家である。2010 年 8 月現在で 51 冊の絵本を出版しており、自ら文章・イラストレーションをともに手掛けている。

ポラッコの作品には、自身の生い立ちや生活経験が色濃く反映されている。ポラッコは、3 歳の時に両親が離婚し、学齢期は母親と暮らし、夏に父親と会う生活を送った。どちらの家にも祖父母がいて、祖父母との交流があった。これらの祖父母との関係は、その後の自身の人生と仕事に大きな影響をもたらしたそうで、作品である絵本の中には、子どもと高齢者とのかわりが多く描かれている。

5 歳の時、ポラッコは母と兄とともにカリフォルニア州オークランドに転居し、さまざまな

人種、宗教を信じる近隣の人々にふれ、人々の相違と共通性を多く感じることができた。この経験がこのたび取り上げる *In Our Mothers' House* の基盤となる考え方を形成したと推察される。本書の舞台も、カリフォルニアのコミュニティである。

またポラッコは、学齢期に失読症で長い期間読むことができずにいたが、14歳の時、ある教師との出会いをきっかけに学習障害を克服する。その後、大学に進学し、ファイン・アートを専攻、続いて博士課程に進学し、美術史の分野で Ph. D の学位を取得した。

やがて二人の子どもの母親となったポラッコは、子育てに多大な時間をかけるようになり、絵本作家としては遅いスタートで、41歳になって、絵本を書き始めたとのことである。現在は、絵本作家として毎年新作を発表するとともに、自宅を地域に開放し、物語作りのセミナーやお話し会などのイベントを行っている。

2.2 ポラッコの作風の特徴について

ポラッコの2010年8月までに発行された作品一覧をノート Table 1 に示す。

刊行されている51冊のうち、イラストレーションのみを担当している19番の作品、言葉の本でありストーリー性のない35番や40番の作品を除き、前項のプロフィールの個所でも指摘した通り、ポラッコは、自身の生い立ちや家族、祖先の人々から言い伝えられてきた事柄をテーマに絵本を創作している〈私〉性の非常に高い作家である。佐々木（2000）は、絵本が作家の子ども時代の体験に深く根ざしていることについて言及し、どのようなエピソードを選択し構成するかということは、『現在のわたし』の持つ価値観や態度の反映だと指摘している。ポラッコの作品には、過去の自身の体験から今日に語り伝えるべき、「家族」に関する内容が選択されていると考えられる。

邦訳されているのは5つの作品のみであり、ポラッコは、作品数が多い割には日本で紹介されてこなかった作家のひとりであるといえるだろう。

作品のテーマは「祖父母」「きょうだい（兄と妹）」「家族が直面した出来事」「学習障害を持った子どもと教師」「南北戦争」「動物とのふれあい」「友達」そして祖母の故郷であるロシアの民話を土台にした物語に大別される。しばしば登場する少女の名前にトリシャ（Trisha）という名前があるが、これはパトリシア・ポラッコ自身であり、自伝的要素が強い作品である（作品番号17, 26, 51）。

また、ポラッコの祖先が南北戦争で従軍し、北軍の少年兵として奴隷制度廃止のために戦っていた時に起きた実話である、黒人兵の少年との別離を当時の社会背景のもとで描いた *Pink and Say*（作品番号16、千葉茂樹訳『彼の手は語りつぐ』あすなろ書房）は、2001年に翻訳出版されてから今日までに14刷を重ねている。この物語は、「たとえ奴隷でも、自分の本当

Table 1 Patrica Polacco の著作一覧 (1988~2010)

番号	タイトル	出版年	邦訳の有無	番号	タイトル	出版年
1	Meteor!	1988		27	Mrs. Mack	1998
2	Rechenka's Eggs	1988		28	Wellcome Comfort	1999
3	Boat Ride with Lillian Two Blossom	1989		29	Luba and the Wren	1999
4	Uncle Voca's Tree	1989		30	The Butterfly	2000
5	Thunder Cake	1990	○注 ¹	31	Betty Doll	2001
6	Appelmand's Dreams	1991		32	Mr. Lincoln's Way	2001
7	Chicken Sunday	1992	○注 ²	33	When Lightning Comes in a Jar	2002
8	Picnic at Mudsock Meadow	1992		34	Christmas Tapestry	2002
9	The Keeping Quilt	1993		35	"G" is for Goat	2003
10	The Bee Tree	1993		36	The Graves Family	2003
11	Babushka Baba Yaga	1993		37	Oh Look!	2004
12	Just Plain Fancy	1994		38	John Philip Duck	2004
13	Some Birthday!	1994		39	An Orange for Frankie	2004
14	Mrs.Katz and Tush	1994		40	Mommies Say Shhh	2005
15	Tikvah Means Hope	1994		41	The Graves Family Goes Camping	2005
16	Pink and Say	1994	○注 ³	42	Emma Kate	2005
17	My Rotten Redheaded Older Brother	1994	○注 ⁴	43	Rotten Richie and the Ultimate Dare	2006
18	Babushka's Doll	1994		44	Something About Hensley's	2006
19	Casey at the Bat	1995		45	Ginger and Petunia	2007
20	My Ol' Man	1995		46	The Lemonade Club	2007
21	Babushka's Mother Goose	1995		47	For the Love of Autumn	2008
22	Aunt Chip and the Great Triple Creek Dam Affair	1996		48	Someone for Mr. Sussman	2008
23	I Can Hear The Sun: A Modern Myth	1996		49	In Our Mothers' House	2009
24	The Trees of The Dancing Goats	1996		50	January's Sparrow	2009
25	In Enzo's Splendid Gardens	1997		51	The Junk Yard Wonders	2010
26	Thank You, Mr. Falker	1998	○注 ⁵			

注 1 邦題『かみなりケーキ』、小島希里：訳、あかね書房、1993

注 2 邦題『チキン・サンデー』、福本友美子：訳、アスラン書房、1997

注 3 邦題『彼の手は語りつぐ』、千葉茂樹：訳、あすなろ書房、2001

注 4 邦題『おにいちゃんなんてだいきらい』、in『科学と学習の増刊・読み物特集号、話のびっくり箱 4 年下』もきかずこ：訳、学習研究社、2000

注 5 邦題『ありがとう、フォーカーせんせい』、香咲弥須子：訳、岩崎書店、2001

の主人は自分以外にはいない」という黒人少年の言葉とともに、ポラッコ家に5代にわたって語り継がれてきた。

ポラッコの作品には、アフリカ系アメリカ人の家族や子どもたちが多く登場する。その背景には、南北戦争時にさかのぼる祖先への思いや、カリフォルニア州オークランドに住んでいたころの隣人で、子どもの頃「きょうだいになる誓いの儀式をした」相手である、アフリカ系アメリカ人のスチュワートとウィンストン・ワシントンという兄・弟とその母親との交流が反映していると考えられる。⁵

一風変わった家族の日常をユーモラスに描いた36番の作品は、書評⁶においてポラッコのこれまでの作品の中で最も愉快な作品と評されると同時に、本書に込められたメッセージとして「違いは祝福されるべきものであり、恐れられるものではない」という言葉が与えられている。この言葉の含意こそは、ポラッコの他の作品にも同様に根底に流れているものであり、ポラッコ作品のコンセプトである。

ポラッコの作風を端的に言うならば、基本的に「ヒューマニズムの作家」であるといえるだろう。歴史の中の人間存在やその生き方について実話をもとに具体的な描写をし、社会に対するクリティカルな視点を有しつつ、あくまでも人間を信じ家族の愛や絆に確信を持つ姿勢がその作品の端々から伝わってくる。

また、作家自身の生活を紹介する写真絵本⁷には、「私の家族へ」との言葉とともに、ポラッコ夫妻とポラッコの母、娘と息子およびその配偶者と子どもら総勢9名がそろった写真が掲載されており、「家族」という集合体への自身の強い帰属性がうかがわれる。

2.3 *In Our Mothers' House* の概要とレズビアン・マザーズの描かれ方

本書は、養子として迎えられた長女のみから見た、「家族」の思い出が語られる内容となっている。登場人物は、二人の母親：マミーとミーマのほかに、長女（アフリカ系）、長男（ウィル：アジア系）、次女（ミリー：赤毛のコーカソイド）の3人の子どもたち、イタリア系の祖父母と様々なナショナルリティを背景に持つ地域の住人たちである。

本書には、成人し自らの家庭を築いた長女の視点で、生まれてから現在までの自分と家族のライフコースが描かれている。時系列で「家族」の推移を描いているところに、本書の特徴がある。

本書では、数々のファミリー・ライフイベントが設定され、子どもの誕生から親の老い、そして死までの時間軸に則って「家族」という関係が描写されている。

また、二人の母親：マミーとミーマは、相補的で異なるキャラクターとして描かれている。

ミーマは、背が低くて太っており、イタリア系で料理好き。縫物も好きな家庭的な性格とし

て描かれ、小児科医である。マーミは、背が高く痩せており、計画的で論理的、きれい好きで家の掃除を担当している。救急医療担当の医師で、救急車に乗っている。非常事態でも落ちついて責任を果たすというキャラクターである。おのずと家事労働の分担もなされており、得意なことを担当しあって協力して生活を営んでいる。

二人の母親たちはいずれも医師で、キャリアのある専門職として描かれており、職業上の成功をし、安定した家庭生活を営んでいることが読み取れる。

一家が生活している場所は、カリフォルニア州のパークレーという具体的な設定となっている。ハロウィーンのときに子どもたちは、ミーマの手作りの衣装で扮装し、町内の仮装大賞を受賞するほど好評を博したという思い出が語られる。家の裏庭には、地域の人々に手伝ってもらって作ったログハウスがあり、そこは地域の人々との語らいの場にもなっていた。二人の母親たちは地区の伝統行事であるフェスティバルを取り仕切り、地域の人々の中心となって交流し合っていた。また「母さんたちの家」は親族の集いの場にもなっており、イタリア系の祖父は料理が得意で、訪れて来ては皆にイタリア料理をふるまった。

以上のように、「母さんたちの家」は親しい人々が集う中心地となっており、同性カップルである母親たちは違和感なく周囲に溶け込み、暮らしていた。しかしただ一人だけ、正面から彼女らに批判的な態度をとる近隣の女性が登場するが、この人物は例外的存在として描かれている。

「あなたたちを認めない」と言い放って立ち去って行った彼女について、ミーマは子どもたちに「彼女は私たちのことを理解できないから不安なのだ」と言う。さらに付け加えて、「彼女には、少しも愛情なんてものはないのだ」と言うのである。ここでいう「愛情」とは、隣人愛であり、人に対する思いやりの気持ちであろう。同性カップルである母親たちおよび血縁関係のない子どもたちを受け入れられない住人は、寛容さに欠ける偏狭な人間として描かれている。

ところで、本書には子どもたちの自立と母親たちの老いが描かれている点に着目したい。3人の子どもたちは、やがて家を離れ進学したのち、いずれも異性の配偶者を得て、自分たちの家庭を創っていった。

その後、自分たちの子どもを連れて、母親たちの家を訪れ、母親たちが孫の成長を喜ぶ穏やかな老後の日々が描かれている。年月とともに母親たちも老いていき、やがて相次いで亡くなり、子どもたちの手で思い出の場所に埋葬された。

母親たちの死後、長男が家を受け継ぎ、長男一家がそこに暮らしている。季節の折々にきょうだいたちの家族は「母さんたちの家」に集い、そこで育った日々のことを懐かしく思い出すというストーリーである。

本書におけるレズビアン・マザーたちは、同性愛コミュニティではなく地域コミュニティの中で生きている。その地域コミュニティは、多民族・多文化のるつぼであり、宗教や文化的ルーツを異にする人々が共生しているコミュニティである。同性愛も一つの差異として描かれ、同性愛が本書の突出したテーマにはなっていない。

本書の主題は、「次世代に継承されていく『家族』」であるといえよう。互いへの信頼と愛情を絆としてともにいることの意味を認識し合い、かけがいのない存在として認めあった関係＝「家族」と位置づけられ、その関係性は親が亡くなり相互には血のつながりのない子どもたちだけが残されても、精神的なつながりによって次世代へと継承されていく。これが、「家族」と呼ばれる関係性の実態にほかならないというメッセージを、本書から読み取ることができる。家族の永続性の象徴として描かれているのが、「母さんたちの家」なのである。

以上のような本書のメッセージは、親密な関係性の根底にある理念として、性的指向を問わない普遍的な「家族」の成立条件であるとの解釈を可能にする。しかしこのことは、換言すると、カップルの形態や「家族」のなりたちは異なるが、本質的には相違ない「伝統的家族」像へと収斂して「家族」が語られるということにもなろう。

3 同性カップルという差異と「家族」の普遍性のパラドックス

今日、「多様な家族」の存在が指摘され、それに対する受容性が高まってきているとはいえ、想定されている「家族」は離婚や未婚で子どもを産んだシングルマザー／ファザーによる「一人親家族」や単身者が視野に入っているくらいではないだろうか。これらは、国勢調査等の統計にも数値として表れる「家族」の形である。

日本において、同性カップルとその子どもという「家族」に対する研究は、緒についたばかりである。釜野（2008）は、レズビアン家族とゲイの家族が「従来の家族」の在り方を揺さぶる問題提起となる可能性について論じているが、そこで浮かび上がってきたのは、「一見革新的」な生き方に見えようとも『従来の家族』の規範に加担する可能性がありうる」という問題である。

前節で考察したように、ポラッコの絵本が描いていた「家族」のストーリーは、まさに「従来の家族」の規範の範疇に同化することによって、「家族」であることを知らしめるというパラドックスを内包している。同性カップルであっても子どもたちに囲まれ地域の人々と仲良く交流し、親戚との行き来を重ねて穏やかに年を重ねるというような、「夫婦」の愛情によって結ばれた近代家族像と何ら変わりはない。ただ「夫婦」が同性同士であったというだけである。つまり、久保田（2009）が指摘するように、まさに「家族と呼べる範囲でしか多様性を認めない」という状況に陥り、『家族の多様化』ならぬ〈多様性の家族化〉と呼べる現象が、

ポラッコの著作にも見え隠れしている。

他方、ポラッコの作品における「家族」像が単に近代家族像の中に取り込まれているのかといえば、同性カップル・異性カップルを問わず、「家族」で自己完結せず、地域や社会に開かれた関係性が示唆されている点を見逃すことはできないだろう。同性カップルに限らず、どのような「多様性」であったとしても、周縁に広がる人的ネットワークで地域や社会とつながっていることによって、「従来の家族」の持つ閉鎖性を打破する可能性が見出されるのではないだろうか。

またその一方で、同性カップルとその子どもたちで作る新たな関係を、「家族」と呼ばなければならないのか、それはなぜかという理由を改めて問うことは、「多様な家族」の在り方を追求するうえで、不可避であるように思う。「家族」概念を拡大することが「家族」の定義そのものを読みかえることにはならないだろう。同性カップルを描いた絵本が提起しているのは、法的規範や血縁によらない親密な関係性が「家族」のオルタナティブになりうるのかという、本質的な問いであるといえよう。

4 おわりに

欧米でこれまで出版された同性愛をテーマにした絵本がバッシングの対象となった⁸ことと対照的に、本書が同性愛バッシングの標的になり論争を引き起こしたという話題は聞かれない。むしろ、本書は書評で好意的に取り上げられ、大人の読者からも本書に対するエールが送られている。⁹

さらに、本書の出版元は、出版大手であるペンギン社の児童・青少年向け書籍部門であるPhilomel Booksであることを鑑みても、幼児・児童書の一つのジャンルとして、偏見なく本書が取り上げられていることが明らかである。今日刊行され市場に流通しているポラッコによる*In Our Mothers' House*は、ヘテロセクシュアルな子どもたちやその親たちによっても、読まれていると考えられるのである。

本書に対するバッシングが発生しない理由として、第1にポラッコによる*In Our Mothers' House*が出版されたのは2009年であり、同性愛をめぐる時代背景が推移したこと、第2にポラッコ自身が著名な絵本作家として数々の賞を獲得した輝かしいキャリアを持ち¹⁰、社会的に認められている存在であることも一因となっていると考えられるが、根本的な理由は、他にあるように思われる。それは、本書のコンセプト自体に起因するものである。

つまり、同性カップルという「多様性」が「家族」というステレオタイプなイメージで共通理解できる範疇へと還元されるものであったからこそ、本書の内容に対し、人々が違和感や異議を唱えることがなかったのではないだろうか。このような「同性愛への理解」が果たした的

確なことなのかどうか、検討の余地があると考ええる。

本稿では、絵本という、子どもにとっての文化財であり教育的意義を持つ媒体を取り上げ、そこに込められている「家族」の多様性の意味を読み解こうとした。その結果明らかになったのは、「多様性」という名のもとに収斂し強化される「家族」観にほかならなかった。

しかしその一方で、「家族」という共同体が周縁に向けて開かれていく可能性もまた、ボラッコの作品から示唆された。

こういった今日の絵本の限界と可能性を踏まえたうえで、子どもたちがオルタナティブな生き方や関係性の在り方に気づくためのストーリーを追究する必要がある。同時に、メッセージの受け手である子どもたちにとって、オルタナティブなストーリーはどのように受け止められるのかという、子どもたちの視座に立った検討も不可欠である。今後の課題としたい。

References

- 有田啓子. (2007). 「スティグマ化された家族の多様性の『発見』—英語圏の発達心理分野における Lesbian-family 比較研究の検討」. *Core Ethics*, 3, 13-26
- 井上共子. (1986). 「第 1 章 絵本総論」. In 井上共子 (Ed.), 『保育の絵本研究』. 東京：三晃書房. 9
- 釜野さおり. (2008). 「レズビアン家族とゲイ家族から『従来の家族』を問う可能性を探る」. 『家族社会学研究』 20 (1), 16-27
- 刈谷雅. (2009). 「『O の物語』から考えるセクシュアル・マイノリティ」. In 中川素子 (Ed.), 『女と絵本と男』. 東京：翰林書房. 49-54
- 久保田裕之. (2009). 「『家族の多様化』論再考—家族概念の分節化を通じて」. 『家族社会学研究』 21 (1), 78-90
- Matulka, Denise I. (2008). *A picture book primer: Understanding and using picture books*. CT: Libraries Unlimited. 168
- Polacco, Patricia. (2009). *In our mothers' house*. NY: Philomel Books
- 佐々木宏子. (1993). 『新版絵本と子どものころ——豊かな個性を育てる』. 東京：JULA 出版局. 16
- 佐々木宏子. (2000). 『絵本の心理学——子どもの心を理解するために』. 東京：新曜社. 128
- 谷口愛・徳田克己. (1997). 「社会的マイノリティが登場する『絵本』の分析——マイノリティに関する理解促進のための幼児用理解教育教材の分析方法の検討」. 『日本保育学会大会研究論文集』 516-517
- 谷本誠剛. (2002). 「現代絵本と子ども読者」. In ワトソン, ヴィクター & スタイルズ, モラグ (Eds.), 『子どもはどのように絵本を読むのか』 (谷本誠剛, Trans.). 東京：柏書房. 16-18

Author Note

本研究は、平成 21~24 年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究 (C)）自分の成長と家族関係を省察する小中一貫の家庭科授業開発」（課題番号 21530918、研究代表者：堀内かおる）の成果の一部である。

Footnotes

¹ Author: Peter Parnell and Justin Richardson, Illustrator: Henry Cole, *And Tango Makes Three*, Simon & Schuster Children's Publishing, 2005 (尾辻かな子・前田和男 Trans., 『タンタンタンゴはパパふたり』 (2008). 東京: ポット出版)

本書はアメリカ図書館協会の選ぶ 2006 年度の最もチャレンジブルだった本に選ばれた (Matulka, 2008)。さらに、同協会から 2008 年度の「もっとも頻繁にチャレンジブルであり続けた本」としても選ばれた絵本である。Reviewed 30 August, 2010, from <http://www.ala.org/ala/newspresscenter/news/pressreleases2009/april2009/nlw08bbtopen.cfm>

² R. M. カンター. (1989). 『O の物語』 (三井マリ子, Trans.). 東京: レターボックス社.

³ Retrieved 31 August, 2010, from <http://www.junkudo.co.jp/detail.jsp?ID=0189246268>

⁴ Retrieved 30 August, 2010, from <http://www.patriciapolacco.com/>

⁵ 『チキン・サンデー』 (福本友美子, Trans.) には、ワシントン親子との交流の様子が描かれている。

⁶ Retrieved 4 December, 2010, from http://www.patriciapolacco.com/books/_graves/index.html

⁷ Polacco, Patricia. (1994). *Firetalkings*, New York: Richard C. Owen Publishers, Inc.

⁸ 1980 年代から 1990 年代に出版された同性カップルを描いた主な絵本として、以下のものがある。

Bösche, Susanne, translated from the Danish to English: Mackay, Louis (1983) *Jenny lives with Eric and Martin*. London: The Gay Men's Press; Newman, Leslea. (1990, 2000, 2009). *Heather has two mommies*. NY: Alyson Books; Willhoite, Micheal. (1990). *Daddy's Roommate*. NY: Alyson Wonderland; Willhoite, Micheal. (1996). *Daddy's Wedding*. CA: Alyson Wonderland.

⁹ Retrieved 31 August, 2010, from <http://libraryvoice.org/2009/06/05/book-review-in-our-mothers-house-by-patricia-polacco/>

¹⁰ Retrieved 30 August, 2010, from <http://www.patriciapolacco.com/author/bioandawards/bioawards.html>

**An Image of "Family" in Homosexual Couples in Picture Books:
With Special Reference to Patricia Polacco's *In Our Mothers' House***

Kaoru HORIUCHI

This study examines how picture books provide children with an opportunity to be aware of issues of gender and sexuality by focusing on foreign picture books dealt with a homosexual couple and their children. It explores the possibilities and limits of the works' messages concerning "the diversity of family" through analysis of images of "family" in picture books.

Published in 2009, Patricia Polacco's *In Our Mothers' House* has gained reputation as an important work itself without being subjected to homosexual bashing. Although this reflects current changes in the public's social background and awareness, this research note demonstrates that the couple in this work is depicted in a relationship with stereotypical concepts of the family, following the conventional family norm, even though it deals with homosexual couples. The study also suggests that picture books are a medium that provides children encounters with new knowledge that can enforce the traditional norm of family.

Keywords:

homosexual couples, picture book, alternative, the diversification of family, Patricia Polacco

「性同一性障害」という医療言説に依拠した社会運動の形成過程

田多井俊喜

1 はじめに——本報告の目的

本報告は、近年「性同一性障害」とされるようになった、生まれ育てられた性とは異なる性を生きようとする人々の社会運動に焦点を当てる。この社会運動は男女共同参画の枠組みに、性的少数者である「性同一性障害」を包含しようとする試みである。こうした試みは、「性同一性障害」という医療概念の成立に伴って生じてきた。

「性同一性障害」とは、生まれ育てられた性とは異なる性で生活を営もうとする性のあり方を、一つの疾患として捉え、医療の介入対象とするために概念化した言葉である。こうした性の疾患化は、医療社会学や、ポスト構造主義の流れの中では、厳しい批判にさらされてきた。すなわち、ある性の疾患化は、異性愛的な規範からみれば「逸脱」とされる性のあり方を管理しようとする時に起きるために、異性愛的な規範を保護するに至るというものだ。

性の医療化は、異性愛的な規範から見れば「逸脱」とされた性を管理化することであるという指摘は、同性愛や「性同一性障害」に関する医療化の歴史研究を振り返れば、確かに歴史認識として有効である。性の疾患化は、学問的な研究蓄積から見れば、どのような性のあり方でも許容される、理想的な性の多様性を認める社会を作るためには確かに逆効果である。しかし、医療概念なしには、性的少数者の生活苦を改善するための社会運動がどうしても成り立たないことを報告・考察する。

2 問題の背景

1990年代後半より、「性同一性障害（Gender Identity Disorder）」という疾患名が医学用語として認知され、また一般にも知られつつある。この言葉は、狭義の意味では、生まれ育てられた性から別の性に移行し、生活を送ってゆくために、ホルモン投与と外科手術による医療的介入によって生まれ育てられた性とは別の性に身体を適合させることが必要とされる人々のことを指す。医学界が生まれ育てられた性とは異なる性で生きようとする人々に「性別適合手術」という形で医療介入を行いつつあるのを受け、手術を受けた人の一部の人に対し、戸籍上の性を変える法律が2003年に制定された。

法的・医療的措置と平行して、02年以降より東京都小金井市や埼玉県新座市を初めとして、全国各地の自治体において、「性同一性障害」とされる人に対する生活環境整備を求める活動が行われてきた。これらの活動は、市町村発行の公文書における性別記載欄廃止、および自治体が国に対して提出する「意見書」に「性同一性障害」とされる人への社会環境整備を進める

要望を盛り込むものだった。

国や自治体に対して「性同一性障害」の対応を求める活動が増えたのは、「性同一性障害」とされた人々が、自らの生活の糧を手にする権利（労働権）が剥奪されているという厳しい現実があり、この現実を変えるという動機が生まれたからだった。その一方で、性のあり方に関わりなく就業機会をもたらすための法律は存在しない。生まれ育てられた性とは異なる性を希求する人は、希求する性で働く機会を多くの場合剥奪されている。特に「性同一性障害」の場合、出生時の身体のままで、希求する性で働くことは、現在の日本の労働市場ではまず不可能である。理由はいくつかあるが、まず企業側は声、外見などの「男らしさ」「女らしさ」を求めてくるが、この企業側の求めてくる「男らしさ」「女らしさ」は、出生時に振り分けられた生物学的性と社会的性の一致を不断に被雇用者に求めてくる。その結果、出生時の性とは異なる性を希求している人々は、就職面接の時点で入社を断れてしまうのが現状だ。さらに、どんなに企業側の求めてくる「男らしさ」「女らしさ」に答えているとしても、戸籍・住民票から出生時の性は割り出されてしまうので、就職できない。こうした就業問題に対して、「性同一性障害」の名を冠しているコミュニティでは、就業についての悩み相談、自治体への「性同一性障害」に対する就業機会の保障を訴えるなどの対策を講じている。しかし、コミュニティレベルでの就職相談は悩みを打ち明けるという形に留まり、現実的な解決に結びつく機会が乏しい。かつ、自治体に対して就業の問題を訴えたとしても、自治体は労働市場の問題に関与する権限を持っていない。労働市場に関与する権限を持っているのは、都道府県の労働局を出先機関とする中央政府である。労働市場に関する改革は国の管轄にあり、この国の管轄に関わるところまで活動を進めているコミュニティは少ない。そこで本報告は、労働市場構造の改革という、国レベルの解決を求めて活動し、かつ一定の成果を出している数少ないコミュニティである、X県Y市のA団体のコミュニティ活動に焦点をあてて報告・考察を行いたい。

3 先行研究の検討

これまでの「性同一性障害」に関する研究は、長らく「性同一性障害」と労働市場の関係よりは、性の管理化という側面を取り扱ってきた。まず、これまでの「性同一性障害」についての研究で、古典的位置を占める、J. レイモンド（1979）、D. ビリングスとT. アーバン（1982）、B. ハウスマン（1995）の研究を振り返っておきたい。レイモンドはラディカル・フェミニズムの立場に、ビリングス・アーバンは医療社会学に、ハウスマンはポスト構造主義の立場にある。これらの先行研究では、「性同一性障害」は、20世紀半ば以降における内分泌科の研究の進展により、男性ホルモン・女性ホルモンが発見され、外科手術の技術的發展の結果成立したものであり、現行の異性愛秩序に順応した形に身体を当てはめようとする医療制度が作り出し

た疾患だという把握がされている。そして、これらの論者は、「性同一性障害」とされた人は、既存の異性愛規範に依拠した医療制度と「性別二元秩序」に順応して生きるために、既存の「性別二元制度」を再生産し、強化する存在であるという批判を行っている。また、外科手術を希望しない人は「トランスジェンダー」と呼ばれるが、ハウスマンは、こうした「トランスジェンダー」とされた人々を、「性別二元秩序」を攪乱する存在として位置づける。これらの論者の研究は、H. ルービン（2003）やV. ナムステ（2000）が言うように、「性同一性障害」とされた人々を、「性別二元秩序」を補強する存在として批判する、あるいは攪乱する主体として想定するに留まっている。さらに、「性同一性障害」とされた人の性を医療制度の構築物と見なすのみであり、ナムステ（2000）の指摘にあるように、労働市場において「性同一性障害」とされた人々が排除されている現状をいかに改善するのか、という学術研究が取り組むべき問題意識が欠けている。さらにいえば、「性同一性障害」とされる人々が、どうしても内科・外科を含めた広範な医療制度の介入なしには、自身の性のあり方を担保できないという視点が欠けているといえる。こうした古典とされる研究の視点を批判的に再検討すべく、以下で労働市場から「性同一性障害」とされる人々が排除されつつも、排除を解決すべく活動する様相を報告・考察したい。

4 調査の方法

本報告では、インタビューを引き受けてくれたX県Y市のA団体代表Tさん（年齢は50歳代、自らを「性同一性障害」と位置付けている。生物学的性は男性で、外科手術を受けていないが、「性同一性障害」という診断が下っている。）の証言、および団体のメンバーWさん（生物学的・社会的性は女性、50歳代）へのインタビュー、団体が働きかけを行う行政側からの証言者であるK課長（生物学的・社会的性は男性、50歳代）、S室長（生物学的・社会的性は女性、40歳代）をもとに、検証を進める。データは2007年12月から2009年8月に行ったA団体への参与観察結果をもとにしている。（なお、団体名を明かすと、Tさんの名前が判明してしまうので、団体名は匿名とした。）

5 X県Y市A団体の活動概要

A団体の活動は、主に代表であるTさん（50歳代）が行い、他に数名の地域住民がサポートを行っている。Tさんは2002年に自身が「性同一性障害」とであるという確信を深め、それまでの男性としての生活から女性としての生活を送るようになった。そして、06年よりTさんが在住する市・県議会へのロビー活動、市・県自治体行政への交渉活動を行うようになった。活動では、男女共同参画の枠組みの中で医療制度の介入を行い、「性同一性障害」とされ

た人の持続可能な生活環境の確保を国・地方行政に求めることに主眼が置かれており、活動内容は多岐にわたる。代表的な活動をあげると、健康保険証の性別記載の廃止、性同一性障害に対する差別禁止条例の制定、市内でのジェンダー・クリニックの創設などの要請である。これまで全国各地で行われてきた自治体に対する「性同一性障害」への対処を求める活動は、県から国への意見書提出や、市町村発行の文書からの性別記載廃止だった。これに対し A 団体の活動は、国が記載内容を規定する保険証の性別記載変更など自治体レベルに留まらない。保険証の性別記載廃止と差別禁止条例は実現しなかったが、ジェンダー・クリニック設置については 07 年 12 月に行政が設置のための予算調査を検討することを決めた。また、この団体は、まだ NPO 法人にはなっておらず、法人認可を受けていない市民団体である。では、こうした国・自治体・地域社会にまたがる活動は、「性同一性障害」という医療概念といかなる関係にあった上で成り立っているのだろうか。

6 「性同一性障害」に関する市民活動が可能になった要因

まず、A 団体代表 T さんが活動を始める以前の生活を振り返っておきたい。T さんの個人史であるが、T さんは 2002 年に新聞で「性同一性障害」という存在を知った。この時を契機として、T さんが自らを女性として明瞭に位置づける生活が始まった。ただ、この時期は、まだ T さんは活動家として動く時期ではなかった。活動家として運動する以前では、経営する塾で英語講師として男性教師の役割をこなしていた。私生活では化粧することが多く、自身が女性だと明確に意識した結果、市内の精神科に通い、05 年 2 月に T さんは母親にカミングアウトすることになった。その後、経営していた塾を閉め、06 年 6 月にロビー活動を開始し、現在に至っている。母にカミングアウトできたことで、T さんは女性として生きる決意と「性同一性障害」に関する政治活動を行う決断を行った。

活動を始めるにあたって、T さんは、医療専門家や医療制度の助けなしには、活動する決心ができなかったと述べ、自身の地域での活動は、医師からの診断書がないと無理であったと述懐している。

T さん：「あの、性別適合手術を受けるための詳しい診断書じゃなくて、1 行でいい。うん、だって、私 1 行だよ。それ、絶対必要。だって、取材される時、必ず診断書求められますもん。」

T さんは、診断書は性同一性障害として生きる人の唯一の拠り所だと語っている。行政とマスコミからは、実際に診断書提出が求められた。また、行政に自らの性や、生活上の困難につ

いて説明する際には、国内でガイドラインに沿った正規の医療過程を踏んでいることが、行政側が難色を示さないようにするために必要だった。診断書の提出の必要がTさんに感じ取られたのは、実際に他者から診断書の提出が求められたからだけではない。女性であることを希求する人が、他者に会った時、他者にその人の身体がどう受け取られるか、Tさんは次のように語ってくれた。

Tさん：「だって、男性が女性の格好するっていうのは、ある意味ギャグとして使う、ギャグとして扱われるんだから、その逆は美しいんだけどね、女性が男性の格好すると、すごく美しいんだけどね、その逆はギャグとしか、扱ってもらえないんです。」

診断書提出が必要だったのは、行政やマスコミからTさんに具体的に提出が求められたからだけではない。Tさんに感受されたのは、他者にTさんの性や活動が「ギャグ」として、嘲笑や蔑視の対象として受け取られる危険であった。診断書がTさんのロビー活動に必要なことは、自らの性が「性同一性障害」のそれであり、法・医療制度の裏づけを持つものであることを、ロビー活動で関わり合う他者に示す必要があったからだった。市民活動は、「性同一性障害」の診断を下す医療制度の権威なしには成り立たなかった。

以上が活動を開始した当時のTさんの考えだが、以下で見るように、「性同一性障害」に対するTさんの考えは、団体メンバーとの論議や活動の中で変貌していった。以下で検討してみよう。

7 A 団体内での活動方針の相違と融合

Tさんの活動母体であるA団体では、活動を始めたばかりのTさん和其他のメンバーとの間で論争があった。論争とは、「性同一性障害」とされた人々は、決して疾患を抱えたものではないし、むしろあくまでその人自身の個性の一つであると考えなければならないかという主張がメンバーから提起されたことに始まった。そして、そもそも障害という言葉自体を無くすことが問題解決ではないかという、「障害か、個性か」という対立項があった。この議論では、Tさんは障害であると捉え、メンバーであるWさんは個性として捉えようとしていた。Wさんは障害という言葉を撤廃してゆくことが、活動の最終目的ではないかという問題提起を行った。Wさんが「性同一性障害」をめぐる活動にコミットしたのは、障害という言葉を取り払い、社会で生きてゆくことを可能にすることで、社会的性差のはらむ権力関係を解消してゆくコンセプトがあったからだった。Wさんの言葉を聞いてみよう。

Wさん：「障害っていうのは、ふつうの世の中で生きていくのに害をなす、っていう意味で、そういうことばがあればみんなが安心する。自分は障害じゃないから、っていうふうに、そういうことばがあれば安心する。障害っていうことばはいけないと思う。私は個性だと思う。」

Wさん：「私が最初思ったのは、男女共同参画とか、私も、DVの関連について（活動）してるし、そういう問題の大もととは、彼女（Tさん）の問題が解決されれば全て解決されると思ったの。男性とか、女性とかの差別の問題ね。」（）内著者

以上のようなWさんの問題提起は、Tさんの当惑を生んだ。何故なら医師から下った診断書を基盤にして活動が成り立っているTさんにとっては、Wさんからの問題提起は受け入れ不可能だったためだ。しかも、Tさんの女性としてのアイデンティティは「女性」であると同時に「性同一性障害」であった。以下で見るように、Tさんと議論した時はWさんの述懐では「けんか」に近いものだったようだ。

Wさん：「うん、しょっちゅうだったよ。最初はね、今はもう彼女は考えが変わったけどね。性は二者なんだと、そうしないと、自分がどうしたらいいかわからないって。私のさっきの考えからしたら違うでしょ。男だって女だってなんでもいいから。でも、彼女がそういうから、彼女にとっては今そうなんだ、そういう意見なんだと思って、私は私の意見を言って、それ以上は言わんよ。だって平行線だから、その時点では。だけど今は違うでしょ。だから、体なんかは生まれたままでもいい、けども、自分の思うとおり生きる。それを、他人から手術しなきゃいけないっていわれるそういう話はあるえない、って。」

WさんとTさんの議論は、WさんがTさんの考えが変わるのを待つという形で解消されていった。活動開始当初のTさんの考えは、Wさんによれば、性差は男女いずれかであって、「性同一性障害」という言葉がないと、自身が女性であることの正当性を社会的に担保するものが何もないという点に由来していた。もし「性同一性障害」という言葉がなければ、自身はTさんが語ったように「ギャグとしてしか扱ってもらえない」存在になり、活動も成り立たないことを意味していた。

だが、活動が続ける中で、「障害が個性か」という論点は、その人が「障害」を抱えているのではなく、「性同一性障害」は社会が持つ障害であるという考えに変わっていった。「障害」

とは人の生を脅かす社会の側の障壁＝障害だという考えは、「障害か個性か」という論点に対して、Tさんに一つの解答を与えた。そしてこの解答は、社会的障壁として捉えられた「障害」を、活動によって解消してゆくという方向性を与え、自身が体験した性差別を解消するための取り組みへと収斂されていった。WさんとTさんの議論は、生まれ育てられた性とは異なる性を生きるために障害となる社会制度を解消してゆく方向に向かった。こうしたTさんの活動経過を、傍らで見ていたWさんは次のように述懐している。Wさんは、市民活動の運動プリンシプルを定めるのがTさんである以上、Tさんの考えが変わってゆくの辛抱強く見守る立場にあった。

Wさん：「だから、彼女にも言ったよ。あなたが性同一性障害についてだけやりたいだけだっていうんだったら、私は一緒にやらないって。あなたの問題は、普遍なものだから、普遍な問題を解決することだから、だから私はやるんだ、って。彼女にもいつも言ってるよ。多分彼女も変わっていくから、いつも傍で見てると、どんどん変わっていくから。で、だんだん広がっているから。カミングアウトした時よりは。だから、時間かかるし、彼女の中でも消化してゆかなきゃいけない部分がかかるので、それから実際ぶつかった問題に対処するためにやってたら、このやり方ではだめだっていうことがわかったから、ちょっと身を引いて考えて、どんどん広がってきた。どんだいい方向にいつてるでしょ。それでいいんだよ。それはそれでいい。矛盾も何もなし。」

8 行政との接触

これまでTさんの生活経験とA団体内での活動方針の形成過程に焦点を当ててきた。次であげる行政とA団体とのかわりも、団体の理念にもう一つのヒントを与えている。行政とのかわりの中で、いかにして「性同一性障害」抱える問題を地域でうたえてゆくかという課題にA団体は直面した。

具体的には、性差が人にとってアイデンティティとして切実に必要とされた時、このアイデンティティと社会がいかなる衝突・摩擦を引き起こすのかを行政・地域住民に説明してゆくことが、団体の課題となった。この課題を引き受けたのがTさんであり、Tさんは自らの生活経験を行政職員の研修、地域住民・学校職員を対象にした講演会で語った。県庁内部では、Tさんから問題提起があった時には、この問題に関連する部局、課長以下の担当者同士で話すこともでき、縦割りとなされる行政内部での横の連携が図られている。行政との密度の濃い接触が可能になったのは、Tさんが県の人権課のK課長にまず自身の境遇を話したことだった。K課長はTさんの要請に関連する他の部局職員を集めて研修会を開く、という機会を重ねていった。

行政との持続的な接触は、K 課長がまず T さんの意向を窓口で聞き、T さんの要請に関連する部局に問題を振り分ける、という形で可能になった。また、他の自治体で研修や講演会を開く場合には、自治体同士の人権課のつながりを經由して、K 課長が他自治体の人権課職員と T さんのコンタクトを仲介し、他の自治体で研修・講演が開かれている。K 課長が T さんの要請を受ける「窓口」になっている模様を、K 課長は次のように語っている。

K 課長：「ま、一つは T さんを紹介するということですね。こういった方がおられて、要望書を出したいと、あるいは、こういった形の研修ができるので、人権研修の方に取組んでいくと。最初のころは、研修をしたいという時は、とりあえずうちが窓口になって、つなぎをしたことはあります。」

県の人権課との接触を一つの契機として、07 年から現在に至るまでの団体の活動が行われている。活動は県庁内部の様々な課とつながりから成り立っているが、A 団体は県庁の男女共同参画室とのつながりもあり、この参画室を經由して研修・講演を行っていてもいる。参画室は、T さんの要請が男女共同参画の問題に絡むものであったために、T さんの要請内容を県職員・地域住民に対して説明する機会を提供してきた。男女共同参画室に S 室長が就任して以来、参画室は団体に講演・研修の機会を提供している。

S 室長によれば、T さんが男女共同参画室とかかわり始めた当初、T さん自身は男女共同参画という理念と自身の目指す社会像は相反するものと考えていたという。男女共同参画という理念は、T さんが持つ「女性として生活を送りたい」という願いを排除するものと考えていた。こうした T さんの考えは、「性差は 2 つであり、そのどちらかを生きなければならない」という当時の T さんの考えに基づいていた。当時 T さんは、団体内部でも W さんに対して「性は 2 者なんだと、そうしないと、自分がどうしたらいいかわからない」と吐露している。T さんの当時の考えを知った S 室長は、男女共同参画が決して T さんの意向と矛盾するものではなく、むしろ男女の性差の存在を認めた上で、この性差にかかわりなく対等な関係を結ぶのが男女共同参画の主旨であることを伝えた。T さんは S 室長が与えたヒントをもとに、次第に自身の意志と男女共同参画の動きが一致するものであることを汲み取っていったという。S 室長は A 団体が活動を始め、T さんが講演を行い始めた当初の状況を語ってくれた。

S 室長：「で、そういった（『性同一性障害』への）誤解を、なるべく少なくするには、きちんと語っていただくことだと思いましたので、最初の頃なさってた講演にだいぶいちゃもんをつけましてね、それは難しくてわからないからやめようとか。だいぶ医学的

な部分を話されてね。こうかもしれない、ああかもしれないという話だったんですよ。そういった話も必要なんですけれども、それを話しても人はついてこないよと。それよりも、ご自身の体験をせつせつと、語られて、心情とか、またそれによって引き起こされる現実的な課題ですとか。例えばちゃんと職がないとかですね。食べていけないんですよね、ほんとにね。」() 内著者

ここで、S室長が証言していることは、「性同一性障害」の問題は雇用問題という問題とリンクしていることを、Tさんに助言したということだ。この男女参画室からの助言により、Tさんは雇用問題に対して、男女共同参画の視点を入れて雇用問題の解決を目指すアイデアを得ていった。Tさんは、S室長の助言や行政側の「性同一性障害」へのコミットのあり方を受け止めることで、Tさん自身が労働市場から排除され、母親の年金やTさん自身の臨時的収入に生活の糧を頼らざるをえない状況を解決すべく、団体の理念に次第に明確な輪郭を与えていった。そこでTさんは、「性同一性障害」が生存権にかかわる問題であること——Tさんの言葉で言うなら「性同一性障害は社会の側の障害だ——を明確に意識し、「性同一性障害」とされる人への労働市場への参画を促す理念に辿りついていった。そして「社会の障害としての性同一性障害」が抱える労働問題の解決のために、男女共同参画と連動するアイデアを生み出した。

「性同一性障害」の問題が生物学的性差でなく、社会的性差と生存権との衝突であるというTさんの意識は、「性同一性障害は性の悩みを抱える個人の責任ではなく、社会の側の障害だ」という言葉に明確に言い表されている。だが、「性同一性障害は社会の側に責任のある障害だ」という着想は活動を始めたばかりのTさんが明確に意識していたものではない。むしろ団体メンバー、行政職員との議論のなかで、試行錯誤を繰り返す中で獲得されたものであった。

9 考察——A団体の功績

ここで、A団体が「性同一性障害」という医療概念に依拠しつつ、男女共同参画と連携しながら出していった功績を考察しておこう。まず、A団体は、医療制度が下す「性同一性障害」の診断書さえあれば、身分証の性を変えられるというヴィジョンを持っている。これは、性器切除を行わなければ戸籍の性別が変えられない現行の法の厳しい基準を、できる限り緩和しようとするものである。このヴィジョンは、身分証の性の変更によって、「性同一性障害」として認可された人は、身分証と生物学的性の不一致を理由に就職差別や解雇をされないという、労働問題の解決ヴィジョンとつながっている。このヴィジョンを具体化させるには、A団体は、まず現行のような厳しい審査なしに、比較的容易に「性同一性障害」の審査・診断を下すため

のジェンダー・クリニックの設立が必要であるとした。そして、団体はジェンダー・クリニック設立を市に求め、これは現在設立の方向で検討が進んでいる。また、保険証・パスポートなどの国の管轄下にある身分証なども、厚生労働省と緊密に連絡を取り合うことで、診断書さえあれば自らの望む性に身分証の性を変更できるよう、折衝を重ねている。さらに、結局は廃案になってしまったが、「性同一性障害」とされた人々の就職差別に法的制裁を加えるべく、「性同一性障害」への差別禁止条例の制定を求めている。さらに、厚生労働省の管轄にあるハローワークに対しては、「性同一性障害」とされた人への差別を、男女共同参画の枠組みで撤廃させようとしている。こうしたTさんの活動は、「性同一性障害」という概念や、医療制度の権威のもとに出された診断書なしには成り立たないものであった。さらに、団体の目指す社会像も、「性同一性障害」の診断書を基盤にして、身分証の性の変更、労働市場への参画を目指すものであり、医療制度に依拠した社会像であった。

10 結語

ここで、本報告の目的に対する結論を導き出してみよう。本報告の課題とは、生まれ育てられた性とは異なる性を生きようとするあり方は、現在疾患とされているために、「いかなる性のあり方も許容される社会」とは矛盾する結果を導き出す、という学術的認識を再検討することだった。再検討とは、性の管理化は「性的多様性」とは矛盾する社会を創り出すが、それでも性の管理化は必要とされるという現実を吟味することであった。これまで検討してきたように、「性同一性障害」は医療制度がある性のあり方を管理化した結果生じたものだという、これまでの学術的蓄積は、A団体の活動にもあてはまりそうだ。というのも、A団体の活動が「性同一性障害」という名の下に行われ、なおかつ団体が目指す社会像も医療制度の介入なしにはありえないものだったからだ。こうした団体の活動は、より性支配を強めるものに見える。だが、微視的に見た場合、A団体は男女共同参画の枠組みに医療概念「性同一性障害」を包含し、性に関わる労働問題を解決しようとしている。これは、性の管理化が進んでゆく契機を作るだけでなく、男女間の平等という視点から、労働市場における性支配を緩和してゆく契機を作っている。これまでの学術的知見からは、医療による性の管理化は、性支配を作るというものだったが、A団体の活動は、これまでの学術的知見の蓄積とは異なるケース・スタディを提示している。というのもA団体は、性の疾患化という事態を受け入れつつ、疾患化された性を男女間の平等という実践枠組みを持つ男女共同参画に包摂することで、医療制度の介入による性支配を弱めようとしているからだ。今後こうした現場からのケースをさらに読み解くことで、医療化が性支配を強化する事態を限りなくゼロにする対応策を検討したい。

References

- Billings, Dwight. & Urban, Thomas. (1982). The socio-medical construction of transsexualism: An interpretation and critique. *The Social Problems*, 29 (3) , 266-82.
- Butler, Judith. (2004). *Undoing gender*. New York: Routledge.
- Hausman, Bernice, L. (1995). *Changing sex: Transsexual, technology, and the idea of gender*. Durham: Duke University Press.
- Meyerowitz, Jonanne. (2002). *How sex changed: A history of transsexuality in the United States* . Cambridge: Harvard University Press.
- 三橋順子. (2003). 「性別を超えて生きるということは『病』なのか?」. 『情況』, 4 (19), 206-11.
- Namaste, Vivianne, K. (2000). *Invisible lives: The erasure of transsexual and transgendered people*. Chicago: the University of Chicago Press.
- Raymond, Janice, G. (1979). *The transsexual empire: The making of she-male*. Boston: Beacon Press.
- Rubin, Henry. (2003). *Self-made men: Identity and embodiment among transsexual men*. Nashville: Vanderbilt University Press.
- 田中玲. (2006). 『トランスジェンダー・フェミニズム』. 東京: インパクト出版会.

Author Note

付記：本稿執筆中に、S 室長の訃報に接した。生前のご高配に心より感謝を申し上げます。

TATAI Toshiki

Footnotes

- ¹ 「性同一性障害」という言葉は、米国精神医学学会が 1994 年に発行した DSM 第 4 版から登場し、精神医学学会が 1980 年に発行した DSM3 版において、「トランスセクシュアリズム」として登場している。日本で「性同一性障害」が医療用語として普及したのは、95 年に「性転換治療の臨床的研究」が埼玉医科大の倫理委員会に提出され、倫理委員会が 96 年に『性転換治療の臨床的研究』に関する審議経過と答申」、97 年には日本精神神経学会が「性同一性障害に関する答申と提言」を出し、「性同一性障害」に関する診療と治療のガイドラインを発表した以降である。このガイドラインに沿う形で、98 年には国内初の「性別適合手術」が行われた。
- ² 2003 年に制定された「性同一性障害の性別の取扱いの特例に関する法律」は、性別適合手術を受け、子供がいない人にもみ戸籍の変更を認めた法律であり、2008 年には、20 歳以上の子供がいる人は戸籍を変更できるという要件に変更された。

A Formation Process of Social Activities Based on the Medical Discourse of “Gender Identity Disorder”

Toshiki TATAI

This report examines aspects of social activities based on the name of “gender identity disorder,” which have recently become known. The terminology “gender identity disorder” describes those people trying to live as a different sex from which they were born; they show some aspects of sex conflicted between biological and social genders. Issues of labor trouble those people most. In the current Japanese labor market, there are problems regarding the exclusion of people marked as “gender identity disorder”—only those who agree that their biological gender matches their social gender can become regular and dispatched workers. In order to solve these issues, there has been a social movement that requires the central and the local governments to make a settlement. This activity allows the intervention of the health system in gender, since it is conducted under the name of the medical discourse of “gender identity disorder.” Such interference has been criticized for its attempts to control the diversity of sexuality.

This study utilizes previous studies criticizing medical intervention in gender and control of sex. In particular, it reports that although they take the course of accepting control of sex, social activities bearing the name of “gender identity disorder” aim at more diverse sexualities than existing systems. It claims that social activities do not naively medicalize or control a certain sex but rather paint a picture of the society which approves of sexual diversity by placing “gender identity disorder” in the field of policies aspiring for equality in both sexes. This report will to show some cases that demonstrate how the control and the medicalization of sex do not simply enhance control of sex.

Keywords:

gender identity disorder, medicalization of sex, enhancement of sex control, labor market, gender equality

“International Women’s Day” 100 周年記念によせて—“International solidarity is needed for international women’s day”

南コニー

はじめに：「国際女性の日」の制定

1904 年 3 月 8 日ニューヨーク市で女性労働者たちによる大規模なデモ行進が決行された。彼女たちが訴えたのは、長い労働時間及び低賃金の改善と、社会的地位の向上をはかる婦人参政権の付与であった。この運動の波を受け、1910 年、コペンハーゲンでの国際社会主義者会議でドイツの社会主義者クララ・ツェトキン（Clara Zetkin）によって提唱されたのが「国際女性の日」である。この会議でツェトキンは、国際女性の日提唱と共に、それまでごく一部のきわめて少数の裕福な納税者にだけ認められていた女性の選挙権が、すべての女性に平等に与えられなければならない権利であると強く主張した。その翌年、この「国際女性の日」と参政権獲得の運動は、デンマーク、ドイツ、オーストリア、スイスに伝わり、1913 年の 3 月 8 日には西欧各地で平和を訴える女性集会が開かれた。その結果、デンマークやアイスランドでは、1915 年に婦人参政権が認められ、1917 年にはソ連、その翌年にはドイツとカナダ、そして 1945 年にフランスと日本においても認められた。その後 1975 年に 3 月 8 日を「国際女性の日」とすることが国連によって正式に定められ、毎年、世界各国で、女性の権利を見直す集会やこの日を記念するさまざまなイベントが催されている。

2010 年コペンハーゲン国際女性会議レポート

1910 年から 100 年後の 2010 年 3 月 8 日、ツェトキンの言葉を引用した挨拶でコペンハーゲン国際女性会議 100 周年記念の幕が開かれた。プログラムの構成は、現代の若いフェミニストたちによるパネルディスカッション、1950 年代以降の女性活動家や各界著名人によるスピーチ、トークセッションや映画の上映など、フェミニストの世代間交流に基づいたオープンな会議であった。

まず、最初のパネルディスカッションでは、メディアの一端における活動をテーマとして、現代の欧米のフェミニストたちの活躍の紹介と質疑応答があった。パネリストは、フェミニズムを扱うドイツの雑誌『ウィア・フラウン（Wir Frauen）』の編集者ミツ・サンヤル（Mithu Sanyal）¹、アメリカの“Feministing.com”の編集者ジェシカ・ヴァレンティ（Jessica Valenti）そしてスウェーデンのフェミニスト作家ヨハンナ・パルムストロム（Johanna Palmström）²であった。

Q1. この半世紀の間に女性の社会的立場はかなり改善されてきたように思われるが、2010年の今日においても「フェミニズム」の運動は必要なのか？

サンヤルー必要である。フェミニズムの重要性は、今日のこの日が、ただ単に「女性の日」というのではなく、『『国際』女性の日』といわれるところにある。つまり、グローバルな視点からみると、まだまだ女性の基本的人権が守られていない地域がたくさんあるということである。もちろん、21世の今日では70年代と異なり、欧米を中心に多くの事柄が改善され、当時と同じようにこの運動に賛同してもらうのは難しいが、世界への一つのチャレンジとして、エネルギーとして大事な運動であると思われる。

ヴァレンティー「傘をさして歩き、たとえ自分が濡れなかったとしても、外で雨が降っていないとはいえない」のと同じように、世界中で女性差別に関する問題がありつづける限り、フェミニズムには必要性がある。そして、今日のフェミニズムで重要なことは、ウェブサイトなどを利用して、多様になったフェミニズムの「プラットフォーム」をつくることである。

パルムストロム—どうして、女性の社会進出で知られているスウェーデンのような国でフェミニズムが必要なのか、ということをよく問われる。確かに私の母国スウェーデンは、男女平等で知られた国であり、ジェンダーギャップが最も少ない国であったが、現在はその第一世代が後退し、フィンランドやアイスランドなど他の北欧諸国に次ぐ女性の進出国となっている。今後の男女平等の明確なガイドラインを生み出すためにも継続的なフェミニズムのエネルギーが重要である。

Q2. 現代のフェミニズムは1970年代と比べてどう違うのか？

ヴァレンティー—1970年代のフェミニズムは、欧米を中心に現実の生活に焦点があてられ、特に女性のフィジカル面での運動が中心であった。その当時は、女性の社会的地位、家事労働、性の解放がフェミニズムの基盤であった。つまりフェミニズムは公共を通して個人へと伝わっていった運動であったが、現在のフェミニズムでは、個々人のオンライン活動から、インターネットを中心に情報が流され、フェミニズムの運動がよりグローバルな視点で議論されている。つまり、現代のフェミニズムは公共から個人への一方通行ではなく、個人から発信され、学校や仕事場など公共に伝播する運動となり、現実生活の改善につながっているのだ。

Q3. インターネットから広がるフェミニズム運動と主要メディアとの関連性はあるのか？

サンヤル—インターネットのサイトに掲載した記事と同様のものを、主要メディアにも送り続けることで、TV や主要メディアに取り上げられるケースがある。

パルムストロム—主要メディアでは、それぞれのニュースを重要視するもののジャーナリストの見識が狭かったり、古い固定観念にとらわれた捉え方をしたりすることが多く、問題の結論に導くようなインスピレーションある記事が書かれることは少ない。よってサイトから主要メディアへの関連性はいまだに希薄だといえる。

Q4. フェミニズムはどのようにメディアや各組織に影響を与えているのか？

パルムストロム—フェミニズムは法の改正につながる運動である。そのためフェミニズムを文化交流や学会のレベルにとどめるのではなく、政治につなげる具体策が生み出されなければならない。フェミニズムの運動は、その運動とともに起こる人々の「賛同的な余波」で、これまで見過ごされてきた諸問題を顕在化させる効果がある。21 世紀に入ってフェミニズムは、階級、人種、民族にまで対象を広げた社会的活動となっている。例えばスウェーデンでは 2009 年、これまで使用されてきた「処女膜」という言葉の代わりに「膣粘膜」という言葉の採用が決定された。

パルムストロムが述べる、スウェーデンのこのような事例は、ことばの背景を再考し、現代に適応した意味を当てなすことで、既存の意味作用に含まれる古い価値観を脱構築することに意義がある。もともと、スウェーデン語では処女膜のことを “mödomshinna” と言ってきたが、この言葉には、女性の処女性が結婚によって壊されるべきものであるという意味が込められている。しかし、現在の医学的見地から、女性の粘膜が変化をしつつも生涯を通じて女性の身体の一部であり続けることから、「膣粘膜」 “slidkrans” という言葉に置き換えられたのである。これまで使用されてきた “mödomshinna” という言葉には、長い間女性の性を「純潔」と「罪」に二分し、女性の身体を社会的に支配してきた歴史があり、このような言葉から生まれる女性の「性の拘束」はスウェーデン人や同国に住む移民たちばかりではなく、今でも世界の多くの国々でみられることである。極端な場合は、この言葉の神話性によって女性の処女が財産として捉えられ、男性によって所有されるべきものと認められることで女性自身の身体に対する決定権が奪われ、隷属的な生き方を強いられる場合もある。このような性的アパルトヘイ

トにつながる既存の概念を排除すべく、今回は新たなことばが採用されることになったのだという。新しく採用された言葉は、英語、アラビア語、クルド語に翻訳され、パンフレットとして国内で配布しており、今後は広く海外へと頒布することも検討されている。

会議のプログラムで次に発表をしたのは、デンマークの男女共同参画大臣兼環境エネルギー大臣のリュケ・フリース (Lykke Friis)³ である。演説の冒頭で彼女は、フェミニストたちが男性の参加なしに男女平等に達することはないと結論付け、ジェンダー問題に関する男性の積極的な参加を呼び掛けた。また女性の社会参加によってスウェーデンでは GDP が 27% も上がった経緯があり、女性の能力は社会的に活かされるべきで、失うわけにはいかないものだと言った。

100 年前、ツェトキン は国際女性会議において、同じ義務が同じ権利を要求するという事実によってだけでなく、女性の能力を公私の環境でフルに活用させないことは、民主主義の名において犯罪的であるとし、男女の平等、雇用機会均等を提唱したが、フリースの演説はまさにこの内容を彷彿とさせるものであった。彼女は今後の男女平等への抱負を語ると共に、ツェトキンに代表される先行社会のフェミニストたちの活動によって、2010 年現在のデンマークでは、政治など、国の重要事項を決めるポストに女性が就いている事実を喜ばしいこととして讃えた。

次の発表はアイスランドの第 4 代大統領を務めたヴィグディス・フィンボガドッティル (Vigdís Finnbogadóttir) によるものであった。彼女は民主主義選挙で選ばれた世界初の女性大統領として知られている。演説の冒頭では、先のフリースの演説内容を受け、アイスランドの有名な諺、「足跡はすぐに雪にかき消される」という言葉を紹介し、先行社会におけるフェミニストたちの活動がいかに重要であり、忘れてはならないものかということを彼女自身の経験に基づいて語った。

フィンボガドッティル—1975 年、私を含めて約 25000 人の女性（女性 5 人に 1 人の割合）がアイスランドでストライキを起こした。本来ならば定時まで働かないといけなかったところを、女性労働者たちと申し合わせて、一斉に 14 時 08 分ちょうどに仕事を中断して帰宅したのだ。なぜ 14 時 08 分だったのか？それは、その当時女性が男性と同じ仕事に就いていても、男性の給与の 64.8% しか受け取れないことに対するあからさまな抗議であり、この就労時間の切り上げは女性労働者たちの間で事前に綿密に計算されたものだった。男性と女性の間の賃金と労働時間の不平等を訴えるために、私たちは男性と対価の労働時間分しか働かないことで、男女の給与の平等を主張したのである。“I am not 65% of a human”、がこのときの主要スローガンであった。このストライキは男性が結婚して給与が上がる一方で、女性が結婚したり出産し

たりすることで給与が結果的に下がることに対する不平等をなくすための一致団結した運動でもあった。この一致団結した運動により、市内の銀行や郵便局の窓口から人が消え（その当時女性の一般業務は建物一階の接客業に集中しており、役員室など経営に関わる大事なオフィスはたいてい 2 階以上にあつて男性中心の職場だった）、あらゆる公的機関や工場などに麻痺が生じた。このときに、アイスランドは改めて女性の社会的影響力に気付き、この抗議を機に社会的な男女平等の問題が再考されることになったのである。その結果、役職を含む公共機関での女性の就労率が 40% に増やされ、女性の労働市場が 80% 増し、1980 年には女性党が発足し、アイスランド大学などの運営に関しても男女平等の理念が浸透していった。しかし、これらの成果は、残念ながら時代が変わるとともに忘れられてしまう傾向にある。時代の状況に合わせた新たな男女平等を得るためには、男性と協力して「男女平等」について新たな方向性を示していく必要がある。たとえば、この会議でも男性との自由な対話がなぜないのか？とわれわれは問わないといけな。かつて英国首相のサッチャーは、何事かを企てたいときは男性に訊き、何事かを成し遂げたいときは女性に訊け、と言ったが、これは男性の決断力と、女性の実行力でもって、はじめて物事が達成されうするという意味である。そのことに伴い、今後は女性が豊かさの源であるということをグローバルな視野で捉えられなければならないだろう。“Gold mine, women are” この言葉をいつも胸にこれからの女性の進出に期待している。

続いてナワル・エルサダヴィー（Nawal El-Saadawi）とナオミ・ウルフ（Naomi Wolf）⁴ によるパネルセッションである。エルサダヴィーは、エジプト出身の人権活動家、産婦人科医であり、FGM（女性器切除）廃止運動に関する活動や多数の著書で著名なフェミニストであり、ウルフは、アメリカ合衆国において長年、ビル・クリントン、アール・ゴア氏の政治コンサルタントを務めてきた作家である。

エルサダヴィー—いまだ植民地主義的な言語でもって物事が語られている以上、我々はその鎖から解放されていない事実を知らなければならない。たとえば、わたしはエジプト出身だというと、すでに「第三世界」というカテゴリーの中に組み込まれ、場所は「中東」というふうに定義づけられている。一つしか存在しないはずの世界で、「第三世界の真ん中の東」という場所は本当に存在するのか、あるいは私たちの思考の中で構成されてきた世界なのか。たとえば、私がロンドンに公演にいくとき、「北に行ってくる（I am going to the North）」とか、アメリカに行くときに「極西に行ってくる（I am going to the Far West）」と人々に告げると必ずといって良いほど笑いが起きる（会場でも笑いが起こる）。しかし、「私は中東からきました（I come from the Middle East）」あるいは、「会議で極東に行ってきます（I am going to the Far

East for the conference)」と言うと、人々は何の反応も見せずに、当たり前のように私の言葉を受け入れる（会場が静まりかえる）。私自身が「第三世界の真ん中の東」で暮らしていると感じたことがないように、人はそれぞれ自分の地理的基準をもとに考えて暮らし、生きているのだと思う。しかし残念なことに、私の住んでいるエジプトでも植民地時代の言語はそのまま使われ、地理に基づけば、“The North”である欧州を、“The West”と位置付けている。双方がこのような言語の使用を見直さない限り、「グローカル（Glocal）」な協力は生まれないだろう。

ここでエルサダヴィーのいう“Glocal”とは、“Global”と“Local”を組み合わせた造語である。この言葉の背景には、「グローバル」と「ローカル」の両方の協力が統合されてこそ、人間の平等、男女の平等が成立するという理念がある。また彼女は、現在欧州の移民の間で問題となっているヘッドスカーフ、ニカーブ、ブルカの着用に対して反対意見を述べると共に、現在一般的になっている女性の「化粧」についても言及した。彼女によると、女性のヘッドスカーフも化粧もある種の社会的規範が働いており、その暗黙の了解の背景には男性による女性の社会的拘束性がみられるという。このような背景から、男女平等の進展に関して彼女は、『われわれは、お互いに学ばなければならない』という言葉をよく聞くが、まずお互いから学ぶためには、お互いが対等のステージにすることが前提である」と述べた。

エルサダヴィーが今日のフェミニズムの活動の在り方について語った姿勢に対し、ウルフは以下のように付け加えた。

ウルフフェミニズム自体は、もう分析しつくされたものであり、われわれはすでにジェンダーにおける問題を熟知しているはずなので、今や戦力的な新機軸、政治的意欲、機構が必要なものだけである。われわれは、会議や学会においてジェンダーの問題を批判し、議論し終えたあとに柔和に落ち着いてしまうのではなく、政治的解決策までもっていかなければならない。思考から行動、そして具体的政策への直結させるには、会議において論議された問題や結論を法律に移行し、そのためにかかる時間やコストまでその会議において明確に算出しなければならない。また、ジェンダーの問題を従来のフェミニズムから前進させ、さまざまな分野の境界線をまたぐ社会的問題として扱うためには、世界中のジャーナリストと連盟を結ぶことが重要である。

ウルフの発言にエルサダヴィーも賛同し、会場から二人に拍手が送られた。

二人のセッションの次は、現在活躍している女性の起業家によるスピーチで、演題は「才能

あるより多くの女性をいかにして社会の中に結集させるか」という、ビジネス・マネジメント論と女性の将来性についての展望であった。ノルウェーの女性専門の人材派遣会社 Female Future の CEO、ベンヤ・ファガランド（Benja Fagerland）は、女性が社会で重要なポストにつくためには、新しい価値の創造や、適正資格の定義を問いなおすことが必要であると述べた。

ファガランドー主導権は与えられるものではなく、自ら獲得するものである。たとえば、男女平等活動やフェミニズムの運動などに参加することで、女性である自分を弱者の立場として表明することになるのではないか、という思い込みから、自分に関わるジェンダーの問題に目を閉じることは、問題を個別化するだけで何の具体的解決にもならないということを知らなければならない。より多くの女性の公的な活動が、職場におけるセクシュアルハラスメントや、パワーハラスメントなどの個々人の問題の解決の糸口になることを忘れてはならない。このことを胸に、女性の積極的なビジネス参加を呼び掛けていきたい。

その他、会議のプログラムに、フンボルト大学のエバ・ヴィットーブラットストロム（Ebba Witt-Brattström）教授によるヴァージニア・ウルフと女性性の問題についての発表、デンマークの著名な作家スザンヌ・ブロッガー（Suzanne Brøgger）⁵ による朗読、サウジアラビア初の女性監督ハイファ・アル・マンスール（Haifaa Al-Mansour）⁶ による映画の紹介、デンマーク赤十字社所属のウズマ・アンダーセン（Uzma Andersen）及び、女性の人権を守る会所属の写真家ティナ・エングホフ（Tina Enghoff）による“Seven-Contemporary Slavery”をテーマとしたトークとセッションとフォトグラフィーのコラボレーション等があった。

その後、“International solidarity is needed for International Women’s Day” という参加者全員の結論によって 2010 年、コペンハーゲン王立図書館における国際女性会議の幕が閉じられた。

おわりに

世界経済フォーラムの 2010 年 Gender Gap Report⁷ によると、世界で最も男女格差の少ない国はアイスランドであり、続いて 2 位がフィンランド、3 位がノルウェー、4 位がスウェーデンである。このようなアイスランドの男女平等は、先行社会を担ってきたフェミニストたちの努力を引き継いだ、女性労働者たちの一致団結した運動の成果といえるのではないだろうか。

同レポートによると、残念ながら日本は 134 カ国中で 94 位である。これは主に、女性の雇

用機会、教育、健康、政治的役割をジェンダーギャップ指数として算出した結果である。先進国の中で最下位を占める日本が特に問題とするのは、雇用と政治的役割における女性の消極的参加である。例えば 2010 年の The Corporate Gender Gap Report⁸ によると日本女性の CEO は約 4% と少なく、その理由としてあげられているのが、役職における女性規範の欠如、男性主導の文化的背景、多様なポリシーに基づく新しい実践の承認を得ることが困難であること、ネットワークと社員教育の欠如である。また結婚や出産を機に離職するケースの多さなども、女性の社会進出や役職などへの昇格を困難にさせている原因であるといえる。このようなジェンダーの問題に関しては今後、様々な議論がなされなければならないだろう。本レポートでは、2010 年国際女性会議において発表された世界各国の女性活動家の今日の見解を紹介することで、ささやかではあるが、日本における男女共同参画に新たな視点が見出されることを期待したい。

Footnotes

- ¹ Sanyal, Mithu. (2009). *Vulva-Enthüllung des unsichtbaren Geschlechts*. Wagenbach: Berlin.
- ² Palmström, Johanna. & Elf-Karlén, Moa. (2008). *Äga rum-röster ur den feministika rörelsen*. Tiden: Stockholm.
- ³ リュケ・フリース (Lykke Friis)、1969 年生、コペンハーゲン大学講師、国際政治博士。
- ⁴ Naomi Wolf, 主著に *The Beauty Myth*. (2002). Perennial: New York.
- ⁵ Suzanne, Brogger. (1986). *Fri os fra Kærlighden*. Rhodos: Humlebæk.
- ⁶ Haifaa Al-Mansour. (2006). *Women without Shadows*. ハイファアは、サウジアラビア初の女性映画監督であるが、サウジアラビアでは映画館や劇場は不道德な場所とされており、公的に存在していないため、彼女の作品は国外で上映されている。
- ⁷ “The Global Gender Gap Report 2010”. Retrieved 29 October 2010, from <http://www.weforum.org/en/Communities/Women%20Leaders%20and%20Gender%20Parity/GenderGapNetwork/index.htm>
- ⁸ “The Corporate Gender Gap Report 2010”. Retrieved 29 October 2010, from <http://www.weforum.org/en/Communities/Women%20Leaders%20and%20Gender%20Parity/GenderGapNetwork/CorporateGenderGap/index.htm>

The 100th Anniversary of “International Women’s Day” — “International solidarity is needed for international women’s day”

Connie MINAMI

The “International Women’s Day” celebrated its 100th anniversary in 2010. The 2010 International Women’s Conference was held in Copenhagen commemorating the day proposed by female activist Clara Zetkin at the International Socialist Conference in 1910. At the conference, feminists and politicians mainly from western countries had panel discussions in which they engaged in a number of debates concerning the necessity and the problems of modern feminism. According to the Gender Gap Report at the 2010 World Economic forum, Northern Europe nations such as Iceland, Finland, Norway and Sweden rank high on the list of countries where the gap between men and women is narrow. Unfortunately, the same report shows that Japan ranked 94th out of 134 countries. These results are calculated by the gender gap index in terms of women’s employment opportunities, education, health, and political roles. Japan’s particular concern is the lacking of women’s participation in the spheres of employment and politics. In order to improve this situation, this report intends to highlight Northern European countries’ past efforts and their current attitudes in the field of gender equality. On the other hand, the 2010 Corporate Gender Gap Report indicates that only 4% of CEOs in Japan are female, a fact that is caused by lack examples of women in positions of power, the cultural background of the male hegemony, and a shortage of networks and employee training. Moreover, there are many cases in which women leave their jobs when they marry or have children. It is therefore becoming more difficult for them to advance in society or to climb to managerial post. Japan faces a large number of challenges in terms of gender issues, which cannot be separated from the traditional Japanese understanding of hierarchy, family and image of women in the public sphere. This report is aiming at opening new perspectives on gender equality in Japan by introducing current views proposed by female activists from around the world at the 2010 International Women’s Conference.

Keywords:

gender, gender equality, International Women’s Conference, International Women’s Day, Northern Europe

2010 年度ジェンダー研究センター (CGS) 活動報告

■春学期

4月26日(月)～ 春学期読書会 開催

1. 『ジェンダー・トラブルフェミニズムとアイデンティティの攪乱』

著者：ジュディス・バトラー / 訳：竹村 和子

担当者：蛭谷真美（一橋大学大学院）

日時：4月26日～（毎週月曜日）

2. 『愛について—アイデンティティと欲望の政治学』

著者：竹村和子

担当者：宮澤日奈子（ICU 学部生）、小河原峻（ICU 学部生）

日時：4月28日～（毎週水曜日）

3. 『ジュディス・バトラー（シリーズ現代思想ガイドブック）』

著者：サラ・サリー / 訳：竹村和子

担当者：井芹真紀子（東京大学大学院）

日時：4月30日～（毎週金曜日）

4月26日(月)・27日(火)・28日(水)

オープンセンター・pGSS 説明会開催

7月1日(木)

「多摩ジェンダー教育ネットワーク」第4回会合

場所：一橋大学

■秋学期

9月14日(火)・15日(水)・16日(木)

オープンセンター・pGSS 説明会開催

9月20日(月)～ 秋学期読書会 開催

1. 『クローゼットの認識論—セクシュアリティの20世紀』

著者：イヴ・セジウィック / 訳：外岡尚美

担当者：蛭谷真美（一橋大学大学院）

日時：9月20日～（毎週月曜日）

2. *Masculinities*

著者：R. W. Connell

担当者：川口遼（一橋大学大学院）

日時：9月22日～（毎週水曜日）

3. 批評理論特集

担当者：小河原峻（ICU 学部生）、中川寛子（ICU 学部生）

日時：9月25日～（毎週金曜日）

9月27日（月）

「多摩ジェンダー教育ネットワーク」第5回会合

場所：国際基督教大学

10月 CGS ニュースレター 013 号発行

11月20日（土）・21日（日）・22日（月）

国際ワークショップ

「アジアでジェンダーを語る—アジアにおけるジェンダー・セクシュアリティ教育」

場所：国際基督教大学 東ヶ崎潔記念ダイアログハウス2階国際会議室

12月1日（水）

「多摩ジェンダー教育ネットワーク」第6回会合

場所：中央大学

■冬学期

12月13日（月）～ 冬学期読書会 開催

1. 『クローゼットの認識論—セクシュアリティの20世紀』

著者：イヴ・セジウィック / 訳：外岡尚美

担当者：蛭谷真美（一橋大学大学院）

日時：12 月 13 日～（毎週月曜日）

2. 『男性学』

編：天野正子

担当者：川口遼（一橋大学大学院）

日時：12 月 15 日～（毎週水曜日）

3. *Femmes Fatales: Feminism, Film Theory, Psychoanalysis*

著者：Mary Ann Doane

担当者：宮澤日奈子（ICU 学部生）、井芹真紀子（東京大学大学院）

日時：12 月 17 日～（毎週金曜日）

2 月 10 日（木）

講演会「HIV/ エイズを考える一病の他者化への抵抗」

講師：新ヶ江章友（名古屋市立大学）、桜井啓介（ぶれいす東京）

場所：国際基督教大学 本館 316 号室

3 月 7 日（月）

「多摩ジェンダー教育ネットワーク」第 7 回会合

場所：国際基督教大学

3 月 CGS ジャーナル『ジェンダー & セクシュアリティ』第 6 号発刊

注

CGS 公式ウェブサイト「CGS Online」では随時、情報を更新しています。

CGS ニュースレター、CGS ジャーナル『ジェンダー & セクシュアリティ』は「CGS Online」でダウンロードできます。

AY 2010 Activity Report, ICU Center for Gender Studies (CGS)

■ Spring Term

From Monday, April 26th, 2010: Spring Term Reading Groups

1. *Jendaa toraburu – Feminizumu to aidentiti no kakuran* (Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity)

Author: Judith Butler (trans. by Kazuko Takemura)

Organizer: Mami Ebitani (Graduate School, Hitotsubashi University)

Date: Mondays, from April 26th

2. *Ai ni tsuite – Aidentiti to yokubou no seijigaku* (On Love: Identity and the Politics of Desire)

Author: Kazuko Takemura

Organizer: Hinako Miyazawa (ICU Undergraduate), Shun Kogahara (ICU Undergraduate)

Date: Wednesdays, from April 28th

3. *Judisu Batoraa, Shirizu Gendai Shisou Gaido Bukku* (Judith Butler)

Author: Sara Salih (trans. by Kazuko Takemura)

Organizer: Makiko Iseri (Graduate School, University of Tokyo)

Date: Fridays, from April 30th

Monday, April 26th – Wednesday, April 28th

Open Center at CGS, pGSS Briefing Sessions

Thursday, July 1st

Fourth Meeting of the Tama Network for Gender Education

Venue: Hitotsubashi University

■ Autumn Term

Tuesday, September 14th – Thursday, September 16th

Open Center at CGS, pGSS Briefing Sessions

From Monday, September 20th: Autumn Term Reading Group

1. *Kurozetto no ninshikiron: Sekushuariti no 20 seiki (Epistemology of the Closet)*

Author: Eve Kosofsky Sedgwick (trans. by Naomi Tonooka)

Organizer: Mami Ebitani (Graduate School, Hitotsubashi University)

Date: Mondays, from September 20th

2. *Masculinities*

Author: R. W. Connell

Organizer: Ryo Kawaguchi (Graduate School, Hitotsubashi University)

Date: Wednesday, from September 22nd

3. Critical Theories

Organizer: Shun Kogahara (ICU Undergraduate), Hiroko Nakagawa (ICU Undergraduate)

Date: Fridays, from September 25th

Wednesday, October 15th

Publication of the CGS Newsletter, No. 013

Saturday, 20th – Monday, November 22nd

International Workshop: Asian Gender Dialogues: Education on Gender and Sexuality in Asia

Venue: International Conference Room, Dialogue House 2F, International Christian University

■ Winter Term

From Monday, December 13th: Winter Term Reading Group

1. *Kurozetto no ninshikiron: Sekusyuariti no 20 seiki (Epistemology of the Closet)*

Author: Eve Kosofsky Sedgwick (trans. by Naomi Tonooka)

Organizer: Mami Ebitani (Graduate School, Hitotsubashi University)

Date: Mondays, from December 13th

2. *Danseigaku (Men's Studies)*

Editor: Masako Amano

Organizer: Ryo Kawaguchi (Graduate School, Hitotsubashi University)

Date: Mondays, from December 15th

3. *Femmes Fatales: Feminism, Film Theory, Psychoanalysis*

Author: Mary Ann Doane

Organizer: Hinako Miyazawa (ICU Undergraduate), Makiko Iseri (Graduate School, University of Tokyo)

Date: Fridays, from December 17th

Thursday, February 10th, 2011

Open Lecture: Thoughts on HIV/AIDS: Resistance against the Otherization of the Disease

Lecturer: Akitomo Shingae (Nagoya City University) and Keisuke Sakurai (PLACE TOKYO)

Venue: Room H-316, International Christian University

Monday, March 7th

Seventh Meeting of the Tama Network for Gender Education

Venue: International Christian University

March

Publication of the CGS Journal, *Gender and Sexuality*, Vol. 06

Note: Regular updates may be viewed on CGS Online, the official CGS website. The CGS newsletters and journal may also be downloaded from the site.

国際ワークショップ報告 アジアでジェンダーを語る：アジアにおけるジェンダー・セクシュアリティ教育 2010年11月20日（土）・21日（日）・22日（月）

国際基督教大学ジェンダー研究センター（CGS）では、「アジアでジェンダーを語る：アジアにおけるジェンダー・セクシュアリティ教育」（Asian Gender Dialogues: Education on Gender and Sexuality in Asia）と題するワークショップを、11月後半の二日半にわたり開催した。その焦点は「アジア」「教育」「対話（dialogues）」三つのキーワードに要約できる。

まず「アジア」という語に明らかのように、本ワークショップは、CGSが2004年から2007年にかけて開催した計4回の国際ワークショップ・シリーズ「アジアにおける人間の安全保障とジェンダー」の、いわば続編である。このシリーズでは、近隣アジア諸国から多彩な研究者・活動家を招き、「社会科学」（2004年）、「人文科学」（2005年）、「自然科学」（2006年）というテーマのもと、アジアにおける「安全」を、ジェンダーの視点から縦横無尽に論じた（2007年には総括ワークショップを開催）。これらを通してCGSは、「アジア」という枠組みに慎重かつ批判的な姿勢は保ちつつも、欧米中心になりがちなジェンダー研究に、アジアからの新たな視点を打ち立てることを目指した。さらには国境のみならず、研究者と活動家の間の「境」をも越えた、アジアのジェンダー研究関連者のネットワークを打ち立てることを目指したのである。

このワークショップ・シリーズは大きな実りを生んだが、同時に、いくつかの課題を取り残すことにもなった。まず、参加者のほとんどが教育者であるにも関わらず、「教育」というテーマを真正面から論じることができなかった。また「ワークショップ」（工房）と名乗りながらも、会議型の発表に多くの時間を費やしたため、参加者間の十分な「対話」が行われなかった。他にも「ジェンダーといいながら、（ヘテロセクシュアルな）女性の地位についての議論が大部分を占め、（男性や少数派を含む）セクシュアリティについての議論がほとんどなされなかった」「アジアのジェンダー・セクシュアリティ教育に多大な影響を及ぼす宗教について、ほとんど言及がなかった」などの反省に至った。

これらの反省を踏まえ、今年度は近隣アジア諸国から6名、日本から3名の計9名のパネリストを招き、以下の三つの目標、およびプログラムのもと、親密な対話を行うこととした。

- ①今日アジア各地で、ジェンダー・セクシュアリティ教育が直面している状況の共通点と相違点を探る。
- ②「教育（Education）」「指導（Teaching）」という概念がもつ豊かな意味と可能性を探る。

③教育を語ることを通して、「アジア」というカテゴリーの有効性と限界を探る。

プログラムでは、「宗教」「草の根運動」「大学教育」という三つのテーマ別セッションを設けた。各セッションでは、まずパートⅠで、(1) ジェンダー・セクシュアリティ教育を実践する研究者・活動家らパネリスト 3 人—うち 2 名は海外から、1 名は日本から—が、その困難および達成について、各国の現状とともに報告した。続くパートⅡでは、(2) パネリスト同士の対話 (30 分間)、続いてフロアも巻き込んだ自由な対話 (60 分間) を行った。全体のプログラムは以下のとおりである。

1 日目 (11 月 20 日、土曜日)

午前：プロローグ [10:00-12:00]

基調講演：田中かず子 (国際基督教大学)

「ジェンダー・セクシュアリティ教育をめぐる『日本的』状況」

午後：宗教と教育 [13:30-16:45]

1) パートⅠ：個人報告

- タイ：SATHA-ANAND, Suwanna (Chulalongkorn 大学)
- マレーシア：SHUIB, Rashidah (Universiti Sains Malaysia)
- 日本：絹川久子 (日本フェミニスト神学・宣教センター)

2) パートⅡ：ディスカッション

夕刻：レセプション [18:00-20:00]

琉球舞踊・音楽、およびミニレクチャー (GILLAN, Mathew 国際基督教大学)

2 日目 [11 月 21 日、日曜]

午前：草の根運動と教育 [9:30-12:15]

1) パートⅠ：個人報告

- インドネシア：POERWANDARI, Kristi (インドネシア大学)
- ヴェトナム：KHUAT, Thu Hong (社会開発研究所)
- 日本：宮島謙介 (かながわレインボーセンター SHIP)

2) パートⅡ：ディスカッション

午後：大学教育〔13:45-16:30〕

1) パートⅠ：個人報告

- フィリピン：BATANGAN, Maria Theresa Datu Ujano（フィリピン大学）
- 韓国：KWAK, Samgeun（梨花女子大学校）
- 日本：棚橋訓（お茶の水大学）

2) パートⅡ：ディスカッション

3 日目〔11 月 22 日、月曜〕

午前：エピローグ：総括ディスカッション〔10:00-11:45〕

各セッションの成果がどのようなものだったかは、以下の報告に譲るとして、ここではワークショップ全体の成果を概観したい。

まず学術的な成果である。二日半の対話を通してあらためて浮かび上がったのは、アジアといっても政治・宗教的勢力が強固な国（マレーシア、インドネシア、タイ）、政府イデオロギーが色濃い国（ベトナム）、強固な政府の主導でジェンダー平等政策が行われている国（韓国）、政府が弱体であるがゆえに市民主導でこれらの教育が推し進められている国（フィリピン）、宗教や政治勢力からの強制がさほどでない代わりに市民運動も起きにくい国（日本）などがあり、したがってジェンダーやセクシュアリティの捉え方、教育内容は、国家という枠組に極めて大きく左右されるという事実である。よって「アジアに特有、かつ共通の」教育法を探求する、といった飛躍はできない。だが研究者と活動家が互いにその知見やスキルを教え合うこと、男性、政府、マスメディアなど、しばしばジェンダー・セクシュアリティ教育への障壁となるものに、むしろ積極的に関わり協働すること、また若い世代に対しては、ジェンダーやセクシュアリティをめぐる不平等や困難ばかりを教えるのではなく、ポジティブな語りをも示すことが、現状を変える「教育」となるだろう。国も職場も異にする参加者たちは、対話を通してこのような視点と勇気を分かち合った。

ここで特筆すべきは、「（ヘテロセクシュアルな）女性による女性のための」会合になりがちなこのようなワークショップにおいて、日本人パネリスト三名のうち二名が男性だったこと、また性的マイノリティというテーマを扱うことができたことである。民族・ジェンダー・セクシュアリティにおいて多彩な参加者の間で、「ヘテロセクシュアルな男性性」は、ヘテロセクシュアルな男性自身を含む、あらゆる人々への束縛となりうることが確認されたのである。

次に本ワークショップは、参加者たち自身にとっての「教育」の機会となった。ふだん一堂に会することのない研究者・活動家が出会うことで、新たな発想とエネルギーの交換が行わ

れ、またネットワーキングが行われた。さらに全体を通して、一般から 30 名ほど、学内から日本人学生・留学生・教員らを含む 20 名ほどの参加者があり、同時通訳が手伝って、いずれのセッションでも一時間の自由討論では、フロアから絶え間なくコメントや質問が挙がった。「このような国際的な会議に参加できて嬉しい」という一般参加者からのコメントも複数いただいた。

なお一日目のレセプションでは、日本という「国」の境界を疑い、「アジア」というより大きな枠組みをあらためて意識するために、専門家 11 名による琉球舞踊と地謡（三線、琴、胡弓、笛、太鼓による演奏と唄）を、感謝をこめて味わった。本学の音楽学教授ギラン氏による解説も手伝って、海外のゲストからは「私たちの芸能とそっくり」との感嘆の声も聞かれた。折しも 9 月、本学キャンパスでは、まさに「ダイアログハウス」という名の、国際会議室や宿泊施設を備えた多目的ビルがオープンした。「対話」をテーマに掲げる本ワークショップをこの施設で行うことは、その良きオープン記念となったと信じている。

International Workshop

Asian Gender Dialogues: Education on Gender and Sexuality in Asia
Saturday, November 20- Monday, November 22, 2010

The Center for Gender Studies at International Christian University held a workshop entitled "Asian Gender Dialogues: Education on Gender and Sexuality in Asia" for the two and a half days in late November. The workshop focused on the three key words: Asia, Education, and Dialogues.

First of all, as the word "Asia" clearly shows, this workshop is a sequel to international workshop series "Human Security and Gender in Asia" held by CGS between 2004 and 2007. The series invited various researchers and activists from Asian neighboring countries and discuss security in Asia from gender perspectives under the headings of Social Science in 2004, Humanities in 2005, Natural Science in 2006, and concluded with a sum-up workshop in 2007. Through these events, the CGS attempted to establish a new perspective in Asia in the field of Gender Studies. Up to this point, Gender Studies has been researched mainly in western countries; therefore, we maintained a cautious and critical attitude toward the framework of "Asia." Furthermore, this series of workshops aimed to set up the network of researchers related to Gender Studies in Asia, crossing not only borders between countries but also the division between researchers and activists.

While this workshop series yielded positive results, it also left some issues. First, despite the fact that most participants were educators, we could not discuss the topic of education in a straightforward way. In addition, although they were called workshops, we spent a great amount of time on conference-style papers, and there were not enough dialogues among the attendees. Other comments included: "The main discussions were about the positions of (heterosexual) women, although the series was entitled 'gender,' there were few debates about sexualities including male sexualities and those of sexual minorities" and "... There was little reference to religions that greatly influence the education on gender and sexuality in Asia."

Considering these reviews, this year's workshop invited nine panelists (six from Asian neighbor countries and three from Japan) and engaged in close dialogues under the following three objectives and programs:

- 1) To give an overview of both diverse and common situations (including challenges) that

education on gender and sexuality in Asia are faced with today.

2) To explore the rich meaning and potential of education and teaching.

3) To critically explore both the effectiveness and the limitations of the category “Asia” when discussing education on gender and sexuality.

In program, there were three themed sessions: “Religion,” “Grass-roots Movements,” and “University Education.” In each session, first in Part I, three researchers and activists practicing education on gender and sexuality (two from overseas and one from Japan) reported their challenges and achievements in their national situations. In the following Part II, we had dialogues between panelists for thirty minutes and free dialogues among the attendees for an hour. The whole program was as follows:

First Day (Saturday, November 20)

Morning: Prologue [10:00-12:00]

Keynote Speech: TANAKA, Kazuko (International Christian University)

“Japanese’ Situations Surrounding Education on Gender and Sexuality”

Afternoon: Religion and Education [13:30-16:45]

1) Part I: Individual Reports

- Thailand: SATHA-ANAND, Suwanna (Chulalongkorn University)

- Malaysia: SHUIB, Rashida (Universiti Sains Malaysia)

- Japan: KINUKAWA, Hisako (Center for Feminist Theology and Ministry in Japan)

2) Part II: Discussions

Evening: Reception [18:00-20:00]

Okinawan Dance and Music, Mini-Lecture (GILLAN, Matthew, International Christian University)

Second Day (Sunday, November 21)

Morning: Grass-roots Movements and Education [9:30-12:15]

1) Part I: Individual Reports

- Indonesia: POERWANDARI, Kristi (University of Indonesia)

- Vietnam: KHUAT, Thu Hong (Institute for Social Development Studies)

- Japan: MIYAJIMA, Kensuke (Kanagawa Rainbow Center SHIP)

2) Part II: Discussions

Afternoon: University Education [13:45-12:15]

- Philippines: BATANGAN, Maria Theresa Datu Ujano (University of Philippines)

- Korea: KAWAK, Samgeun (Ewha Womans University, Korea)

- Japan: TANAHASHI, Satoshi (Ochanomizu University)

Third Day (Monday, November 22)

Morning: Epilogue: Summary Discussions [10:00-11:45]

In the following reports of the contents of each session, we would like to give an overview of the achievements of the whole workshop.

First, there were many academic achievements. Through dialogues during the workshop's two and a half days, the fact emerged that views about gender and sexuality and the contents of education are greatly influenced by the framework of nations, since there are various kinds of countries in Asia: those having strong political and religious power (e.g. Malaysia, Indonesia, Thailand); those with a strong governmental ideology (Vietnam); countries where gender equality policies are conducted under the leadership of the government (Korea); countries where gender education has advanced through citizen's initiatives due to a weak government (Philippines); and place in which there are not many citizens' movements despite the lack of coercive power from religious institutions and the government (Japan). Thus, we cannot deem any educational method to be "common and unique to Asia." However, through exchanges of knowledge and skills between researchers and activists, the current situation may be changed. Active engagement and cooperation can combat the challenges for gender and sexuality education such as patriarchy, governments, and mass media. They can also teaching younger generations about positive aspects of gender and sexualities rather than focusing on inequality and difficulties. Attendants from different countries and workplaces shared these views and instilled courage in each other through dialogues.

It is of particular note that two out of three Japanese panelists at our workshop were male, despite the fact that these workshops tend to be a congregating place for (heterosexual)

women and organized by (heterosexual) women. Moreover, it should be noted that we covered topics regarding sexual minorities. The participants of diverse ethnicities, genders, and sexualities confirmed that “heterosexual masculinity” could constrain all people including heterosexual men themselves.

Second, the workshop provided us with opportunities for education. As it brought together researchers and activists who do not usually meet each other, they were able to exchanged new ideas and energy and create networks. Furthermore, we had about thirty public participants and twenty attendants from ICU including Japanese and international students as well as faculty. They actively shared their comments and questions from the floor in every session with assistance of simultaneous interpretation. We also had comments from public participants that they were happy to join in such an international conference.

In order to question the borders of Japan as a nation, we need to be aware of a larger framework as “Asia.” We enjoyed a performance of Okinawan dance and song accompanied Shamisen, Koto, Kokyu, Hue, and Taiko with great appreciation. As they listened to Professor Gillan’s lecture (Professor of music at ICU). Oversea guests were amazed to discover that the performance was similar to their arts.

In September, a multi-purpose building equipped with international conference rooms and accommodations, called Dialogue House, was opened on campus. I believe that holding the workshop themed “Dialogues” in this facility successfully commemorated the opening of the Dialogue House.

ジェンダー・セクシュアリティ教育をめぐる「日本的」状況

田中かず子

国際基督教大学（日本）

日本のフェミニズム運動の原点

ジェンダー・セクシュアリティ教育を概観するには、70年代のウーマンリブ運動から始める必要がある。新左翼運動にかかわった女性たちが中心になって、自分自身の解放に向けてあらゆる問題提起をしたリブ運動は、日本のフェミニストたちにとっての原点だからである。70年代の後半にはリブ運動は求心力を失っていったが、今度は学問という領域でフェミニスト研究者が「女性学」の名のもとに集まって、女性学関連の諸学会を設立したのである。こうして、70年代の後半に日本での女性学は始まった。

日本のジェンダー・セクシュアリティ教育の主な特徴

80年代以降に発展した日本のジェンダー・セクシュアリティ教育は、大きく次のような特徴をもっている。まず初めに、行政が全国に女性センターを設立し、多くの女性学講座を開講していった。この官主導的な教育は、90年代はじめくらいまでは主に専業主婦をターゲットとしており、「主婦フェミニズム」と呼ばれた。第二に、大学のキャンパスにおいては、女性学（ジェンダー研究、セクシュアリティ研究を含む）の可視化は未だに限定的だ。現在では数千という女性学関連コースが開講されているにもかかわらず、カリキュラムとして制度化している大学は少なく、女性学関連研究施設がある大学も限られている。第三に、フェミニスト研究者は、その活動の場をキャンパス外に求めた。70年代後半に設立された女性学会の中で、日本女性学会は90年代に若手の研究者をリクルートすることに成功し、会員数も増加した唯一の学会である。また、90年代後半以降、各専攻分野での学会が次々と設立されるようになっていった。

日本のジェンダー・セクシュアリティ教育が直面する課題

第一に、西欧で発展したジェンダー・セクシュアリティ研究を前提とし、それを消費することから脱することができていないこと。第二に、フェミニズム運動とアカデミアが連携できていないこと。第三に、女性学という「女」とは誰かという問題を避けていること。それゆえに、フェミニズムが必要な多くの人たちに届かないばかりか、線引きをし、排除する傾向を助長してしまっている。

ICU での試み

ジェンダー研究センターを 2004 年に設立し、2005 年にジェンダー・セクシュアリティ研究プログラムを開設した。設立当初に 3 つの主要な目標は、次の通り。①欧米からの情報を消費する受動的な態度から脱し、世界に向けて積極的に日本の情報を発信すること。②アジアにおいて、女性学・男性学・ジェンダー研究に関心のある人たちとのネットワークの構築を目指すこと。そして、③社会科学や人文科学だけでなく、自然科学をも取り入れたジェンダー研究の地平を切り開くため、ICU のジェンダー研究プログラム pGSS を支援すること。まさに、今回の「アジアでジェンダーを語る」国際ワークショップをジェンダー・セクシュアリティ教育の実践の場と位置づけ、みなさんと経験を共有し少しでも相互の理解を深めることができるよう、未来を見つめながら大いに語り合いたい。

“Japanese” Situations Surrounding Education on Gender and Sexuality

Kazuko Tanaka

International Christian University, Japan

The Fundamental Standpoint of the Feminist Movement in Japan

In order to examine the development of gender/sexuality education in Japan, we need to reflect on the UUMANRIBU movement (a Japanese term based on the English phrase “Women’s Liberation” movement; often abbreviated as RIBU). Many women in the New Leftist movements, who had gained an awareness of sexual discrimination, banded together to express concerns on various issues for the purpose of liberating themselves as women. This RIBU movement has become the cornerstone of the feminist movement in Japan. In the late 1970s, the RIBU movement lost much of its appeal for women. At the same time, feminist scholars in academia gathered together under the name of JYOSEIGAKU (Women’s Studies) and set up Women’s Studies Institutions nation-wide. Thus, the history of Women’s Studies in Japan started in the late 70s.

The Main Characteristics of Gender/Sexuality Education in Japan

Since the 1980s, gender/sexuality education has developed with the following main characteristics. First, the national government and local governments led initiatives to build women’s centers across the country and provided numerous lectures in the field of women’s studies. This bureaucrat-led education was aimed mainly at full-time housewives until the 1990s; the trend has thus been termed “housewife feminism.” Second, at college campuses, the visibility of women’s studies (including gender studies and sexuality studies) has been severely limited. Fewer than five universities have institutionalized women’s studies built into their curriculums. Universities that have set up institutions on campus to further women’s studies are also limited, totaling at around twenty institutions in all of Japan. Third, feminist scholars have been active mainly outside of the college system, organizing other academic institutions. Among the institutions set up by scholars of women’s studies in the 1970s is the Women’s Studies Association of Japan. It is the only institution to successfully recruit young scholars and expand in size. Since the mid-1990s, institutions related to women’s studies have been allocated to and organized within other various academic fields.

Major Issues Regarding Gender/Sexuality Education in Japan

In Japan, gender and sexuality education has been stuck in the stage of employing the academic achievements of gender/sexuality studies that were developed in the West. Second, because of the troubled relationship between the feminist movement and academia, the two cannot be bridged to work well together. Third, it has shied away from dealing with the issue of “who are the ‘women’ addressed in ‘women’s studies’” in Japan. Overall, gender/sexuality education cannot reach the people who really need feminist ideas in order to free themselves from the constraints of discrimination. Rather, it has aided in setting up boundaries to eliminate “others.”

Efforts at ICU

The Center for Gender Studies (CGS) was set up in 2004, and the Program in Gender and Sexuality Studies (pGSS) was integrated into the university-wide curriculum in 2005. The CGS has three major goals. First, we make a clean break from the passive strategies of the past, which relied mainly on absorbing information from the Western world. Instead, we intend to work actively to collect and convey relevant information from Japan to the rest of the world. Second, we will build networks with and among people in Asia who are interested in women’s/men’s/gender studies. Third, we provide support to ICU’s Program in Gender and Sexuality Studies, which has launched a new phase of gender studies by including the natural sciences. I think this International Workshop, “Asian Gender Dialogues,” is a practical place for us to enhance our vision of gender/sexuality education. It is also a place to engage in dialogue about its future by sharing experiences and increasing our mutual understanding.

セッション 1-2. 宗教

(司会：クリストファー・サイモンズ)

パネリスト

スワンナ・サタ＝アナンド (チュラーロンコーン大学)

「仏教における魂の探求と家族」

ラシダ・シュイブ (マレーシア科学大学)

「ジェンダー、セクシュアリティ、宗教：マレーシアで何が問題になっているのか？」

絹川久子 (日本フェミニスト神学・宣教センター)

「日本における宗教と教育」

本セッションでは、まずタイ・マレーシア・日本についての発表を通して、三カ国における次の類似する問題が挙げられた。家父長的な宗教権威者が権力を掌握し続けていること、アジアの各大学が進歩する一方で、地域共同体では発展が欠如しているという分裂、教育を受けた女性のあいだで今後 10 年間のジェンダーとセクシュアリティの平等へむけて前進する可能性が悲観されていることなどである。まず、どのようにして社会は、宗教テキストが内包する人道的価値観を、ネガティブで家父長的な価値観を現代社会に持ち込むことなく、最良の形で保持することができるかという問題が提起された。

ラシダ氏は、対話のための自由でオープンな空間を作ることの重要性を強調、大学がその先頭を行かねばならないと述べた。マレーシアにおける宗教法の議論は男性専門家が多数を占めているため、他の層の人々は宗教についての意見に影響を与えることが出来ず、したがってジェンダー・セクシュアリティに関する政策を動かすことが出来ない。イスラム教フェミニストのグループが今日、女性の問題に関する議論を進展させているが、近年の大学は、地域的・グローバルな共同体において、十分な情報に基づくアクティヴィズムの発信地としての義務を果たせていないことも強調された。

絹川氏は、家父長制社会によって作られた古代のテキストの問題について話し、(歴史的産物としての) テキストそのものと、テキストの精神や意図の違いを明確にする必要性に焦点を当てた。聖書は、多数の家父長的・抑圧的な社会構造を通して、カバラの男性エリートによって作られたテキストであり、キリスト教において継続する家父長制は、この聖書テキストその

ものに由来する。一方でフェミニスト神学は、家父長的な影響に捉われない解釈を通して、聖書に光を当ててきた。

サタ＝アナンド氏は、2000年の宗教的伝統と50年のフェミニスト理論の伝統のあいだの権力差について述べ、われわれは楽観的に辛抱するべきだと論じた。仏教には、イスラム教やキリスト教のような、伝統的な価値観を永続させるための集権的機関がないという点で、独特の困難がある。これにより仏教は、ジェンダー・セクシュアリティの平等に向かって適応しやすいという利点がある一方、脈々と受け継がれている家父長的正統派が、地域での信仰に深い根を下ろしているために、変化を難しくしている一面もある。また多くの場合、教育は男性僧侶にのみ開かれた寺院を通してのみ受けられる。女性が完全に出家できる制度（Bhikkuni sangha）の設立が最優先であるが、それは家父長的で地域レベルで定着したタイ仏教の正統的信仰から、根強い反発を受けている。

第二の問題は、世界中の大学において開放の精神があるのに対し、多くの地域共同体ではいまだ閉鎖的で、状況が進展しないという温度差である。どのようにして研究者や活動家は、地域社会での固有の法や慣習を考慮に入れつつ、地域レベルでの宗教とジェンダー・セクシュアリティの問題を克服することができるのか。

タイの場合、変化を阻む主な障壁は、イデオロギーである（サタ＝アナンド氏）。現在の家父長的「伝統」は、ブッダの世俗の母の献身物語に基づき、すべての女性を「僧侶を支える俗人」の役割に追いやっている。しかし、相談と同意の後「ブッダは気を変え」、悟りへの道は男女に等しく開かれるようになったという先例が、歴史上にはある。

キリスト教に関しては、女性の叙階や、セクシュアリティや結婚といった重要事項にまつわる論争に見るように、フェミニズム運動は近年、大きな実りを結んでいる（絹川氏）。

宗教の政治的利用は、コミュニティの開放性や、近代社会や人権を重視する宗教へと向かう進歩にとって、きわめて深刻な脅威である（ランダ氏）。マレーシアでは、宗教的文脈はあらゆる事柄において当然視されており、多数の人々の宗教的事項の解釈を、原理主義へと推し進めている。しかしながら、大学やNGOには議論を積極的な行動へ移す力がまだある。またインターネットが、社会での対話や変化のためのヴァーチャルな、実在しない空間を設けている。

第三かつ最後の疑問では、パネリストは将来についての考えを求められた。多くの先進国や発展途上国の教育の場で、女性の数が増えていることを考慮すると、何が差し迫った障壁だろうか、また10～15年後、世界の状況はどのようになっているだろうか。

絹川氏は、女子学生が増えたにも関わらず、本当に大学は平等になっているのかと疑問を呈した。例えばICUの学生間では、優れたジェンダーの平等が実現されているが、教員や職員

の間ではそうではない。この差は、日本で雇用機会均等を提唱する者が直面する困難を示している。

ラシダ氏は、世界的な金融危機による経済的困窮下で、政治家やビジネス・リーダーらによるジェンダー平等の提唱の多くが、リップ・サービスだったことが明らかになったと指摘した。

フロアを含む対話では、日本のジェンダー平等指数は世界第96位であるという指摘を受け、ICUの生駒氏が、日本のフェミニズムが次第に若い世代の支持を得てきていることを説明した。またラシダ氏は、学者は世界の出来事に、素早く一もしくはまったく一反応しなかった、ジェンダー平等は、女性研究やジェンダー研究に限らず、あらゆる分野の学者たちの責任であるべきであると述べた。

三人のパネリストは、自分たちの生きているあいだに、国際レベルでジェンダーとセクシュアリティに関して急速な動きが起こることには懐疑的だという点で一致したものの、その研究、エネルギー、そして決意は、すぐれたモデルを示したと言える。

Session 1-2: Religion

(Chair: SIMONS, Christopher)

Panelists

SATHA-ANAND, Suwanna (Chulalongkorn University, Thailand)

"Spiritual Quest and the Family in Buddhism"

SHUIB, Rashidah (Universiti Sains Malaysia, Malaysia)

"Gender, Sexuality and Religion: What is at Stake in Malaysia? "

KINUKAWA, Hisako (Center for Feminist Theology and Ministry in Japan, Japan)

"Religion and Education in Japan"

The session began with three papers exploring issues in Thailand, Malaysia, and Japan. Similar problems in all three countries include continuing power in the hands of patriarchal religious authorities; a disjunction between progress in Asian universities and a lack of progress in local communities; and a lack of optimism among educated women regarding the possibility of progress towards gender and sexual equality over the next decade. The first question asked how societies could preserve the best humanistic values of religious texts without bringing their more negative and patriarchal values into modern society.

Professor Rashidah stressed the importance of creating free, open spaces for dialogue, and stated that universities must take the lead. Since discussion of religious law is dominated by male experts in Malaysia, people from other demographics cannot influence religious opinion, and therefore cannot influence policies on gender and sexuality. Professor Rashidah pointed out that feminist Islamic groups have recently made progress in advancing the debate on women's issues. However, she stressed that universities have in recent years begun to fail in their duty to serve as sources of well-informed activism in the local and global community.

Professor Kinukawa spoke about the problem of ancient texts created by patriarchal societies, and focused on the need to clarify the difference between the text itself (as a historical production) and its spirit or intention. She traced many of the problems of continuing patriarchy in Christianity to the scriptures themselves, as the textual productions of a cabalistic male elite,

operating through a number of patriarchal and kyriarchal social structures. She also described how feminist theology had illuminated the Bible through interpretations free of patriarchal influence.

Professor Satha-Anand described the power difference between a 2000-year-old religious tradition and a 50-year-old tradition of feminist criticism, and stated that we should be optimistic and persevere. She also pointed out that Buddhism presented a unique challenge, in that it lacked the centralized institutions of Islam or Christianity—institutions which drive the perpetuation of orthodox values. On one hand this gives Buddhism an advantage in adaptability towards gender and sexual equality; on the other hand, it makes the historical patriarchal orthodoxies inherent in Buddhism more difficult to change, given their strong roots in local practice. In addition, in most cases, education is only available through the temples, which are open only to male monks. Thailand needs opportunities for women to pursue education and life as ordained monks. The establishment of Bhikkuni sangha is a high priority, but faces entrenched opposition from Thai Buddhism's orthodox beliefs, which are patriarchal, and engrained on a local level.

The second question related to the difference between the spirit of openness found in universities around the world, and the lack of openness or progressiveness in many local communities. How can scholars and activists overcome local problems of religion and gender & sexuality, while taking into account specific laws and practices in local communities?

Professor Satha-Anand replied that in the case of Thailand, ideology formed the main barrier to change. Current patriarchal 'tradition' relegates all women to the supporting role of laity, based on the story of the devotion of Buddha's earthly mother. However, historical precedent exists for the "Buddha to change his mind." She pointed out a similar situation in the past, when women could not receive enlightenment. After consultation and the agreement that "Buddha had changed his mind," the path to enlightenment became open equally to men and women.

In the case of Christianity, Professor Kinukawa noted that the feminist movement had made good gains in recent decades; she mentioned the examples of the ordination of women priests, and the ongoing debates on key issues such as sexuality and marriage.

Professor Rashidah agreed that political use of religion for political ends creates the most serious threat to openness in communities, and to progress towards religions that enhance modern society and support human rights. In Malaysia, a religious context is given to political debate on all issues, and pushes the majority interpretation of all religious issues towards

fundamentalism. However, she also stated her belief that institutions such as universities and NGOs still had the power to translate rhetoric into positive action. She went on to mention the opportunities created by the Internet, which offers a virtual space for dialogue and change in societies where such space does not exist in reality.

The third and final question put to the panel requested their opinions about the future. Given the increasing number of women in education in many developed and developing countries, what are the immediate barriers, and what will the global situation look like in 10-15 years?

Professor Kinukawa questioned whether universities were truly becoming more equal, despite increased female enrollment. For example, ICU had excellent gender equality among students—but not among faculty and administrative staff. This difference represents the difficulties faced by advocates of equal opportunities in Japan.

Professor Rashidah agreed with this view, and stated that, globally, funding itself was not enough. The global financial crisis has demonstrated that, in times of economic hardship, much of the advocating of gender equality by politicians and business leaders proves to be lip service. In the open dialogue, one speaker raised the embarrassing problem of Japan's global rank of 94th in gender equality. Professor Ikoma of ICU described how Japanese feminism had increasingly failed to attract support from the younger generations. Professor Rashidah added that academics did not respond quickly enough—or at all—to global events. Gender equality must become the responsibility of academics in all fields, not only those fields focused on women and gender studies.

While the three panelists agreed that they remained skeptical about the possibility of rapid movement towards gender and sexuality on an international level within their lifetimes, their scholarship, energy and determination set an excellent example for the audience.

セッション 2-1. 草の根運動と教育

(司会：森木美恵)

パネリスト

クリスティ・ポエルワンダリ (Pulih 基金・インドネシア大学、インドネシア)

「インドネシアにおける草の根女性運動を均衡化する」

チュ・ホン・クワット (社会開発研究所、ベトナム)

「セックスについての冗談（よし、それはおもしろい！）セックスについて考える（やめろ、それは下品だ！）：セクシュアリティ教育はいかにしてこのダブルスタンダードを克服できるか」

宮島謙介 (かながわレインボーセンター SHIP、日本)

「日本における草の根運動と教育」

「草の根運動とジェンダー & セクシュアリティ教育」と題したワークショップ 2 日目、午前のセッションでは、インドネシア、ベトナム、日本よりパネリストを迎えて活発なダイアログの応酬が展開された。三者の発表とその後のダイアログにおいて共通して示唆された論点について特に興味深かった内容をまとめる。

まず、草の根運動に携わる教育者として、いかにして活動資金を確保し、継続した運動に繋げていくかという問題点が挙がった。国際機関、各国政府、企業など外部からの資金援助があまり期待出来ない現状もさることながら、例え資金提供があったとしても、その援助機関のアジェンダ推進を基調とした活動ではなく、草の根団体それぞれの本来的な活動目的の為に資金を使用する難しさが述べられた。また、草の根運動の傾向として、「カウンセリングの充実」、「リプロダクティブ・ヘルスの向上」など活動の成果を「結果」として公に目に見える形で提示し難いという性質があり、それゆえに資金獲得用の活動計画書が書きづらいというジレンマも見られた。どのような資金確保の手立てがあり得るかという点については、アカデミアに立脚した出版物を一般に発信する試みとその社会的責任・必要性が話題にのぼった。

次に、草の根運動に携わる者、広くはジェンダー研究に関わる人々を統一して「我々」とは呼びにくい状況が議論された。特に、若手研究者は国際機関など「ハイパワー」な職場を最終的に目指す構造的傾向があり、キャリアとして草の根活動を位置付ける難しさがある。しか

し、草の根活動の現場で養った当事者の視線を重要視する姿勢が、その後よりマクロな機関で働く時に活用される例も述べられ、そういった点において草の根団体の「職場」としての価値も示唆された。さらに、草の根活動の運営基盤継続の為には、ある突出した運営者の牽引力にのみ頼るのではなく、もし状況が整うならば、行政など組織立ったシステムと協働する利点も例として挙がり、ミクロとマクロの仕事を繋いで行くことが出来る人材輩出の急務が感じられた。

最後に、我々が今何を求めているのかという漠然とした、しかし本質的な問いも発せられた。草の根「活動」として変化を求めているのならば、我々が真に問題とすることは何なのか。どういう「在り方」を希求しているのか。「わが国には純粋な意味での女性運動はなかった」という発言もあったが、父権性、社会主義、伝統など社会体制に対する、または社会体制によって与えられてきたとも言える従来からの活動の先にある「我々のアジェンダ」を見据えていく時期ではないだろうか。その為には活動目標、運営力、活動資金など様々な側面において長期的かつ国際的な視野が必要不可欠であるという点もダイアログにおいて強調された。将来に向けた立ち位置の一つとして、アジア発という価値の重要性がより積極的に認識されるべきであり、このミッションにおいて、アジア諸国のパネリストおよびフロア参加者がダイアログを交わした今回のワークショップは意義深かったと言えるだろう。

Session 2-1: Grass-roots Movements

(Chair: MORIKI, Yoshie)

Panelists

POERWANDARI, Kristi (The Pulih Foundation and Universitas Indonesia, Indonesia)

“The scraping down of the grass-roots women’s movement in Indonesia”

KHUAT, Thu Hong (Institute for Social Development Studies, Vietnam)

“Joking about Sex: Yes, It’s Funny! Teaching about Sex: No, It’s Dirty!: How Education on Sexuality Can Overcome this Double Standard?”

MIYAJIMA, Kensuke (Kanagawa Rainbow Center SHIP, Japan)

“Grass-roots Movements and Gender and Sexuality Education in Japan”

During this session held on the morning of the 2nd day of the workshop, which was entitled “Grass-roots Movements and Gender and Sexuality Education,” we had active discussions. There were three panelists, one from Indonesia, one from Vietnam, and one from Japan. Here, I will summarize several common themes noted in the individual presentations and the following dialogue sessions.

First, as educators involved in grass-roots movements, the panelists share similar difficulties securing enough funding for their activities. The problems include a low likelihood of obtaining stable financial support from international organizations, governments, or private companies. Further, there are complications regarding the utilization of that funding, if and when it is available, for the main purposes of their respective grass-roots organizations. For example, the fund-receiving organizations may find themselves promoting the agendas of the funding sources rather than that of their own. Moreover, the expected “output” of grass-roots activities tends to be difficult to measure, such as “providing higher quality counseling,” and “improvements in reproductive health.” Therefore, demonstrating the results of activities to the general public in an easily recognizable way is usually difficult. As a result, writing a competitive funding proposal is not an easy task. In terms of securing funding, publishing academically-oriented information to people in general was mentioned as a method of raising money, which

is also perceived as an important activity for showing the social responsibilities of grass-roots organizations.

We then discussed about the current condition of the field. People who are involved with grass-roots movements or people who are associated with gender studies at large are no longer considered to be “we.” In particular, it was pointed out that there is a structural tendency towards young professionals who look for eventual positions at “high power” organizations, such as international organizations, so convincing them to pursue a career at a grass-roots organization is described as difficult. However, it was mentioned that, even at a macro level organization, one can meaningfully make use of a locally-grounded viewpoint acquired through working at a grass-roots organization, and in this way, grass-roots organizations are a valuable workplace, even as a temporary one, for young professionals. Furthermore, it was suggested that for the sustainability of grass-roots organizations, we should not rely only on a particular figure for promoting a movement; instead, if a situation allows, it can be beneficial to work closely with a larger institution, like a local administration. For this purpose, flexible professionals who can bridge the work between micro- and macro-levels are useful and urgently needed.

Lastly, there was a voice from the floor asking a general but yet fundamental question about the future direction of the field. The inquiry seems to relate to such questions as “What is our real problem, given that we are seeking a change?” and “What kind of society are we really striving to achieve?” In fact, a comment like “there was no women's movement in our country in pure meaning” indicates that it is a good time to re-think “our” agendas, beyond conventional ones that, in a sense, have been given by various social systems, including patriarchy, socialism, and tradition. For the future of this field, our dialogue emphasized the fact that long-term vision and international cooperation are necessary. Therefore, this international workshop, which created an opportunity for dialogue among Asian participants, should be positively evaluated as an effort to focus on the values that come from and are based in Asia.

セッション 2-2. 大学教育

(司会：生駒夏美)

パネリスト

マリア・テリーザ・ダトゥ・ウハノ＝バタンガン（フィリピン大学）

「高等教育においてジェンダー・セクシュアリティを主流化する：教訓と課題」

サムギョン・クアック（梨花女子大学校）

「韓国における大学のジェンダー・セクシュアリティ教育」

棚橋訓（お茶の水女子大学）

「お茶の水女子大学とジェンダー教育：歴史・現状・前途をめぐるケース・スタディ」

フィリピン、韓国、日本の大学の、ジェンダー・セクシュアリティ教育を取り巻くそれぞれ大きく異なった環境がパネリストから報告されたのを受け、後半では、それぞれの国での取り組みや、大学と国との関係などについて会話が交わされた。

前半では、棚橋氏がまず日本の立場から、社会変革につなげるヒントを他の二人のパネリストに求めた。クワック氏は、韓国では女性たちがマイノリティ性を主張し、父権主義を利用する形で政府の庇護を引き出したこと、だからこそ韓国ではジェンダー・スタディーズではなく女性学という名が大勢だったこと、そして梨花女子大の卒業生たちが要職につき、周囲に意識変革を起こしてきたこと、それがジェンダー平等省の設立に結びつき、成果を上げてきたこと（女性戸主が認められ、子どもが母親の名前を継げるようになったなど）を挙げた。しかし未だに女性教員や企業における女性幹部の割合は低く、また出産を機に仕事を辞める人の多さなど未解決の問題も山積しているという。バタンガン氏からは、逆に大学が政府からの独立性を維持することによって、自由にカリキュラムを組み立て、大学のイニシアチブが政府を動かしてきたことが示された。また植民地の歴史がジェンダー・センシティビティにとっては肯定的な作用を及ぼしたこと、また教会と国家のイデオロギーの衝突が時に困難を生むことが指摘された。

フロアから、フィリピンは強い市民社会と弱い政府、韓国は強い市民社会と強い政府、日本は弱い市民社会と堅固な政府を持つと指摘された。特に日本においては、政府の家父長的イデオロギーとグローバル・アジェンダの間に強い葛藤が生じており、日本特有の困難が指摘され

た。

クワック氏は、ジェンダー平等省を創設した金大中大統領が父権主義のそう強くない韓国西部の出身であり、前政権とは一線を画する政策を取ったこと、しかしその後トップになった盧武鉉は逆にジェンダー平等省を潰そうとするなど、政権トップの影響を韓国社会が大きく受けることの善し悪しを指摘した。

政府との関係については、女性のアジェンダが政権に利用されることへの懸念もフロアから示された。すでに地盤を確立させた政府が女性問題をないがしろにしている日本の例など、ジェンダー問題と政権の微妙な関係が明るみに出た。話題は女性と社会進出の関係におよび、女性の就職先が少ない韓国では、学生が就職のための勉強を優先し、女性学のアジェンダに関わりを持とうとしないと指摘した。日本でもジェンダー専攻をする学生が少ないため、全学部の学生がジェンダーの授業を履修できるように工夫がされている。フロアからは女性のリーダーシップを育てることの重要性が指摘され、各国の取り組みに質問が及んだ。また大学と大学以外の社会の乖離を防ぐために、ジェンダー・セクシュアリティ教育も常に調整・再点検が必要であるとの指摘がなされた。

Session 2-2, University

(Chair: IKOMA, Natsumi)

Panelists:

UJANO-BATANGAN, Maria Theresa Datu (University of the Philippines)

"Mainstreaming Gender and Sexuality in Tertiary Education: Lessons Learned and Challenges"

KWAK, Samgeun (Ewha Womans University)

"Gender & Sexuality Education at University in Korean Context"

TANAHASHI, Satoshi (Ochanomizu University)

"Ochanomizu University and Gender Education: A Case Study Concerning its Past, Present and Future"

The panelists' reports revealed very different situations surrounding the university education of gender and sexuality in each country. In the discussion section, the topics covered were on the efforts of each university, and on the relationship of universities and the government in respective countries.

First, Professor Tanahashi asked two other panelists for advice on how to generate social change. Professor Kwak explained how women in Korea enticed the patronage of the government by emphasizing their minority status, thus utilizing their paternalistic tendencies, and that's why the name of Women's Studies has been used primarily in Korea instead of Gender Studies. She mentioned how the graduates of Ewha University have come to assume important posts, causing a change in people's perceptions, which in turn resulted in the establishment of the Ministry of Gender Equality; much has improved (for instance, a woman can be the head of the household, and children can assume their mother's name, etc.), though there still is much more to be done, since the percentage of female university faculty and female executives in the society is still low, and many women still quit their job after marriage or childbirth. Professor Ujano-Batangan demonstrated the opposite case: University of the Philippines has achieved the freedom to build its curriculum and its influence on the government through independence from the government. She also suggested the unique

situation of the Philippines' colonial history had some positive impact on gender sensitivity among people, and that conflicts of ideologies of the church and the government cause difficulties.

From the floor, it was pointed out that while the Philippines have a strong civil society and a weak government, Korea has a strong civil society and a strong government, and Japan has a weak civil society and a strong government. It was suggested that the difficulty peculiar to Japan is the patriarchal ideology of the government conflicting with its global agenda.

Professor Kwak responded with the pros and cons of Korean society strongly influenced by the top of the government: Kim Dae-jung, who hails from the western part of Korea where patriarchy is not so strong, established the Ministry of Gender Equality, taking initiative in running the country differently, but Roh Moo-hyun tried to demolish the ministry and added 'family' to the name of the ministry, thus decreasing its effectiveness.

A concern was voiced from the floor that the government may be using the women's agenda to promote their own goals. The subtle relationships between the gender issues and the government became apparent, as in the case of Japan whose already solid government does not care much about women's issues.

The topic of women's place in the society came up in the dialogue at the end. In Korea, women's posts in society are still very limited, making students prioritize study for the benefit of job hunting, leading to students' loss of interest in Women's Studies. The students majoring in Gender Studies are very rare in Japan, too. In Ochanomizu University, the gender related courses are open to non-majors as well so that many students can learn something about Gender. From the floor, the importance of cultivating women's leadership was pointed out. Also, it was suggested that in order to avoid the disconnection of universities from society as a whole, it is necessary to constantly review the curriculum on gender and sexuality studies.

セッション 3-1. エピローグ：総括ディスカッション

「今日のアジアにおけるジェンダー・セクシュアリティ教育について何が言えるか？」

(司会：加藤恵津子)

本セッションでは二日間の対話の要点を確認し、ジェンダー・セクシュアリティ教育のあるべき姿を語り合った。まず司会者が、以下のまとめと問題提起を行った。

第一に、自らの「教育」について。(1)「当事者」から学ぶという時、女性、少女、性的マイノリティ、病者、若者の他にも当事者はいるか。(2) 儒教、宗教的原理主義、家父長制、父性愛主義の他に、何がこの人々・我々を困難に追い込んでいるか。(3) 現場から知識をどう組み立てるか。(4) 研究者と活動家は互いから何を学べるか。

次に、他者の「教育」について。(1) 学生、教員、若者、政府職員の他に、誰が教育を受ける必要があるか。(2) セクシュアリティ教育の内容は、女性の生殖や安全、性的マイノリティの HIV/AIDS に限られがちだが、これをどう超えるか。また「フェミニズム」は、女性のみならずあらゆる劣勢の人々の権利回復に有効だが、若い世代はフェミニズムを語ることを恐れる。どうすべきか。(3) どのような教育法が有効か。

以下、特に対話が集中した点を挙げる。まず「当事者」および「教育を受ける必要のある人」の両方に、「男性」を加える。男性にも男性ゆえの困難や、自らのジェンダー・アイデンティティの社会的構築性を省みる必要がある（棚橋、日本）。さらに高齢者や民族的マイノリティ、経済的弱者も含まなければならない（クワット、ベトナム；アハンダ、ICU 留学生）。「セクシュアリティ」には、アイデンティティなど心理的側面を、「ジェンダー」には男女の二項対立を超えて性的マイノリティも、教育内容として含むべきである（クアック、韓国）。研究者と活動家がチームで働き、現場感覚や調査スキルを教え合うのも重要だ（シュイブ、マレーシア）。

次に「セクシュアリティ」も「フェミニズム」も、どの国でも扱いが難しい。マレーシアでは「エンパワーメント」は、非常に強い語感を持つ現地語に訳され、フィリピン、ベトナムでは、「フェミニズム」には「ラディカルで料簡が狭い」というイメージが伴う。日本の「ジェンダー」も、「過激思想」を指すものとして前政権からバッシングを受けた。言葉本来の意味や、社会的正義に貢献する使い方が損なわれないよう、常に注意する必要がある（シュイブ、マレーシア）。

さらに若い世代、特に女性は、これらの語や話題を口にするのが難しく（島村、ICU 生）、だからこそフェミニズムは重要である（生駒、日本）。だが男性を教育する前に、他の女性一

大学教員を含む一とも話をする必要がある（ボエルワンダリ、インドネシア）。そして若者が惹きつけられるよう、教育者は、ジェンダーやセクシュアリティにまつわる問題点やリスクの指摘ばかりでなく、ポジティブな語りを、人間関係といった身近な例を通して示すとよいだろう（バタンガン、フィリピン）。

Session 3-1. Epilogue : Concluding Session

What Can We Say about Education on Gender and Sexuality in Asia Today?

(Chair: KATO, Etsuko)

In this final session, the participants shared critical points that had been raised during the past two days, continued dialogues on newly discovered issues and questions, and discussed the future of education on gender and sexuality. The Chairperson first presented the summary of past discussions, and then raised the following new questions:

First, how do we educate ourselves? In particular: 1) Who are the “challenged” people from whom we need to learn? Women, girls, sexual minorities, the sick, youth, and who else? 2) What situations are challenging them/us? Confucianism, religious fundamentalism, patriarchy, paternalism, and what else? 3) How should we build knowledge from the field? 4) What can researchers and activists do to learn from each other?

Next, how can we educate others? Specifically: 1) Who needs to be educated? Students, teachers, youth, government officials, and who else? 2) What needs to be taught? At present, education on “sexuality” is limited to education on women’s reproductive health and safety; also “feminism,” which is a beneficial concept/movement to any less-privileged social group, but younger generations shy away from it. How do we overcome these situations? 3) How should we teach?

The points that follow are those on which participants exchanged their views most enthusiastically. First, men should be added to both the “challenged” groups and the groups that need to be taught. Men have their own gender problems, and need to reflect on the social constructiveness of their gender identity. Elderly people, ethnic minorities, and economic minorities should be added to the lists as well.

Next, both “sexuality” and “gender” are delicate terms in all countries. Translation gives the terms different nuances, often evoking a negative reaction. They can also be incorporated in governmental terminology, or be labeled with simply radical images. It is necessary to keep watch over the usages of this terminology, so that they will not lose their original and complex meanings, which can be used for social justice. Furthermore, in order to attract younger generations, educators need to use the terms in positive discourses, not just for pointing out gender- and sexuality-related problems and risks.

多摩ジェンダー教育ネットワーク 第2回～第6回会合 2010年1月22日～2011年3月7日

主催：国際基督教大学ジェンダー研究センター（CGS）加藤恵津子、田中かず子
一橋大学ジェンダー社会科学研究センター（CGraSS）木本喜美子

2009年11月に発足、第1回の会合を開いた「多摩ジェンダー教育ネットワーク」（以下「ネットワーク」）は、専任・非常勤を問わず、多摩地区の大学でジェンダー教育に携わる人々の「人間関係」である。ジェンダー関連科目はあっても、ジェンダー教育がプログラムや専攻として制度化しにくい日本の諸大学にあって、その教育に携わる人々は孤立しがちである。当ネットワークはそのような人々をつなぎ、経験、スキル、そして直面している問題点を分かち合うことで互いをエンパワーすべく始まった。これには「顔の見える」関係作りが重要と考え、まずは行き来しやすい多摩地区の大学勤務者を対象と定めたのは、前号で報告した通りである。

昨年、国際基督教大学における初会合では、18名の参加者により、今後の方向性や、希望するテーマをブレインストーミングした。続いて2010年内には、以下の通り計5回の会合を開くことができた（以下、敬称略）。

〈第2回会合〉

日時：1月22日（金）、18:00～20:00

テーマ：入門的ジェンダー教育コースのあり方

発表者：竹内敬子（成蹊大学）、森岡実穂（中央大学）

場所：国際基督教大学

参加者：17名

女子学生の多い文学部と、比較的男子学生の多い経済学部という、対照的な環境で行われる二つの入門的コースでの実践や経験を、2名が報告。「ジェンダー研究を、いかに自分の問題として女子学生に考えてもらうかが課題」「女子より男子学生の方が、望んでいた人生のルートから外れることに対して準備がない」など、それぞれ示唆に富む指摘があった。

〈第3回会合〉

日時：3月9日（火）、16:00～18:00

テーマ： ジェンダー教育制度・施設を持つ大学における実践

発表者：井上輝子（和光大学）、加藤恵津子（国際基督教大学）

場所：中央大学

参加者：16名

1999年よりジェンダー・スタディーズ・プログラムを持つ和光大学、2004年以降ジェンダー研究センター、ジェンダー・セクシュアリティ研究プログラム（現在は「専攻」）を設置した国際基督教大学という、大学側に比較的理解があり、制度化においてやや先を歩む機関の代表者2名により、準備期間から現在までの歩み、および現在行われている講義について報告された。

〈第4回会合〉

日時：7月1日（木）、18:00～20:00

テーマ：ゼロからのジェンダー教育プログラム立ち上げ

発表者：木本喜美子（一橋大学）

場所：一橋大学

参加者：11名

一橋大学のジェンダー教育プログラム（2007年開始）の創設者が、「下からのムーブメント」に始まり、学内資金を獲得しつつ、教員中心に同プログラムを作ってきた過程を報告。事務室はなくとも、イベントごとに印刷物など目に見える形を残す、といった工夫を含め、大学自体がジェンダー・イシューに必ずしも熱心でない場合の「無から有の生み出し方」の良きモデルが示された。

〈第5回会合〉

日時：9月27日（月）、19:00～21:00

テーマ：非常勤講師の実践と課題

発表者：山谷真名（東京女学館）、齋藤みどり（一橋大学）

場所：国際基督教大学

参加者：10名

ジェンダー関連科目に多い非常勤講師の実態を把握し、その孤立を防ぐことは、ネットワークの当初からの願いである。女子大学、男子の多い大学それぞれの非常勤講師が、「女子学生が将来への希望を持ってなくなっている」「男子学生がフェミニズムを過去のものとしている」などの実感を報告。そもそも国公立大での非常勤講師率において、女性が男性の3倍という

問題も指摘された。

〈第6回会合〉

日時：12月1日（水）、19:00～21:00

テーマ：担当科目「ジェンダー政治論」と高校における家庭科教育の課題

発表者：廣岡守穂（中央大学）

場所：中央大学

参加者：15名

地域のNPO活動とも深い関わりを持つ発表者が、実践的感覚を育むことを目指して行っている講義を紹介。国際社会、国、自治体による男女共同参画の取り組みを教えつつ、履修者の7割を占める男子学生に、いかに家事育児を自分の仕事として考えさせるかという課題が指摘された。高校の家庭科の授業時間削減についてのアンケート調査で、「反対」が多数派を占めた結果も報告された。

〈第7回会合〉

日時：2011年3月7日（月）、16:00～18:00

テーマ：都留文科大学のジェンダー研究プログラムと担当科目「ジェンダー研究」

発表：三橋順子（都留文科大学）

場所：国際基督教大学

会合はいずれも、前半が発表、後半が質疑応答・意見交換という構成であり、活発な発言が交わされた。また話し合いを得て、(1)心置きなく発言できるよう議事録は取らない、(2)参加しなかったメンバーに対して、配布物はハードコピーで、希望者のみに郵送する、(3)二回に一回（偶数回の会合で）中期的な方針・希望を話し合う、(4)専任教員と非常勤講師の発表を交互に行う、といったスタイルを確立しつつある。

様々な面でまだ試行錯誤中ではあるが、今後もより多くの人々の参加を得られるよう、また参加者にとってより強いエンパワメントの機会となるよう、内容・形式ともに工夫改善していきたい。

加藤恵津子（CGSセンター長）

The Second to Sixth Meetings of the Tama Gender Education Network

January 22 - March 7, 2010

Hosts: Etsuko Kato, Kazuko Tanaka, Center for Genders Studies (CGS), ICU

Kimiko Kimoto, Center for Gender Research and Social Sciences (CGraSS), Hitotsubashi University

The Tama Gender Education Network (hereafter “Network”) is an association of teachers, fulltime or part-time teachers, of gender-related courses at universities in Tama district. The Network held its first meeting in November 2010. In the Japanese academic environment, which often discourages the institutionalization of gender-related courses to form a program or a major, teachers course tend to be disconnected from each other. The Network launched to link such teachers together to help their mutually empower them by sharing experiences, teaching skills and hardship they are facing with.

As reported in the last issue, the Network started with those in the Tama district. In order to create important face-to-face relationships, we felt that the fledgling program would do best if the participants would easily travel to the network’s meetings.

In our first meeting at ICU last year, 18 participants brainstormed about the future direction of the Network and possible themes for future meetings. Following that event, the Network held five meetings in 2010:

The 2nd Meeting:

Date and Time: Friday, January 22nd, 18:00 - 20:00

Topic: How to teach introductory gender courses?

Speakers: Keiko Takeuchi (Seikei University) , Miho Morioka (Chuo University)

Place: ICU

Participants: 17

Two teachers from contractual environments. One teacher was from the department of literature with more female than male students, and the other was from the department of economics with more male than female students reported their practices and experiences with introductory courses they taught. The reports had many suggestive remarks, including: “To teach female students, the critical issue is how to encourage them to consider gender studies

as their own issues,” and “Male students are not as prepared as female students for life’s failures and for integrating the so-called mainstream life.”

The 3rd Meeting:

Date and Time: Wednesday, March 9th, 16:00 - 18:00

Topic: Practices at the universities which hold institutionalized gender education

Speakers: Teruko Inoue (Wako University) , Etsuko Kato (ICU)

Place: Chuo University

Participants: 16

Wako University has had a Gender Studies Program since 1999. ICU has had the Center for Gender Studies and the Program of Gender and Sexuality Studies (currently called Gender and Sexuality Studies Major) since 2004. Representatives from these two relatively advanced, gender-studies-friendly universities reported on the history of the institutionalization of gender studies, as well as on current courses offered.

The 4th Meeting:

Date and Time: Thursday, July 1st, 18:00 - 20:00

Topic: How to launch a gender education program from "zero"

Speaker: Kimiko Kimoto (Hitotsubashi University)

Place: Hitotsubashi University

Participants: 11

The founder of the gender education program at Hitotsubashi University reported on the process of faculty-based making of the program. The program, which was launched in 2007, started with a “movement from below,” but gradually gained financial aids from the university. Many important tips were presented including, “Compensate the lack of the office with physical evidences, including making printings at each event.” The report made an excellent creation model for the creation of gender studies programs for the universities where gender education has not yet been passionately discussed.

The 5th Meeting:

Date and Time: Monday, September 27th, 19:00 - 21:00

Topic: Practices and critical issues of part-time lecturers

Speakers: Mana Yamaya (Tokyo Jogakkan College) , Midori Saito (Hitotsubashi University)

Place: ICU

Participants: 10

Two part-time lecturers, one from a women's university, the other from a male-dominant university, reported on their experiences and the impressions of students. They stated that "female students are gradually losing hope for the future (in terms of women's self-empowerment)", and that "Male students are regarding feminism as a product of the past." Statistical facts on gender bias amongst part-time lectures was also presented; female part-time lecturers account for three times the number of their male counterparts at national and other public universities.

The 6th Meeting:

Date and Time: Wednesday, December 1st, 19:00 - 21:00

Topic: Reports on "Gender and Politics" course and the problem of domestic science education at high school

Speaker: Morihito Hirooka (Chuo University)

Place: Chuo University

Participants: 15

The presenter, a university teacher and a devotee to local NPO activities, reported on the course he was teaching to enhance students' sense of practicality. He pointed out the issue of how to help male students, who consisted 70% of his class enrollment, consider housekeeping and child-rearing as a man's work. The result of a questionnaire on domestic science education at high school was also reported, in which the majority of respondents was proved to be against the decrease of the teaching hours of the subject.

The 7th Meeting:

Date and Time: Monday, March 7th, 16:00 - 18:00

Topic: Reports on Gender Studies Program at Tsuru Bunka University and the Course "Gender Studies"

Speaker: Junko Mitsuhashi (Tsuru University of Humanities)

Place: ICU

Each meeting consists of a presentation segment and a discussion segment. After some discussion, the Network decided the meeting format should be as follows: 1) In order to encourage candid opinion changes; we will not take minutes. 2) Handouts for absentees will be sent only in hard copy, and only upon request; 3) Middle- or long-term schedules are discussed at every other meeting; 4) Fulltime teachers and part-time teachers will make presentations alternatively.

Although many of its practices are still in the trial stages, the Network hopes to improve both its content and its form in order to increase participation and to offer a moment of further empowerment for participants.

Etsuko Kato,
CGS Director

2011 年度ジェンダー研究センター (CGS) 活動予定

春学期読書会

日時：2011 年 4 月～6 月

場所：ジェンダー研究センター

オープンセンター（兼 pGSS・GSS 説明会）

日時：2011 年 4 月

場所：ジェンダー研究センター

第 1 回 新入生対象セルフディフェンス・ワークショップ

日時：2011 年 4 月

場所：国際基督教大学

第 8 回 多摩ジェンダー教育ネットワーク・ミーティング

日時：2011 年 5 月

場所：国際基督教大学および周辺大学

第 2 回 新入生対象セルフディフェンス・ワークショップ

日時：2011 年 5 月

場所：国際基督教大学

第 3 回 新入生対象セルフディフェンス・ワークショップ

日時：2011 年 6 月

場所：国際基督教大学

オープンセンター（兼 pGSS・GSS 説明会）

日時：2011 年 9 月

場所：ジェンダー研究センター

CGS ニュースレター 014 号

発刊予定：2011 年 9 月

第9回 多摩ジェンダー教育ネットワーク・ミーティング

日時：2011 年 9 月

場所：国際基督教大学および周辺大学

秋学期読書会

日時：2011 年 9 月～ 11 月

場所：ジェンダー研究センター

冬学期読書会

日時：2011 年 12 月～ 2012 年 2 月

場所：ジェンダー研究センター

「アジアにおける HIV/AIDS とジェンダー・セクシュアリティ」(国際ワークショップ)

日時：2011 年 12 月

場所：国際基督教大学

第10回 多摩ジェンダー教育ネットワーク・ミーティング

日時：2012 年 1 月

場所：国際基督教大学および周辺大学

第11回 多摩ジェンダー教育ネットワーク・ミーティング

日時：2012 年 3 月

場所：国際基督教大学および周辺大学

CGS ジャーナル『ジェンダー & セクシュアリティ』第7号

発刊予定：2012 年 3 月

注

CGS 公式ウェブサイト「CGSOnline」では随時、情報を更新しています。

AY 2011 CGS Activity Schedule

Spring Term Reading Groups

Dates: April - June 2011

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

Open Center

Date: April 2011

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

First Self Defense Workshop

Dates: April 2011

Venue: International Christian University

Eighth Meeting of the Tama Network for Gender Education

Date: May 2011

Venue: International Christian University or another university in the Tama region.

Second Self Defense Workshop

Dates: May 2011

Venue: International Christian University

Third Self Defense Workshop

Dates: June 2011

Venue: International Christian University

Open Center

Date: September 2011

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

CGS Newsletter No.014

Slated for publication: September 2011

Ninth Meeting of the Tama Network for Gender Education

Date: September 2011

Venue: International Christian University or another university in the Tama region.

Autumn Term Reading Groups

Dates: from September to November, 2011

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

Winter Term Reading Groups

Dates: December 2011 to February, 2012

Venue: Center for Gender Studies, International Christian University

International Workshop on "HIV/AIDS and Gender-Sexuality in Asia"

Date: December 2011

Venue: International Christian University

Tenth Meeting of the Tama Network for Gender Education

Date: January 2012

Venue: International Christian University or another university in the Tama region.

Eleventh Meeting of the Tama Network for Gender Education

Date: March 2012

Venue: International Christian University or another university in the Tama region.

CGS Journal *Gender and Sexuality* Vol. 07

Slated for publication: March 2012

Note: Regular updates may be viewed on CGS Online, the official CGS website.

執筆者紹介 Author profiles

大木清香

東京大学大学院 人文社会系研究科 博士課程

現在ミュンヘン大学博士課程

専門：文学研究、ジェンダー研究

Sayaka OKI

Ph.D. student, Graduate School of Humanities and Sociology, University of Tokyo, LMU Munich

Specialization: Literature, Gender Studies

クリストファー・サイモンズ

国際基督教大学 教養学部 准教授

専門：英文学

Christopher Simons

Associate Professor, The College of Liberal Arts, International Christian University

Specialization: English Literature

平沼晶子

玉川大学 文学部人間学科 講師

専門：臨床心理学、発達心理学

Akiko HIRANUMA

Lecturer, Department of Human Science, Tamagawa University

Specialization: Clinical Psychology, Developmental Psychology

堀内かおる

横浜国立大学 教育人間科学部 教授

専門：ジェンダーと教育、家庭科教育学

Kaoru HORIUCHI

Professor, Faculty of Education and Human Sciences, Yokohama National University

Specialization: Gender & Education, Home Economics Education

サラ・ホートン

国際基督教大学 ロータリー世界平和フェロー

専門：ジェンダー、参加型モニタリングと評価

Sarah HOUGHTON

Rotary World Peace Fellow, International Christian University

Specialization: Gender and Participatory-based Monitoring and Evaluation

田多井俊喜

京都大学大学院 文学研究科 社会学専修 博士後期課程

専門：社会学

Toshiki TATAI

Ph.D. student, Department of Sociology, Graduate School of Letters, Kyoto University

Specialization: Sociology

南コニー

神戸大学大学院 人文学研究科 文化構造専攻 博士課程後期

専門：人文学、20世紀フランス思想、サルトル、ボーヴォワール

Connie MINAMI HANSEN

Ph.D. student, Graduate School of Humanities, Division of Human Cultural Studies, Kobe University

Specialization: Humanities, French thoughts of 20th century, Jean-Paul Sartre, Simone de Beauvoir

国際基督教大学ジェンダー研究センター (CGS) 所員
Regular Members of the Center for Gender Studies, ICU
2011 年 3 月現在
as of March, 2011

マット・ギラン (運営委員)

Matthew A. GILLAN (CGS Steering Committee Member)

Music, Ethnomusicology

池田 理知子

Richiko IKEDA *

Communication

生駒 夏美 (運営委員)

Natsumi IKOMA (CGS Steering Committee Member) *

Contemporary English Literature, Representation of the Body in British and Japanese Literature

伊藤 亜紀

Aki ITO

Storia dell'arte italiana, Storia del costume italiano

鄭 仁星

Insung JUNG

Educational Technology and Communications

上遠 岳彦

Takehiko KAMITO

Biology

加藤 恵津子 (センター長)

Etsuko KATO (CGS Director) *

Cultural Anthropology, Gender Studies

菊池 秀明

Hideaki KIKUCHI

The Social History of China in the 17th-19th Centuries

ツベタナ・I・クリステワ

Tzvetana I. KRISTEVA

Japanese Literature

ジョン・C・マーハ

John C. MAHER

Linguistics

ショウン・マラーニー

Shaun MALARNEY

Cultural Anthropology

森木 美恵

Yoshie MORIKI

Cultural Anthropology, Demography

那須 敬

Kei NASU

History of Religion, Culture and Politics in Early Modern England

大森 佐和

Sawa OMORI

International Public Policy, International Political Economy

クリストファー・サイモンズ (運営委員)

Christopher E. J. SIMONS (CGS Steering Committee Member)

English Literature

高崎 恵

Megumi TAKASAKI *

Cultural Anthropology, Religious Studies

Norie TAKAZAWA

高澤 紀恵

Social History of Early Modern Europe

田中 かず子 (運営委員)

Kazuko TANAKA (CGS Steering Committee Member) *

Sociology, Gender studies, Gender Stratification, Care Work

* 編集委員

Editorial Board Members

ICU ジェンダー研究所ジャーナル

『ジェンダー & セクシュアリティ』

第 7 号投稿規程

2011 年 3 月現在

1) ジャーナル概要

『ジェンダー & セクシュアリティ』は、国際基督教大学ジェンダー研究センターが年一回発行するジェンダー・セクシュアリティ研究分野の学術誌である。研究部門では、ジェンダー・セクシュアリティ研究における実証的研究や理論的考察に関する論文（綿密な学術的研究と、独創的な考察から成る、学術界に広く貢献しうる論考）、研究ノート（学術的研究・考察の途上にあつて、学術界に広く貢献しうる論考）を掲載する。フィールド部門では、活動家によるケーススタディ、組織・国内・国際レベルにおけるジェンダー関連活動に関するフィールドレポート（様々な領域の専門家、および研究者が、日々の実践の中から現状の一側面を報告するもの）を掲載する。書評部門では、ジェンダー・セクシュアリティに関連する近刊書の書評を掲載する。

2) 第 7 号発行日：2012 年 3 月

3) 第 7 号論文投稿締切：2011 年 8 月 31 日（水）消印有効

4) 原稿提出先：国際基督教大学 ジェンダー研究センター 編集委員会

郵送：〒181-8585 東京都三鷹市大沢 3-10-2 ERB301

E メール：cgs@icu.ac.jp

5) 応募要綱

a) 原稿

- ・本誌に投稿される原稿は、全文あるいは主要部分において未発表であり、他誌へ投稿されていないものとする。
- ・使用言語は日本語または英語に限る。
- ・原稿の様式は、Publication Manual of the American Psychological Association（2001 年発行第 5 版）の様式に従うこと。様式が異なる場合は、内容の如何に関わらず受理しない場合

がある。見本が必要な場合は、CGS ホームページ上の過去のジャーナル（以下 URL）を参照するか、CGS に問い合わせること。

<http://web.icu.ac.jp/cgs/journal.html>（日本語）

http://web.icu.ac.jp/cgs_e/journal.html (English)

- ・第一言語でない言語を使用して論文および要旨を執筆する場合は、投稿前に必ずネイティブ・チェックを通すこと。書かれた論文および要旨に文法的な問題が見られるなど不備が目立つ場合は、その理由により不採用になる場合がある。
- ・姓名・所属・専門分野・Eメール・住所・電話および FAX 番号は別紙に記載する（姓名・所属・専門分野は、日本語と英語で記載すること）。審査過程における匿名性を守るため、原稿の他の部分では執筆者氏名は一切伏せること。
- ・原稿料の支払い、掲載料の徴収は行わない。
- ・本誌が国際的に発表される学術誌であることを踏まえたくうえで原稿を執筆すること。
- ・本規程に沿わない原稿は、改訂を求めて返却されることがある。

a-1) 研究部門（研究論文・研究ノート）

- ・研究論文は、図表、図版、参考文献および注なども含めて日本語で 16,000 ～ 20,000 字、英語の場合は 6500 words ～ 8500 words の長さとする。
- ・研究ノートは、図表、図版、参考文献および注なども含めて日本語で 12,000 字以内、英語で 5000 words 以内の長さとする。
- ・タイトルは日本語で最長 40 字、英語は最長 20 words とする。簡潔明瞭で、主要なトピックを明示したものであること。
- ・日本語か英語による要旨および 5 つのキーワードを別紙にて添付する（日本語は 800 字以内、英語は 500 words 以内）。なお、要旨・キーワードは、日本語原稿の場合は英語を使用することが望ましいが、それが不可能な場合は、原稿と同じ言語で提出してよい（編集部にてもう一方の言語へ翻訳する）。
- ・研究論文として投稿されたものに対し、査読の結果などを踏まえ、研究ノートとしての掲載を認める場合がある。その場合の文字数の上限は研究論文に準ずる。

a-2) フィールド部門（フィールドレポート）

- ・原稿は、図表、図版、参考文献および注なども含めて日本語で 12,000 字、英語で 5000 words 以内の長さとする。
- ・タイトルは日本語で最長 40 字、英語は最長 20 words とする。簡潔明瞭で、主要なトピック

クを明示したものであること。

- ・日本語か英語による要旨および5つのキーワードを別紙にて添付する（日本語は800字以内、英語は500 words 以内）。なお、要旨・キーワードは、日本語原稿の場合は英語を使用することが望ましいが、それが不可能な場合は、原稿と同じ言語で提出してよい（編集部にてもう一方の言語へ翻訳する）。

- ・研究論文・研究ノートとして投稿されたものに対し、査読の結果などを踏まえ、フィールドレポートとしての掲載を認める場合がある。その場合の文字数の上限は、研究論文・研究ノートに準ずる。

a-3) 書評部門

- ・原稿は、図表、図版、参考文献および注なども含めて日本語で5,000～10,000字、英語で2000 words～4000 words の長さとする。

- ・タイトルは評する書籍、論文のタイトルが主題、若しくは副題のいずれかに含まれているものとし、日本語で最長40字、英語は最長20 words（日本語と英語で表記すること）。

- ・要旨およびキーワードの提出は求めない。

b) 図表および図版

- ・図表は別紙で添付し、本文内に取り込まないこと。

- ・図版は直接印刷に耐える画質のものを添付すること。

- ・本文中における図表・図版のおおよその位置を原稿上に示すこと。

- ・図像やイラスト、図表など著作権が著者にないものについては、署名された掲載使用の許可書を同時に提出すること。

c) 提出原稿

- ・原稿は、印刷コピーと電子ファイルの2種類を提出する。

- ・印刷コピーは、A4用紙に印刷したものを上記住所に3部提出する。

- ・電子ファイルは、Eメールに添付して上記アドレスに提出する。

- ・電子ファイルの保存形式

- ーできる限りMicrosoft Word形式（ファイル名.doc）で保存したものを提出すること。
 - 拡張子.docxの提出は認めない。

- ー.doc形式でのファイル保存が困難である場合は、Rich Text形式（ファイル名.rtf）、またはプレーンテキスト形式（ファイル名.txt）で保存したものを提出すること。

ー上記以外の形式、特に紙媒体から読み込んだ画像データによる本文及び要旨の提出は認めない。

- ・添付ファイルおよび印刷コピーの内容は、完全に一致したものであること。
- ・提出された原稿等は返却しない。

6) 校正

校正用原稿が執筆者に送付された場合、校正のうえ提出期限内に返送すること。その後、文法、句読法などの形式に関する微修正を、編集委員会の権限で行うことがある。

7) 審査過程

投稿原稿は編集委員会が指名する審査者によって審査される。審査では独自性、学術性、論旨の明快さ、重要性および主題のジェンダー・セクシュアリティ研究に対する貢献度が考慮される。原稿の改稿が求められる場合、審査意見および編集コメントが執筆者に伝えられる。投稿の受理・不受理の最終判断は編集委員会が下すものとする。

8) 著作権

投稿を受理された論文の著作権は、他の取り決めが特別になされない限り、国際基督教大学ジェンダー研究センター編集委員会が保有するものとする。自己の論文および資料の複製権および使用权に関して、執筆者に対する制限は一切なされないものとする。

9) 原稿の複写

原稿が掲載された執筆者には3冊（執筆者が複数いる場合は5冊まで）の該当誌を贈呈する。なお、それ以上の部数については別途ジェンダー研究センターに注文することができる。

10) 購読申込

該当誌の購読の申し込みはEメール cgs@icu.ac.jp で受け付ける。

当規程は予告なく改定されることがある。

The Journal of the Center for Gender Studies, ICU
Gender and Sexuality
Journal Regulations for Vol. 07
as of March, 2011

1) Journal Overview

Gender and Sexuality is an academic journal on the study of gender and sexuality, published by the Center for Gender Studies at the International Christian University. The journal's research section shall consist of research papers on empirical investigations, theoretical discussions on gender and sexuality studies (*1), and research notes (*2). The field section shall feature case studies by activists, and field reports (*3) concerning gender-related activities at institutional, domestic, and international levels. The final book review section shall contain reviews on upcoming books pertaining to gender and sexuality.

*1 Research papers should be based on thorough academic research, contain original and creative viewpoints, and contribute to a wider academic field.

*2 Research notes should contain discussions that are still in progress but show their potential to contribute to a wider academic field.

*3 Field reports should report on the author's daily practice, focusing on one aspect of the field being studied.

2) Publication Date of Volume 07: March, 2012

3) Manuscript Submission Deadline for Volume 07: Wednesday, August 31, 2011, as indicated by the postmark on the envelope.

4) Address for Manuscript Submissions:

Center for Gender Studies Editorial Committee
 Postal Address: ERB 301, International Christian University
 3-10-2 Osawa, Mitaka-shi, Tokyo, 181-8585
 E-mail: cgs@icu.ac.jp

5) Rules for Application

Manuscripts

- Manuscripts submitted to this journal must be previously unpublished, in full or in part.
- Only Japanese or English manuscripts shall be accepted.
- Manuscript format must be in accordance with the Publication Manual of the American Psychological Association (5th Edition, 2001). Manuscripts submitted in other formats may be rejected regardless of their contents and their scholarly worth. For examples of the necessary formatting, please review past issues of the journal, which can be accessed from the CGS home page at the following URL (s), or contact the CGS directly with any inquiries about formatting.
<http://web.icu.ac.jp/cgs/journal.html> (Japanese)
http://web.icu.ac.jp/cgs_e/journal.html (English)
- Manuscripts (papers or summaries) that are not in the author's native language must be proofread by a native speaker of that language. Manuscripts with obvious inadequacies such as grammatical errors shall be rejected.
- The author's name, affiliation, specialization, e-mail address, postal address, telephone number, and fax number should be written on a separate title page. Name, affiliation and specialization should be indicated in both English and Japanese. To ensure anonymity during the screening process, the author's name should not appear in the text.
- There shall be no payment involved for manuscripts or for insertion.
- Manuscripts should be written in a style appropriate for an internationally-circulated academic journal.
- Manuscripts that do not conform to these guidelines may be returned with a request for revision.

a-1) Research Section

- Research papers should be between 16,000 to 20,000 Japanese characters or 6,500 to 8,500 English words in length, including figures, graphic images, references, and footnotes.
- Research notes should be less than 12,000 Japanese characters or 5,000 English words in length, including figures, graphic images, references, and footnotes.
- Titles should be short, simple, and no more than 40 Japanese characters or 20 English words in

length. It should also preferably address the main topic.

- An abstract (including the title) of 500 words in English should be attached on a separate sheet with a list of no more than five keywords in English.

- An abstract (including the title) of 800 Japanese characters should also be attached on a separate sheet with a list of five keywords in Japanese.

- A manuscript submitted as a research paper may be accepted as a research note, depending on the results of the referee reading. The length of such manuscripts may conform to the regulations for research papers.

a-2) Field Section

- Manuscripts should be no longer than 12,000 Japanese characters or 5000 English words in length, including figures, graphic images, references, and footnotes.

- The title should be short, simple, and no more than 40 Japanese characters or 20 English words in length. It should also preferably address the main topic.

- An abstract (including the title) of no more than 500 words in English should be attached on a separate sheet with a list of no more than five keywords in English.

- An abstract (including the title) of 800 Japanese characters should also be attached on a separate sheet with a list of five keywords in Japanese.

- A manuscript submitted as a research paper or research note may be accepted as a field report, depending on the results of the referee reading. The length of such manuscripts may conform to the regulations for research papers or research notes.

a-3) Book Review Section

- Manuscripts should be between 5,000 to 10,000 Japanese characters or 2,000 to 4,000 English words in length, including figures, graphic images, references and footnotes.

- Titles should be no more than 40 Japanese characters or 20 English words in length. The title of the book or research paper reviewed should appear in the main title or subtitle.

- Submission of a summary and keyword list is not necessary.

b) Figures and Graphic Images

- Figures should be attached on a separate sheet. Do not include them in the text.

- Graphic images should also be attached on a separate sheet, and should be of a quality high

enough to resist degradation during printing.

-The approximate position of the figure/image in the document should be indicated.

c) Manuscript Submission

-Manuscripts should be submitted in both digital and hard copy.

-Three hard copies should be submitted. They should be double-spaced on single-sided A4 paper.

-The digital copy should preferably be submitted in MSWord (filename.doc) format. Files may also be submitted in Rich Text format (filename.rtf) or Plain Text format (filename.txt).

-Files in formats other than those listed above, such as .docx extension files or scanned copies of images or text, shall not be accepted.

-The digital copy shall be submitted as an e-mail file attachment to cgs@icu.ac.jp.

-The digital and hard copies should be completely identical.

-Manuscripts submitted will not be returned.

6) Revisions

If a manuscript is returned to the author for revision, the manuscript should be revised and sent back by the specified date. Note that slight modifications (grammar, spelling, phrasing) may be carried out at the discretion of the editorial committee.

7) Screening Process

Submitted manuscripts shall be screened and chosen by reviewers designated by the editorial committee. Factors for selection include originality, scholarlyness, clarity of argument, importance, and the degree of contribution that the manuscript offers for the study of gender and sexuality. In the event that a revision of the manuscript is required, opinions and comments by the editorial committee shall be sent to the author. The final decision for accepting or rejecting an application rests in the hands of the editorial committee.

8) Copyright

Unless a special prior arrangement has been made, the copyright of an accepted manuscript shall belong to the Editorial Committee of the ICU Center for Gender Studies. No restrictions shall be placed upon the author regarding reproduction rights or usage rights of the author's

own manuscript.

9) Journal Copies

Three copies of the completed journal (or five in the case of multiple authors) shall be sent to the author of the accepted manuscript. Additional copies may be ordered separately.

10) Purchasing Orders

Orders for the journal can be submitted by e-mail to cgs@icu.ac.jp.

Note that these guidelines may be revised without prior notice.

編集後記
加藤恵津子

ここに第6号をお届けできることを嬉しく存じます。年を追うごとに、より多くの論文・研究ノートのご応募があり、編集委員一同感激しております。また今年も海外の方、海外出身の日本在住の方からもお問い合わせ・ご投稿をいただき、当ジャーナルを日英バイリンガルで発行していることの効果を感じます。その分、多くの査読者の方にご協力いただくこととなりました。その適切かつ丁寧な論評に、心から感謝申し上げます。最終的には論文3本、研究ノート2本、フィールドレポート2本を厳選させていただきました。読者の皆様にはぜひお楽しみいただきますよう、そして今後とも当ジャーナルをご愛読下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。最後になりましたが、編集・発行作業にあたってくれたCGS関係者の皆様、今回も本当にありがとうございました。

Postscript from the Editor
Etsuko KATO

It is with great pleasure that we present the sixth volume of *Gender and Sexuality*. We are delighted to have received an unprecedented number of manuscript submissions for this volume. In particular, the large number of enquiries and submissions from researchers overseas and foreign researchers in Japan has reinforced our original objective to publish a bilingual journal in Japanese and English. The diversity of submissions required the assistance of many referees to whom we are indebted for their detailed evaluations. In the end, three research papers, two research note and two field reports were selected for publication. We trust that you will find them insightful and stimulating. Finally, I would like to thank all those at CGS who were involved in the editing and publication of this volume.

Gender and Sexuality

Journal of the Center for Gender Studies,

International Christian University

Printed and Published on March 31, 2011

Editor International Christian University

Center for Gender Studies Editorial Committee

Publisher Center for Gender Studies

International Christian University

ERB 301, 3-10-2 Osawa, Mitaka city, Tokyo 181-8585 JAPAN

Tel & Fax: +81 (422) 33-3448

Email: cgs@icu.ac.jp

Website: <http://subsite.icu.ac.jp/cgs/>

Printing Hakuhousha Co.,Ltd.

© 2005 by Center for Gender Studies, Japan.

All rights reserved.

国際基督教大学ジェンダー研究センター ジャーナル

『ジェンダー & セクシュアリティ』

2011 年 3 月 31 日印刷・発行

編集 国際基督教大学ジェンダー研究センター編集委員会

発行 国際基督教大学ジェンダー研究センター

〒 181-8585 東京都三鷹市大沢 3-10-2ERB301

Tel & Fax: (0422) 33-3448

Email: cgs@icu.ac.jp

Website: <http://subsite.icu.ac.jp/cgs/>

印刷 株式会社 白峰社

著作権は論文執筆者および当研究センターに所属し、
著作権法上の例外を除き、許可のない転載はできません。